
高校生の日常？

籠 蟲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生の日常？

【Nコード】

N3046R

【作者名】

籠蟲

【あらすじ】

現代科学でも解明できない不思議なことが、まだまだこの世には溢れかえっている。

都市伝説。魑魅魍魎。街談巷説。妖怪変化。奇々怪々。

そんなものが、たくさんたくさん、溢れている。

語り部兼主人公が、そんな荒唐無稽なものと遭遇していき、同時に人間ともかわっていく。そんな他愛もないお話の始まり始まり。

ゴートオブガール 1（前書き）

この作品はフィクションです。実際の人物、団体、事件などとは一切関係ありません。

ゴートオブガール 1

本当に。

本当の本当に唐突な話で申し訳ないのだが。

独白と言うか、小話に付き合っていたきたいのだ。

どうしようもなくくだらない、俺の日常について。

わかつている。

俺みたいな高校生の日常なんて語られて何が面白いのかと言う人も
いるだろうが。

まあ、騙されたと思って少し聞いてみてくれたらうれしい限りであ
る。

さんざ政治家の話とかを聞いているであろう方々にとってみれば、
短い、ほんの些細な話だ。

たまには、俺みたいな半端者の話に耳を傾けてみるのも、また一興
というものだろうと思うのだが、どうだろう？

ゴホンッ。

さあ、準備は整いましたでしょうか？ それでは、語らせていただ
きましよう。

俺という、高校生の日常を。

俺という、高校生の非日常を。

俺の頭の中の人物リストに桐島葵きりしまあおいという女子生徒が載っている。

いやまあ、人物リストに載っているからと言って、一度も話したことのない、縁もゆかりもない女生徒。

……いや、縁もゆかりもあるのか？

端的に言ってしまうと、クラスメートである彼女と俺は、全く話したことがなかった。

それもそうだろう。

何せ、桐島葵は俗的な言葉でいうところの、人気者なのだ。いつも友達（女子）に囲まれており、周りには、その完成されたとも言えるような整った容姿で、笑顔を振りまいている。

いつもニコニコ。

朝のニュース番組の占いとか、某動画サイトを彷彿とさせるようなフリーズではあるが、それが彼女の性格、ひいては特性を表すのにちょうどいい。

彼女は俺が見ている限り、常に笑っている。微笑んでいる。

そんな彼女の周りに人が集まるのも、当然であるように思っているのは、俺だけではないはずだ。

そういう彼女であるが……。

いや、そもそもとして、なぜ俺がその全くしゃべったこともないクラスメートの女子について、こんなにつらつらと語っているのかと
言つとだ。

それは、彼女と俺が関係してしまったからに他ならない。

そんなことを俺が語りだせば、クラスメート全員は思うだろう。なぜなのだと。

どちらかと言えば、俺は根暗で口数も少なく、あまり感情を表に出さないタイプだ（自分で言ってる悲しくなる）。そこそこの進学率を誇る私立霧丘高校における一年C組に置いて、桐島とはまさに両極端の存在と言える。

実際、俺は桐島のことを「ただのクラスの人気者」としか見ていなかったし、あちらも俺のことをクラスの隅でぼーっとしてるやつくらいにしか思っていないだろうという側面もある。

え？

さつさと話せ？ まあまあ、前置きくらいはさせてくれてもいいだろう？

じゃあ、まあ、もう一つだけ。

これから語る話に置いて最初に言っておきたいことがある。

なぜ、俺と彼女が関わったのか。
関わってしまったのか。

そのことを語るにおいて、聞き手は一切の常識を排除する必要があるだろう、と。

——それは、いつもの風景だった。いつもの日常だった。

いつも遅刻ギリギリに登校してくる俺が、珍しく比較的早くに学校に到着し、自席で特にやることもなく、ぼーっとしている時のことだった。

高校一年生の六月。高校に入学してから二か月。

若干、まだ着慣れていないパリパリの制服に、どうにも気持ち悪さを感じながら、朝の時間を無為に消費している時、桐島葵が教室の扉を開け、中に入ってきた。

ここまでは何気ない光景。俺も、そのアイドルも道を譲りそうな姿を、何の気なしに目で追う。

「……っ!？」

んで、次の瞬間に俺は驚愕に目を丸くした。

かろうじて声を出すのは防げたが、あまりにもありえないものが、俺の目の前に存在していたからだ。

具体的に言ってしまうえば、いつものようにツヤツヤサササの黒髪ロングを揺らしながら、桐島は教室内に入ってきたのだが、その後、どうしようもなくイレギュラーな存在が、桐島につき従う様に入ってきたのだった。

イレギュラー、不思議、異形。そのすべての言葉に当てはまる。

否、むしろ、あまりにもイレギュラーすぎて、イレギュラーと言う言葉がふさわしくないようにすら思えた。

「山羊……っ!？」

さつきは我慢できたが、今度は無意識的に呟いてしまった。

山羊。^{やぎ}

言葉のとおり、想像する通りの立派な角の生えた、真っ白な山羊。哺乳綱、ウシ目ウシ科ヤギ属の動物。

その山羊が、蹄を鳴らしながら、桐島の後についてきているのだ。驚かないわけがない。

いくらここが片田舎であっても、近くに牧場もなにもないこんなところに、山羊がいる。

だが、クラスメートはその山羊を気にも留めない。いや、その山羊に気づいてさえいない。

目も向けないことから察するに、見えていないらしい。

さらによく見てみると、桐島はほんの少しだが、ちらちらと後ろを気にしながら、苦笑交じりの笑みを浮かべている。

桐島本人にも見えているということか……。

さて、ここで。……っ、どうしようか。

声をかけるべきであることは明白だ。

これは完全に異常事態である。んなことは言わなくてもわかってる。

さて、まず前提として、どうやって声をかけるかなんだが……。

俺はうんうんと、必死に、桐島にどうやったら自然に声をかけられるかと言ったことを考えていると、そんな俺の姿を捉えたかのように、山羊はその横長の瞳孔をこちらに向けた。

その瞬間、ソツと、背筋をなにか冷たいものが走る感覚がする。
体温が一気に低下する。
足元から冷気が込みあがってくる。

その山羊は確かに。

確かにありえない程、口角を上げ、にやりと笑ったのだった。

日常が、バリバリと音を立てて砕けていく。

——非日常の、始まりだ。

ゴートオブガール 1（後書き）

なんかこの小説、化物語やら何やらを足して割ったような作品です。
初めに言っておこう。完全に作者の自己満です。

よろしければ、今後ともお願いいたします。

ゴートオブガール 2

放課後。俺は校舎裏で、壁に背中を預けて立っていた。この時間、この場所に呼び出した桐島が来るのを、待っているためである。

「結局こうなるんだよね……」

いつも周囲に人間のいる桐島を、根暗野郎こと俺がどうやって呼び出したかと言うとだ。

答えは簡単。手紙である。

俺は一応、現代日本に置いての必須アイテム。ケータイ電話を所持してはいるが、肝心の桐島の電話番号もメールアドレスも知らないのである。

そこで、俺は手紙と言う何とも古めかしい方法に打って出たのだった。

その作成した手紙をこっそり桐島の下駄箱に入れておく。

その内容と言えば、

『桐島葵さんへ』

放課後、東の校舎裏へ来てください。お話があります』

という簡素な物。おそらく、これを見た普通の女子は告白のために呼び出されたのだと思って、来てくれるだろうと、甘い予想を立てたのだ。

幸い、あの見た目のためか、桐島は誰かに告白され慣れている節が窺える。

そして、告白されそうだということを周りに喋るようなタイプで

はないらしいと言うことから、この作戦の決行にあたった。
……話を聞いただけなのに、やりづらいことこの上ない。

「阿僧祇君」
あそうぎきみ

と、そこで、後ろから俺の名前を呼ぶ声がした。
透き通るような美声。

後ろを振り返る。

当然ながら、桐島の姿がそこにあつた。そして、後ろには今朝と同じように、真っ白な毛色の山羊が相も変わらずにやけずらで存在している。すっかり傾いている夕日に影も落とさずに。

「よく、俺の名前を知ってるな」

これは本当に疑問で、俺みたいな地味な男子のことを、桐島は知らないかと思っていた。

「知ってるよ。珍しい名前だもんね。阿僧祇蒼真君」
あそうぎきみ

桐島はいつものニコニコ笑顔で、今度は俺のフルネームを口にした。

「それじゃあ話が早いな。実は……」

「それも知ってる。ごめん。もうすぐ私居なくなるから」

「は？」

とりあえず桐島のセリフは置いておいてだ。

俺の投げかけようとした疑問と桐島の回答がかみ合っていない。

あ、そうか。俺は告白と思しき手紙によって、桐島をここに呼び出したんだった。

「あゝ、違う。俺が言いたいのは……」

「？」

俺はチラと羊に一瞥をくれてやりながら、十分に間をおいて、言った。

「その山羊のことだ」

「！？ ……み、見えるの！？ この不気味なのが！」

桐島は山羊を指差し、声を荒らげた。

不気味と言われた羊は、桐島の後ろでにやにやと羊とは思えぬ笑みを浮かべている。

「なんで阿僧祇君には見えるの！ 家族にも見えなかったのに！」

「んゝ。なんと説明しようか……」

困った。実に困ってしまった。
とりあえず、

「そついつのに詳しい知り合いがいるから」

「……」

桐島は、これでもかと言つくりの疑いの目を、俺に向けたのだつた。

またまたモノログに入ってしまったて申し訳ないが。少しだけ、俺の話をしよう。

俺こと阿僧祇蒼真あそうぎ そうまはその昔、と言っても、ほんの五か月前の話なのだが。

中学三年生の冬。悪魔と契約したのだ。

悪魔。

畏怖と敬遠の対象。恐怖と破壊の象徴。

その、想像する通りの悪魔と、俺は契約した。契約してしまったのだ。

これもまた、想像する通り。

当然、悪魔は悪魔であり、願いの代償はあまりにも大きすぎるのが通例であり、俺の件も、この例からは漏れなかったと言つていいだろう。

あまりにも大きな代償を、俺は今もなお、現在進行形で払い続けているのだ。

『小僧、貴様の命を助けてやる。その代償として、我の命を助ける』

アハネス。

そう名乗ったその悪魔は確か、そんなことを言っていた。

ともかくにもこうして、死にそうだった俺は、これまた死にそんな悪魔に助け、助けられたのだった。

ま、詳しい話はいいけれども、それが、俺にこの山羊が見える理由だな。たぶん。

「前山先生？ あの世界史の？」

俺と桐島は、夕暮れに染まった学校の廊下を並んで歩いていた。夕方の五時ごろと言うことで、ほとんどの生徒は部活に行っているか帰宅しているかだ。

誰も居ない校舎を、女子と二人で歩く。

なんてギャルゲ的なシチュエーションに陥っているわけなんだが、肝心の会話はと言えば、何とも浮世離れた内容である。

「ああ、話が早くて助かる」

「授業は受けたことがないけど……」

「いや、俺もあいつが授業をしている所なんて見たことがないぞ」

あのだるそうな男が授業をしている姿など、想像もできないくらいだ。

「それで、その前山先生って、何者なの？」

「ああ、なんだろうな……。見た目はただのおっさん教師なんだが」

俺は入学式の日、前山に呼び出され、半分悪魔であることを見抜かれたのだ。あの時は本当に驚いたことこの上ない。

「お、ここだ」

学校の中なんてのはそんなに広くないので、目的地にはすぐについてしまう。あるいて約三分。

裏庭に面する廊下を突き進み、一階のきわ際きわの際。日光も当たらないような廊下の突き当たりに、そこはある。

「社会科資料室？」

「そ、ここが目的地です」

俺は迷わずに扉を開けた。

そこには、所狭しと本棚が並んでおり、奥の方に申し訳程度の机と、汚いソファが置かれているだけの空間。

その汚いソファに横たわって訳の分からん古文書のようなものを呼んでいるおっさんこそ、我が霧丘高校の世界史教師、前山である。

「はあああ……。一年C組出席番号一番阿僧祇蒼真。お前は今日も今日とて厄介ごとを持ち込みやがつてよお。」

「別に言うほど持ち込んでもないだろう？」

「ああ、そう思ってるなら思ってるがいいさ。それからお前、ここはカップルでくるデートスポットじゃないぞ？」

「なぜ、俺達がカップルに見えるのか、そして仮にカップルだとい

うのならこんな場所に来ねえよと言っツッコみは置いておいてだ」
もう突っ込んでしまったが。

「前山、お前のことだからもう事情は分かってるんだろ？」

「まったくまったく……お前こそ先生のことをした風に言いやがって」

世界史教師なのになぜか白衣姿の男は、深いため息を漏らすようにしゃべっている。別に今日が特別疲れているとかではなく、いつも、こういうしゃべり方なのだ。

「しかして、あれだな。冗談はさておき。本当に厄介ごとと言うか、厄介なものを連れてきてくれちゃったみたいで……」

「？ どういうことだ？ いや、実際俺はこの山羊がなんなのかわからないんだが、そんなにやばいもんなのか？」

「一年C組、出席番号十一番桐島葵。だよな？」

前山は俺の言葉を軽く無視して、俺の後ろの桐島に話しかける。

「え、どうして知ってるんですか？」

それに対して、少し驚いた様子の桐島。

「いや、まあそんなことはどうでもいいんだ……。お前、「それが現れたのはいつのことだ？」」

「それ」と言うのは、この今もなおにやついている山羊のことだろう。

なぜ代名詞系で言ったのかは知らないが。

「えっと……、昨日、です……」

「あらららら」

なんか風船みたいに軽い口調だな。とかいうツツコみは、心の中でしておこう。

「それで、この山羊はいつたいなんなんだ？」

妖怪。怪異。都市伝説。

俺はいろんな答えの例を頭に浮かべながら、前山に訊ねた。
だがしかし。

前山から返ってきた言葉は、予想もできない答えだったのだ。

「死神」

「「は？」」

俺と桐島が、同時に聞き返す。

「こいつぁ死神だな」

死神。その名の通り、死の神。

「桐島、お前。今日死ぬぞ？」

前山の言葉が耳に届いたとき、気のせいなのかもしれないが、いや、気のせいであってほしいが。

山羊の笑みが、一層凄惨になったような気がしたのだった。

ゴートオブガール 2（後書き）

なんか、見れば見るほど化け物語りみたいですね……

あ、ちよっ！殴らないで！

ゴートオブガール 3

「さいだん 祭壇の山羊」

前山が、ゆつくりと、話し始める。まるで、寝る前の子供にお伽とぎ話でも聞かせるように。

「祭壇の山羊？」

「死神ってのはその名のとおり、死を司る神のことだ。「死」というのは、どんな人間にも必ず訪れる、いわばそれ自体が神のようなものだってことはわかるな？」

「ええ……一応」

「そうそう、それで、大昔の人々は、その死と言うものを崇め、奉り、自分は少しでも長生きできるように、生贄を差し出していたわけさ。そう、山羊とか羊とかの家畜。時には、人間とかな。まあそういう訳で、阿僧祇の悪魔ではないにしろ、「死」と言うものは人間に大きな恐怖と絶望を与えてきたのさ」

「あの、それがどうしたんでしょうか？その山羊が、それだってことはわかりましたけど……でもなぜ山羊なんですか？」

「悪魔や死神の絵を見たことがないか？ なら今度見てみるよ。ほとんどの山羊とか羊とか、家畜の顔をしてるからな。昔から、死神や悪魔は生贄の皮をはいでそれを被り、人々の前に姿を現したとされている」

「皮被ってるっていうか……完全に山羊じゃねえかよ」

俺は一応突っ込んでおく。
それで。

「それで。桐島が今日死ぬって話はどどういうことだ？」

「まあまあ、落ち着けて話だ。この問題、根幹は桐島に原因があるんだからな」

「？ どどういうことだ？」

桐島に原因があるというのは。桐島がさして悪いことをしている風には見えないが。

「今日死ぬ……？わたしが？」

桐島は聞き返した。その顔は背丈の関係上、上から見下ろす形になっている俺からは、影になって見えない。

「そうそう……お前は今日死ぬぞ。確実に、絶対に、100%、な」

「だから、どどういうことだ？」

こういう時になんだが、クラスメートが死にそうだって時に、こ
うも精神的に冷静でいられる俺と言うのは、結構冷たい人間なのか
もしれない。

「死神つつのはいろんな伝承があっただな。姿も力も宗教やらな
んやらによっても変わったりするんだよ。まあ、その殆どに共通し

ていることは、死神は死を伝えに来るということだ」

「死を伝えに来る？ それはなにか？ もつすぐ死にそんな奴の前に現れるってことか？」

「少し違うが、まあそういうことだ。死ぬ一日前に死神は姿を現し、その人間が死んだとき、魂をさらっていく」

「そんなのが実際にいるなんて……」

桐島は今の話があまりにも荒唐無稽なのか、小さな声でそう漏らした。

「おいおい、桐島。数学がなんかで習わなかったのか？ 「存在しないこと」を証明するのは不可能だ」

「存在すること」を証明するのは至極簡単だ。それに対し、「存在しないこと」を証明するのは不可能に近い。
悪魔の証明。

例えば、日本に野生のワニがいないことを、誰が証明できるだろうか。その誰かは、日本中を隅から隅まで探し、少しの漏れもなく探索したとでもいうのか。

だが、ワニが生息していることを証明するのはこれ以上なく単純で簡単だ。

日本で野生のワニを一匹でも見つけてしまえばいい。

つまり、前山が言いたいのはそのうちらしい。死神がいらないなんて誰が証明できようか。

「しかし、こいつが死神ねえ」

俺は山羊に目を向ける。相変わらずのにやけずらだ。

「そうそう、なんだ？ お前は死神がブ・イチに出てくるようなイケメンだと思ってたのか？」

「おい、この雰囲気ですういうネタはやめろ！」

危険だ！ムードをぶち壊しかねない！

「俺思うんだわ、ほら、ブ・イチって連載当初もつと女子とか、ヒロイン的な立ち位置の奴出てきてたじゃん。なのに今は八割がた男。まさか腐じょ……」

「やめておけ！ 怪我をするのはお前だぞっ！」

あぶねえあぶねえ……。危うく夏と年末、東京ビックサイトに集まって薄い本を買う女子の方々を敵に回すところだった。
たぶんもう手遅れであると思うが……。

「まあ、とにかくにも。ブ・イチの設定を借りるとするならば、そいつはホロウに近いってことだ」

「まるで当たり前かのように設定を借りて説明するな。これは二次創作でも何でもなく、オリジナル作品なんだぞ」

「それにしちゃあいろんなところから設定をばくってるけどな」

「だから、こういうメタ発言もやめろっ！ いや、俺もいけないん

だろうけどさ」

閑話休題。

「ゴホンッ。それでなんだが……」

それはそれとして。

俺は一つ、咳払いをはさんで話し始める。

「それで、どうしたらいい？」

「何がだ？」

とぼけた様子でもなく、前山が訪ねた。

こいつはどうしてこんなに小芝居好きなんだ。

「桐島が助かる方法に決まっているだろ」

クラスメートが死ぬつつてんのに放っておく人間がいるか。そんなことをした日には、俺は一部ではなくすべてが悪魔になってしまっ気がする。

「はあ？」

「はあ？　じゃねえだろ」

「いやいや、何を当たり前かのように解決策があると思ってんのか、俺は不思議でならないんだが」

前山は、ボサボサの黒髪を掻きながら、驚いたように言う。

「はあ？」

今度はこっちが言ってしまったじゃないか。

「おいおい、勘違いしてもらっちゃ困るんだが、相手は死神。神だぞ？ そんな。そんなそこいらにいる魑魅魍魎とは格が違う。次元が違う。いや、そもそもとして住む世界が違う」

「まじかよ……」

まさかとは思うが……。

「はつきり言つて無理だな。死神の予言は止められない。お前の中にいるその悪魔は確かに強大な悪魔だが、そいつの全盛期でも不可能だ。死神には勝てない」

なんてつたつて神だからな。と前山はふざけた感じで口にした。完全にふざけている。

「まったくまったく、俺には何もできないんだよ」

「そんな……」

「いいか？ 桐島^{そいつ}は今日死ぬ運命にあるんだ。それは俺じゃあどうしたって覆せないし、翻せない」

「でも……！」

俺が衝動で前山に詰め寄ろうとしたとき、袖を掴まれた。それはとても弱弱しくて、震えた手。

その手が、俺の袖を、これまた弱弱しく握っている。

「桐島……」

「もういいよ、阿僧祇君」

「……っ！」

俺は驚愕したのだった。山羊が教室に入ってきた時よりも。それは、桐島がそんなセリフを吐いているとか、そういうことではない。

その驚きは桐島がそのセリフを、微笑みながら紡いでいることからくるものだった。

「桐島……お前……もういいって！」

「もう、いいの……」

桐島の笑顔は崩れない。

「さあさあ、とにかく。下校時間だ。おらお前ら、家に帰れ。それから阿僧祇、一応、桐島を家まで送って行ってやれ」

俺達の会話など無視して、前山は一気にまくし立ててくる。

「なんだ？ もう一度言うか？ 俺には何も出来ねえよ」

前山は念を押すように、言葉のすべてを強調するように言った。

こうして、ぎこちなく微笑む桐島と、俯く俺は、追い出されるようにして、社会科資料室をあとにしたのだった。

ゴートオブガール 4

桐島の家は、学校の最寄駅から五駅ほど行ったところにある駅から、さらに十分ほどかけたところにあるらしい。

意外にも。

いや、めちやくちゃ家の近所じゃねえかよと言っツッコみはそこそこに、俺達は無言で帰路についていた。

「……」

「……」

今は丁度駅から出たところで、もうすっかり日も落ちている夜道を歩いている最中なのだが……。

会話がない。目も合わせないと言った状況である。

それは前山の宣告とかが直接の原因ではなく、うん、それも原因の一つなのだが。その真の理由は、俺達が実感してしまったからだ。明確に、あからさまに迫りくる、死を。

と言つのも、俺達はこの駅にたどり着くのに、結構な数の不慮の事故に合ってきたのだ。

それは学校の校門を出たところからいきなり始まった。横断歩道を渡っている最中、青信号にも関わらず、大型トラックが突っ込んできたのだ。

その目先には、当然のごとく桐島。

だが、位置関係上桐島に先導してもらう形になっていた俺は、あわ

てて桐島の襟を引っ掴み、歩道側に引き寄せた。

次に、駅構内での階段にて、桐島は何もないところでつるりころんだ。

階段をちょうど上り終えるとこだったので、落ちたするとその落差は非常に大きい。

だが、やはりと言っかなんというか、そこでも俺が後ろから支える形になる。

と、まあ、こんな感じで。不慮の事故やら人為的やらかはわからないが、俺達は事故に合いまくりながら、やっとこさ、桐島宅の近くの駅に立っているのだ。

正直、疲れたことこの上ない

俺がこれだけで疲れるんだ。

実際にかけている桐島の、特に精神的な疲労は、想像を絶するだろう。

しかし、死神がこんなやり方で殺しにかかってくるとはな。

運命操作。確率変動。

俺という。悪魔という、この世の理から外れたイレギュラー因子が居なければ、もうとっくに桐島は死んでいるだろう。

だがしかし、いつまでこれでもっていられるかわからない。

俺の介在しようがない事態が起きた場合、一発でアウトだ。

「どうすれば……」

自然と、そんな言葉が口から洩れる。

災害に備え、俺が桐島の後ろを歩くような形をとっていたのだが、

丁度帰宅路の近道になっていたのであろう、閑静な住宅街にぽつんと佇む公園で桐島は足を止めて突然後ろを振り返った。

「阿僧祇君。もういいってば……」

「もういいって……どういことだよ」

桐島の声は、ひどく枯れていた。

「こんなことやってたら阿僧祇君まで巻き込まれちゃう」

「……」

「こんなことやってても無駄なんだよ……何も変わらない……。私は今日死ぬんだよ?」

今日死ぬ。花の女子高生が吐くセリフとは思えないが。それでも。

「それでも……。俺はお前を放っておけない」

おせっかいだとか、やかましいとか言われても。

死にそんな人間がいるってのに、それを見捨てるような真似はできない。それは”人間”として当然のこと。

「阿僧祇君……私なんて助けても、阿僧祇君には何の利益もないんだよ? もしそれで阿僧祇君まで死んじゃったら、私はどんな顔して死ねばいいの?」

「……」

俺は何も返さなかった。

別に返せなかったわけではない。返さなかった。

今までの桐島とのやり取り、前山とのやり取り、前山と桐島のやり取りを、脳内でプレイバックしていた。

……。なんかおかしくはないだろうか？

人間がこんなに簡単に、自分の命をあきらめ切れるのだろうか？
桐島のように。これが理不尽に命を奪われる、人間の態度か？

いや違う。あの悪魔でさえ。

悪魔でさえ人間の俺に命乞いをしてきたのだ。こんなに簡単に、命をあきらめられる訳がない。

「桐島……お前……」

もしかして。

「死にたがっていたのか？」

「……っ！？ ど、どうして？」

俺は今まで考えていたことを、桐島に話す。

「お前は最初から、自分の死に対して達観していた。そう、最初からだ」

桐島は俺と初めて会話していた時、こう言ったのだ。

「私はもう居なくなるから」と。

「お前は分かってたんじゃないのか？ この山羊が、お前を殺しに来たことを」

なにせ、桐島は願っていたのだ。死ぬことを。
つまりはそういうことが。

死神と言うのは、もうすぐ死ぬ人間の前に現れるのではない。
死にたい人間を殺し、その魂を奪うのだ。

「だから……」

俺の問いに対し、桐島は震えながら、呟くように口にした。
透き通ってるようでもあり、枯れているようでもある声で。

「だからなんだっていうのっ！？ 阿僧祇君には関係ないでしょ！？」

ヒステリックでも起こしたかのように、桐島は叫ぶ。きれいな黒髪を振り乱すその顔は、怒りの形相。

普段の明るく、誰にでも優しいクラスの人気者の面影など、微塵も残っていない。

「っ！？」

「なんなの！？ 突然私を呼び出して、味方みたいなフリして、そんなに私が足掻くのが見たいのっ！？ 死にたくなーいつてみっともなく泣き叫んで、転げまわる姿を見たいんでしょう！」

「お、おい……何言って……」

「うるさいっ！もう聞きたくない！お前もあいつらと同じ、私をよってたかって生贄にした奴らと同じだっ！」

「あいつら……？」

俺があまりの迫力に気圧されていると、ここで再び。
ここで再び、不慮の事故が起こった。

ここは何もない閑静な住宅街の小さな公園。だが、死の恐怖がな
いわけではなかった。

公園の中心にそびえ立つ大きな木。名前は何と言ったか、樹齢は
もう五十年を超えている。その樹こそがこの公園がこんなところに
ぽつんと存在している理由なのだが、そんなことは今はどうでもい
い。

ベキベキベキベキという音。

その樹が。樹齢五十年を超え、大きさは十メートルくらいにまで
成長したその質量の塊が、桐島目がけて倒れかかってきたのだ。

「ヤベッ！」

と小さく漏らしたが早いか、俺はすぐさま桐島に駆け寄る。
間に合え！

心の中でそう叫びながら、桐島の体めがけて突っ込む。

そのまま俺は桐島を抱え込み、ダイビングヘッドスライディング
でもするかのような体勢に入り、空中で体をツイストし、桐島と地
面との衝突を防いだ。

「キャッ」

短い悲鳴ののち、ズシーンという重いものが倒れる音が俺の耳に届く。

「た、たすかった……」

桐島を抱えながら、呟いた。

巨木は、倒れこんでいる俺の足下数センチのところにあつた。ギリギリもギリギリ。限りなくアウトに近いセーフとは、まさにこのことだな……。

「どうして……!」

と、ギリギリと言う歯ぎしりの音と共に、怒りを必死で押さえるかのような声が聞こえてきた。

すると次の瞬間、桐島はすばやく起き上がり、俺を見据えながらいった。

「どうして……、私はあなたに何もしてあげられない、ただの役立たずなのに……」

「桐島……お前な……」

よっこらせと立ち上がる。何だか、逆に呆れてしまった。

こうまでして死にたいということは、それなりな事情があるんだろうけども、ただ、その事情は俺には分からないし、俺が聞いても、きっと桐島は答えないだろう。

だから。

だからこそ。

俺に言えることはただ一つである。

「命を粗末にするんじゃないよ！」

ガキでもわかることだろうが！ このバカたれが！

「えっ……」

「いいか？ 俺はお前にどんな過去があるかは知らねえよ。だがな、簡単に自分の命を捨てるな」

「……？」

困惑した様子の桐島。

「お前の気持ちなんて知らねえよ。だけどそれが命を簡単に捨てて言い理由にはならない。絶対にだ」

「でも……これ以上は……私は誰からも必要とされなくて……。それで……それで……」

桐島の目が潤っている。

「誰かに必要とされないと生きていちゃいけないのか？ それこそ俺だって誰にも必要とされてねえよ」

こんなクズみたいな奴のことを、誰が必要とするのだろう。と、心の中では自虐的なことを呟きつつ、俺は言葉を紡ぐ。

「お前、今はどうなんだ？」

「え……？」

「今の生活のことはどう思ってるんだ？」

友達がたくさんいて、毎日笑って微笑んで。

そんな光に満ちた生活のことを。

「た……しい」

「ん？」

「楽しいよ！ だけど、私はみんなに何もしてあげられない。私はみんなに癒されてる。だけど、私はみんなに何も返せないもの」

ああ、そういうことか。

コイツ、友達との付き合い方を知らないのか。

友達が多いのに、付き合い方を知らない。なんとも不思議な奴である。

「返すもんなんていらねえんだよ。みんなそう思ってるんじゃないかねえ。お前から何か見返りを求めてるわけじゃねえ」

「だけど、私は……」

「もう一度聞くぞ？ 今の生活は楽しいのか？」

「うん……」

「今の生活をずっと続けてえんじゃねえのかよ」

「うん……」

「だったら足掻けよ。みつともなくても無様でも、生きる努力をし
るよ」

そもそもの間違いそれだ。

それだけだったんだ。どんなに辛くても、転んでも、生きればよ
かったんだ。

死にたいなんて思わなければよかったんだ。

そうすれば、死神に目をつけられることもなかった。

情緒不安定になる必要もなくて、訳の分からない山羊に、翻弄され
ることもなくて。

そして、俺なんかと知り合うこともなかったのだ。

「もしお前がこれでも死にたいっていうなら、俺はもう止めない。
だがな、お前が生きたいなら。死にたくなくて、生き残りたいなら。
俺が命に代えても守ってやる。俺と一緒に足掻いてやる。一緒にみ
つともなく無様に地獄に落ちてやる」

「どうして……どうして阿僧祇君はそこまでしてくれるの？」

「なんとなくだ！」

即答。きつぱりと、言ってやった。

そりゃまあ、バカな俺だって予想できるような質問だったからな。

「??」

まあ、そうなるよね。
だけどもあ、とりあえずは。

「どうするんだ？　生きて地獄を味わうか、死んで楽になるのか？」

「……阿僧祇君は、私を裏切らない？」

「ああ」

「絶対？」

「ああ。絶対だ」

俺が答えると、桐島は、先ほどの泣きそうな笑みから顔を変え、ボロボロと泣き出した。
そして、こう言ったのだった。

「助けて……死にたく……ない」

「ああ」

さあ、ここからが問題である。
桐島と俺の意志は固まった。だが、肝心の死神をどうするかを、俺は全く考えてもいないのだ。
悪魔でも勝てない、神。

そんな奴に、俺みたいな人でなしがどうやって、立ち向かうというのか。

俺は、死神。件の山羊に目を向ける。

向けたかった。向けられなかった。

「はあ？」

前山に言ったのと同じ、素っ頓狂なセリフが、口から思わず飛び出した。

「……」

そのまま、俺は黙りこくる。

その様子に桐島が気付いたのか、俺の視線の方向を目で追う。

「……」

「……」

そのままそのまま、二人で沈黙。

死神は。あのにやけた山羊は、跡形もなく、消え去っていたのだ。
った。

ゴートオブガール 4（後書き）

次回、一章完結

ゴートオブガール了

「そりゃそりゃ、そうだろうな。まあ、とりあえずお疲れ様とだけ言っておこう」

前山は煙草をふかしながら、愉快そうに呟いた。

「死神つてのは、昨日も言った通り死に際の人間の前に現れて、その人間の魂を奪っていくもんだ」

「んで、その死に際つてのは、死にたい人間のことなんだろう？」

死にたがりこそ、究極的な死に際。

「そういうこと」

俺は今、早朝から歴史資料室を訪れて、前山とこうして会話している。

話題はもちろん、昨日の死神の一見についてだ。

「逆にその人間が死にたいと思わなければ。生きたいと思えば、死神の運命拘束からは勝手に抜け出せる」

「まったく、それならそうと早く言えよ……。だいたい、お前は昨日何もできないとか言ってたか？」

「おいおい、勘違いされちゃあ困るなあ。昨日俺は、”俺には”何もできないって言ったんだぜ？ 実際、俺は今回の一件で何もしちゃあいねえからな」

こいつは屁理屈が多いが、嘘はつかない奴なのだ。

と、ここで。少しだけ、桐島について話しておこう。

桐島葵の過去について。これは俺が後々聞く話である。

聞くとは言っても、桐島から断片的に話されただけで、すべてを知っているわけではないのだが。

その少しだけ知っていることを、話しておこうと思う。

桐島の中学校は、何とも珍しい、三年間クラス替えをしない学校だった。

クラス替えをしないことによって、クラスを一体化させ、ストレスを減らそうとする意図があったようだ。

桐島葵はその中学校で、今とは違い、あまり目立たない内気な女子だったらしい。

適度に友達はあるが、あまり積極的ではない、どこにでもいるような女の子だった。

桐島はそこで、いじめを受けていたそうだ。
いじめ。イジメ。虐め。苛め。

昨今の教育評論家が声を大にして訴えかけている問題であり、それが陰湿なものになると、自殺をするんのがいるとか何とか。ようするに、桐島も、その内一人になりかけた。

だが、桐島へのイジメは、他のそれとは少し違っていた。
基本的なイジメがどのようなものかはわからないが、異質だった
と、彼女は言っていた。

三年間クラス替えをしない中でないじめ。

通常なら、イジメと言うのは誰かに言えば終わるもの。

つまり、先生なり親なりに、自分がいじめられているということ
を何らかの形でいい、身近な大人に示せば、どうにかなるものな
のだ。

しかしその時、桐島の親は両親ともに病に伏せていたのだとい
う。

これで、親に相談するという桐島の逃げ道は、完全に断ち切られて
しまったのだ。

それから、もう一人の身近な大人、教師は。
問題外であった。問題外で、論外で、あまりにもありえない選択だ
った。

なにせ、イジメの主犯格が、教師だったのだ。

この世の中、教師がいじめをするわけじゃないかと思いたいの
はやまやまなのだが、教師も人間である。悪魔でも死神でもない。

そして、担任教師はクラスと言う集団をまとめなければならぬ
義務がある。
それが仕事だ。

ここで、話は変わってしまうが。呉越同舟という言葉の意味をこ
存じだろうか。

中学生レベルの四字熟語なのだが、簡単に説明してしまうと、「

敵同士であつたもの達が共通の敵に対して、一時的に手を結ぶ」と言う意味だ。

共通の敵。

そう、俺は名前も知らない教師はそれを作り出し、クラスをまとめていたのだった。

その共通の敵こそが、桐島葵と言う女子生徒。

今と比べてあまり活発ではなかった彼女が、その共通の敵として、的にされてしまったのだ。
クラスで何か事件があると、教師は桐島にすべての責任を押し付けた。

クラスで飼っていた小鳥が逃げ出したのも桐島のせい。

A君が給食をぶちまけてしまったのも、桐島にぶつかつたせい。
運動会のクラス対抗リレーで勝てなかったのも、桐島が遅かつたせい。

ことあるごとにその教師は、桐島に責任を押し付け、笑いものにした。

そうすることで、他のクラスメートたちは、すべての罪は桐島のせいと思うことで。

桐島をみんなで責め立てることによって、まとまりを得る。

そのいじめについて知っているのはクラスメートだけなのだから、もちろん誰も密告をする気がない。

お互いの利害のために。

スケープゴート。

桐島は、クラスにおいて、生贄の山羊にされてしまっていたのだ。

だがしかし、問題はここからだっただ。

なぜ、高校に入ってから二か月もたち、友達もできていた桐島が、死んでしまいたいと思ったのか。

その理由は、つい二日前にさかのぼる。

桐島は帰宅途中、その小学校時代の教師に会ったのだという。

偶然にも。不幸にも。会ってしまった。

その偶然会った教師が、桐島に投げかけたひと言は、謝罪の言葉だったのだ。

すまなかった。許してくれ。ひどいことをしてしまった。

そして、次にその教師が吐いた一言が、

誰でもよかったんだ。

その一言で、桐島は愕然とした。

当然だろう、桐島は今まで、クラスのスケープゴートとして三年間を過ごしてきたのだ。

それが、その存在意義が、誰でもよかった。

そう、言われたのだ。

それ故に、それがため、桐島は死にたがった。

いや、正確に言えば、自分の存在意義が分からなくなってしまった。

そして、その日の夜、あの山羊は現れたのだ。

「思えば、おかしいところが多々あったんだよな」

桐島は山羊が俺に見えることを知った時、言ったのだ。家族にも見えなかったのに。と。

「普通、あの場合、友達とか学校の教師とかも出てくるはずだよ
ー」

「潜在意識でそれらを拒絶してたんだろ。そりゃあそうだろ、そんな過去があつたんじゃ、拒絶したくもなる」

「だが、死にたがってるやつなんてたくさんいるのに、なぜ桐島だけが？」

「それについては、死神は美しい女を好むとされている。その点においてじゃあ、桐島は恰好の力モだったってわけだな。俺としては、お前が神様に喧嘩吹っかけなくてほっとしてるぜ」

「……まあ、どちみち抜け出せたんだからいいんだけどな、文字通り、生贄の運命から」

「だがなあ、桐島がいくら死にたがりじゃなくなっても、過去は消せない。痛みは消せないのさ。油断ならないぞ。過去は執拗に、粘着質にあいつを追いかけてくる。そう、さながら羊飼いたいにな」

犬と協力してでもな、と前山。

「んなことは分かってるよ。桐島も、それは承知のうえだろう」

「あー、そーだそーだ」

突然、前山はヘリウムガスよりも軽い口調で話を変えた。

「その件で、お前にも春が来たらしいじゃないか」

「ん？ 春？どういうことだ？」

よくわからない。春が来たというのはどういうことだろうか。
何かの比喩表現。

「まあ、阿僧祇。お前が分からないならそれでいいが、先生にまた面倒を背負わせるのはやめてくれ」

そんな相談をされても先生は対処しきれんぞ。と前山は何やらぶつぶつぶやいている。

「なんだかよくわからないが、善処するよ」

言葉のとおり、なんだかよくわからないので、それだけ言って俺は部屋を出た。

今は八時二十分。朝のホームルームは八時三十分なので、かなりゆつくり歩いても余裕がありそうだ。

俺は歩きながら考える。今回の一件で、俺が得たものとはなんだったのだろう。

桐島と関わることによって得たものとは。
一体なんだったのだろうか？

教訓、正義の心、指標、夢。

だが、一つだけ、確かなものがあり、俺はそれを知っている。
そう、それは。

「おはよ、阿僧祇君」

「おう、桐島」

「あ、あのさ……」

「ん？」

「き、昨日はありがと……。それでなんだけどさ」

「なんだよ」

「そのー……わわわ、私と友達になってくれないかな？」

「なんだ、そんなことか。」

「ていうか、なぜ噛み噛み？」

「ああ、もちろん良いぞ」

すると、桐島はぱあと顔を明るくして、急に笑顔になった。
満面の。

「ほ、ほんと？　じゃあ、よろしくね！阿僧祇君」

「ああ、よろしく」

そう、それは、美人と誉れの高い、明朗快活な友人が一人、増えたということだろう。

この物語の締めとして、その後のことについて、少しだけ語っておこう。

桐島と友人の契りを交わしてから二日後のこと、ホームルームが終わり帰る準備をしていた俺のところに、桐島はなぜか緊張した面持ちで近づいてきた。

歩くたびに、その腰まである黒のロングヘアが揺れる。

話は、今日一緒に帰ろうとのことだった。

もちろんのこと了承。

その途中のことである。

とある電気屋の前、ディスプレイとしてハイビジョンテレビがずらりと置かれたところ。

そこで俺は、俺達は何の気なしに立ち止まった。

そこには、季節外れの大型台風が接近している地域に赴くミュージックスターが映し出されていた。

そういえば、このニュースキャスター、美人で明るくて人気の高い人だっけか。

名前は忘れたけど。

『た、ただ今、大変な風と雨で、傘が意味をなさなくなっていますっ！』

「あ……」

横にいた桐島が、不意に声を上げた。
分かっている。

分かっているんだ。

「山羊……？」

俺が、それを最初に見たときと同じセリフを吐く。

山羊が、風が吹き付け雨が降っている灰色の世界にはあまりにも似合わない、真っ白な山羊が、そのニュースキャスターにつき従っているのだ。

それに俺と桐島は釘付けになっている。

『すごい雨量で……あつ！ズズザー！！キャアアアアつ！』

突如として、ニュースキャスターが土砂崩れに巻き込まれた。

それと同時に、甲高い悲鳴が聞こえる。

その後も数人の絶叫ととれる大声が、テレビのスピーカーからは聞こえてくる。

だんだんと、俺達の周りにも人が集まり始め、テレビを見始める。どうやらカメラマンは無事なようで、映像は続いていた。

そんな中、山羊が、こちらにゆっくりと向かってきた。

いや、正確に言えばカメラの方向に、ゆっくりと。

俺たち以外にこの山羊が見えている人はいないのだろう、誰も反応を示さない。

そして、どのくらい時間がったのかはわからないが、いや、おそらくは十秒もたっではないのだろうけれど、山羊が、カメラの目

の前までやってきた。

そして、俺の、俺達の背筋に冷たいものが走る。これもこの前と同じ。

山羊は、静かに、にんまりと微笑んだ。

その後、テレビのディスプレイには、『しばらくお待ちください』の文字と。

デフォルメされた山羊と少女が草原で戯れるイラストが、映し出されたのだった。

ゴートオブガール 了（後書き）

ラストは結構、ダークな感じになってしまった……。
まあ、気長に感想をお待ちしております。

シザースガール 1

「ん？」

しかして、八時をちよい過ぎたあたりと言うのは、どうしても甘いものが食べたくなるというものである。

たとえ健康によろしくなくても食べたい。それが甘いもの。

ただ今の時刻は八時二十分。

急激に甘いものが食べたくなってしまった俺は、冷蔵庫を開け、絶望に打ちひしがれていたのだが、面倒をぶっ飛ばして少し遠くのミニ・トップにパフェを買いに行ったのだった。

そこで目的のものを手に入れて、夜風の意外な気持ち良さを感じつつ、軽い足取りで家へと帰っているというのが今の状況である。

「いっちごパフェ、いっちごパフェ」

鼻歌まで口ずさむ始末。

と、その時。

シャリ……。

「ん？」

妙な音。

金属と金属が擦れるような、そんな音が、俺の耳に飛び込んだ。た。

少し、いや、かなり嫌な音である。

シャリシャリシャリ……

音が近づいている。

どうやらその音源は俺の帰宅路と同じ方向にあるらしい。

この辺りは電灯も少なく、結構暗くて不気味なのだが、この音のせいでさらにそれを強調してるようだ。

「ま、関係ねえか」

俺は何事もなかったことにして、家へとまっすぐに歩く。

『通りゃんせ 通りゃんせ ここはこの 細通じゃ 天神さまの
細道じゃ……』

シャリシャリシャリシャリシャリ……

家に近づくにつれ、とおりゃんせの歌と、また、あのシャリシャリと言う音が聞こえてくる。

かなり不気味な声に加え、その歌がとおりゃんせ。

「こええ……」

いやいや、そりゃ怖いだろ！

夜道を歩いていたら奇怪な音が聞こえてきて、さらにはとおりゃんせまで聞こえてきたんだぞ！

いくら悪魔と同化した俺でも怖くねえ分けねえだろ！

「いやいや、しかしなあ……気にならないわけではない」

どうしたものか。

今もなお続くこの歌と音を。

そう考えながら、ふと俺は横道を見る。

と、その横道を通った先に俺が今いる通りに並行して、もう一本通りがあるのだが、そこを一人の少女が走っていた。

見た目的には中学生くらい。髪型は、なんだっけか。ボブカット？だっけ。

そんな短めの髪。

と、そこまではいいんだよ。

まだ八時だし、ちょーつと友達の家にも長居しちゃったのかわくらくにしか見えないから。

問題は、さっきも言った通りその少女が走っていたことだ。

全力疾走。張りつめた顔。ただならぬ雰囲気。

『この子の七つのお祝いに お札を納めに まいります行きはよいよい 帰りはこわい……』

更には、その後を追う様に、「大きな鋏はさみを持ったロングコートの男がとおりゃんせを歌いながら」追いかけていたので、始末に負えない。

「おいおい……なんでこんな愉快なことになってんだよ……」

実際全然愉快じゃないが、桐島との一件から二週間しか経っていない今の俺にとっては、かなり愉快だ。

俺には分かる。あの^{おおはさみ}大鋏を持った男。
あいつは人間じゃない。

怪異、妖怪。おそらくはその類。
というか、あんな恐ろしく殺人鬼じみた恐ろしい男が、この間みに神様だと困る。

そんなことになったら俺は^{やおよろす}八百万の神が胡散臭いものに見えてきてしまうじゃないか。

と、そんなことを言っている場合ではなく、

「追いかけなきゃな……」

俺は勢いよく地面を蹴りだした。

先ほどの恐怖は、微塵にも感じなかった。

「ハア、ハア、ハア。あつ！」

少女が派手にころぶ。

それによって、鋏を持った男が少女に追いついた。

『こわいながらも 通りゃんせ 通りゃんせ……』

「ひっ！」

少女は恐怖で動けない。

フードを目深にかぶった男の顔は、窺い知れない。

その男が持っている刃渡り150センチはありそうな大鋏が、ゆつくりと少女の首にかけられ。
ようとしたときだった。

ゴッ！

俺が男の側頭部回し蹴りを叩き込む。
何とも漫画チックな効果音が発せられた。

「あつぶね！　ギリギリだわ」

男が怯んだ。

今のうちに女の子を抱えて敵前逃亡しよう。
そう俺は考えていたのだが。

サン……
ポトッ

一瞬、判断が遅れて気付く。
今音もなく切り落とされて、路面に落ちたのが俺の右腕だということに。

二の腕の辺りから切り落とされてしまった。血が勢いよく吹き出す。

「チッ！」

ガクツと膝が地面に衝突する。
これでは少女は抱えられない。

俺は舌打ちしてから一瞬で考える。

痛みが回らないうち、敵が次の手を打つ前に。

どうしたらここからこの娘を逃がせるか。

怯えて立てそうもないこの娘をどうすればいい。

考える。考える考える考える。

「っっ！」

俺は跪いた状態から右足を軸に一回転し、後ろ蹴りで男の膝を蹴り下した。

男が膝をつき、鉢が地面に落下する。
今のうちに。

「オルアアアア！」

思いっきり投げた。少女を。

残っている方の左手で。

生まれつき力は強いので、これだけでも十分だ。

ゴキンッ

肩が外れる音。だが、目的は達せられた。

少女を二メートル前方にまで移動させる。

「何やってる！ とつとと逃げろ！」

「ふあ！？ ふあ、は、はいっ！」

女の子は目を回しながらも、今の衝撃で我に返ったのか、立ち上

がって走り出した。
これで良し。

「ったくよお。死亡フラグの香りがプンプンするが、やるしかないよな……」

鉄男に向き直る。

右手は切り落とされ、左手は肩が外れた。

右手からはかなり血が出ていて辺りを真っ赤に染めている。

正直、相当やばい。

『この子の七つのお祝いに お札を納めに まいります 行きは
よいよい 帰りはこわい……』

男は歌い続けながら立ち上がり、鉄を拾って俺に背を向けた。

「？」

どういうことだ？

狙いはあの娘だけってことか？

『こわいながらも 通りゃんせ 通りゃんせ……』

シャリシャリシャリ……

そのまま、男は夜の闇に消えて行った。

あの子は逃げ切ったろうし、大丈夫だろ。

というより、それ以前に俺に奴を追う元気はない。

「ハアアアア。助かった……」

死んでたよ。俺あのままだったら死んでたよっ！

「まあ、とりあえずは……」

俺はブロック塀に肩を打ち付け、とりあえずは左手を戻す。

ゴキンツと言う音共に肩の骨が本来あるべき場所に収まるような感覚。

「痛え……」

それから、右手なんだが……。

俺は治った左手で右手を持って、断面をくつつける。

すると、何かが焼けるような、シューと言う音と共に、なんとか癒着した。

両手共にをグーパー開閉してみる。異常なし。

「今が夜で助かったぜ……」

俺は路面にペタンと尻をつけて座り込んでしまった。

夜はお化けの時間とはよく言ったもので、夜は怪異の時間。

俺の力、いや、俺の中の悪魔の力は丑三つ時に近づくにつれて強くなっていく。

特にそれが顕著なものの一つがこの回復力で、日が沈むと急激に上がるのだ。

ただ、悪魔性が上がるということは、それすなわち悪魔の弱点も効きやすくなるということで、今の俺にとって十字架と銀、それか

ら塩と聖水は忌避するべきものという訳だ。
それから……。

俺は自分が座り込んでいる真下を見る。

そこには電灯に照らされて、投影されるはずのものがなかった。

影がないというのは、なんとも気持ちが悪い。

いや、めちゃくちゃ気持ち悪い。

これで鏡にも映らないのだから、始末に負えない。

っていうかあれ？俺いちごパフェどうしたっけか？

あーやばい。あの血だまりのなかじゃん……。

まあ、俺の血なんだけどさ。

「はああ……疲れた」

「阿僧祇君？」

「えあ？」

桐島葵、クラスの人気者。

俺の友達である。

しかも今日はクラスの奴らが歓喜しそうなちょっとラフ目な至福の私服姿。

薄手の長そでＴシャツにフワツとした黄緑のロングスカート。

「お、おう桐島。どうした？　こんな時間に」

あわてて取り繕う俺。

何だか桐島にとってさっきまでの俺の状態は刺激が強いかもしれない。

「えっへへ、なんか突然甘いもの食べたくなっちゃってー」

桐島はうれしそうな顔でコンビニ袋を掲げて見せた。
どうやら桐島も俺と同じ特性をお持ちのようだ。

「パフエ……」

食いたかった……。

もう、あんな姿になってしまつて。

「阿僧祇君こそ、何してんの？」

桐島は路傍に座り込んでいる俺を不思議そうな目で見ている。

「いや、俺も桐島と同じ理由だったんだけど……。なんか途中でクロツ・タワーのシザーマンみたいのに会っちゃってな……」

「クロツ・タワー？」

桐島は知らないらしい。

あの名作を。

「ところでさ、阿僧祇君」

「ん？」

「この真っ赤なの、何？」

桐島は俺が作った血の池を指差しながらそう言った。

実は気になってましたみたいな言い方である。と言うよりも、俺の服にもベツトリついている。

まあ、この量の液体がまさか血だとは思わないのかもしれない。

「え、それはその……いちごパフェ？」

シザースガール 2

「えーと、であるからして、ここがうまく具合に因数分解できるわけだな。……こらあ、阿僧祇。お前はいつまで寝てるー」

「……ぐ……」

俺は無理やりと体を起こす。

昨日、あれだけ血が抜けてしまつて、俺はかなりの倦怠感に見舞われ、家に帰りついた時点で深い眠りについてしまった。

だが、それは一晩だけでは抜けず、今もこうして激しい疲労と眠気に襲われているのだ。

まあ、腕が取れてしまった俺からすれば、これだけで済んでよかったと思えなくもないが。

「阿僧祇くん」

授業が終わり、桐島が話しかけてくる。

「ん？」

「授業中寝ちゃだめだよ」

「いやいや、俺は昨日腕……」

俺はそこで言いよどむ。

昨日の段階で俺は桐島にあの鉄男のことも自分の容態についても何も言っていない。

「腕？ 腕がどうしたの？」

昨今の女子高生に置いて、あれは結構刺激が強いのではないか。腕切られたとか、あれ俺じゃなかったら大惨事だったわけだし、ここは無用な情報は入れないでおこう。

「いや、なんでもない。悪かったな。昨日はゲームをやっていたらつい夜更かししてしまった」

「へえ、何やってたの？」

桐島が意外にも食いついてきた。

「スペラ・カー」

「また難易度の高いのをやってたんだね……」

「ああ、主人公は自分の腰の高さから落ちてでも死ぬからな」

「って、そうじゃなくて？。授業中寝ちゃダメだって、成績悪くなっちゃうよ？」

「ああ、もともと悪いから大丈夫だ。それに桐島、お前成績良いだら？ いざとなったらお前に教えてもらおうという手段があるわけだ」

「なぜ当たり前かのように私が教えることになってるの……いやまあ、いいんだけどさ……放課後の教室とかで……ブツブツ」

なぜか桐島は顔を赤くして、ブツブツと何かを呟いている。

「まあなんでもいいから、お願いしますよ。桐島大先生」

「なんでそんなに捻くれてて、やる気がないのかなー」

不思議そうに首をかしげる桐島。

「仕方ないだろ？ 俺こうして社会と言う荒波に揉まれて生きてきたわけさ、民主主義と連呼する政治家は頼りにならないし、テレビ番組でそれに対して賛否している評論家も、なんだか胡散臭い。振り込め詐欺やワンクリック詐欺も横行してる。つまりところ、この社会で生きていくうえで信用できるのは、自分だけってことさ。桐島、お前もあまり俺を信用しない方がいいぞ」

「やっぱりひねてる……」

桐島は顔を可愛く口を尖がらせて、言う。

何とも器用な奴だ。

「冷めてる男の子はモテないよ？」

「余計なお世話だ」

「いいよーだ」

桐島はそのまま女子の群れ……いやいや、集まりの中に入って行ってしまった。

「おい、阿僧祇！」

突如として、隣から大きな声で呼ばれる。

「なんだよ、にえかわ贅川」

「お前、本当にいつあの桐島と仲良くなっただよ。めっちゃ好意的じゃん」

にえかわ ななし
贅川那奈志。

俺の悪友的な存在であり、入学当初からの付き合い。
長身痩軀に眼鏡をかけた、一見真面目そうな風貌と違い、中身はどす黒い男だ。

「誰がどす黒いだ。お前こそ何考えてんのかわかんねんだよ。そんな死んだ魚みたいな目しやがって」

「モノローグを勝手に読むんじゃない、それから、目が死んでいるのは気にしてるんだから言ってくれるな」

「こんな二人はアウトロー」

「プ・キュア的なニュアンスで言うんじゃないよ。ちつとも嬉しくねえし。ただでさえこの小説「●」多いんだから、こんな突っ込みさせないでくれ」

「ああ、そうだな。思えば第一話からプ・イチとかクロツ・タワーとか。今のプ・キュアとか……」

「お前、わざとだな」

それに対して贅川はわざとじゃないというが、俺は知っている。

こいつは息を吐くように嘘をつくやつなのだ。

因みにいうと先ほどのアウトロー発言だけは嘘ではなく、悲しいことに俺もこいつもお互い以外に友達はいない。

ああ、俺には桐島というフレンドが出来たから、今はちがうが。

「それで、話を戻すわけだが。どうやって桐島と仲良くなったんだよ？ 唯一の友人として、それぐらいは聞く権利があるだろ？」

「いや、どうと言うことはない…… たまたまだ」

よもや、コイツに山羊の死神やら俺の悪魔性を話すわけにもいくまい。

そんなことを俺が語りだした日にや、コイツは俺をボコボコにしても病院に連れて行くかもしれない。

少なくとも、俺が贄川の立場だったらそうする。

……それが、友情ってもんだろ？

「ふーん……まあ、いいけどさ。ただ、気をつけるよ？」

「何が？」

余計な詮索はしてこないが、意味深な態度。

「桐島、あいつはあんまり男友達がいらないからな。お前が仲良くしているとなれば、ファンが黙ってないだろうよ」

「ファン？ え、何？ あいつってファンいんの？」

「そりゃいるだろうに」

そんな当たり前かのような口調で言われても……。俺にとっては初耳だ。

そして、贄川は、前山ではないけれども至極軽い口調で

「まあ、せいぜい殺されないように気をつけろよー」

と言った。

「マジかよ」

「まあ、嘘だけだな」

「嘘かよ」

「実はそっちが嘘だったりして」

「贄川お前、そんなことばっか言ってるから友達居ないんだぞ?」

「うるせえな」

贄川にとって、嘘と言うのは無くてはならない存在なのかもしれないと思う時が、たまにある。

そんな二人はアウトロー。キラッ。

「そりゃ、螫^{はさみ}だなあ」

贅川とのくだらないおしゃべりは置いておいて、俺は放課後、一人で前山の根城であるところの社会科資料室に足を運んでいた。話題はもちろん、昨日の一件についてである。

「鋏^{はさみ}？」

「違う違う、いや、違わないのか？ その鋏^{はさみ}は物を切るための金属製の道具であるハサミを意味している。俺が言っているのは螫^{はさみ}。ほら、カニとかザリガニについている動物的なハサミだ。ま、どちらにしろあまり意味は変わらないけどな」

ザリガニ釣りをしたことがない人でも、図鑑とかでは見たことがあるであろうカニやらザリガニやら、それだけでなくも昆虫のハサミ。それを意味する漢字らしい。螫。

「それで、どんな怪異^{やつ}なんだ？」

「古くは九州に伝わる、なんというか、都市伝説みたいな怪異だ。いや、妖怪かな？ とにかく、螫^{はさみ}つてのは夜な夜な現れてはその人間の要らないなものを切り取っていく。姿はまちまちだな。お前が昨日会ったっていう人型^{はさみ}って話もあるし、カニやザリガニの姿。ましてや、そのまま鋏^{はさみ}の姿^{はさみ}っていう伝説もある」

「要らないものを切り取る妖怪か」

「そう、その人間にとって一番不要なものを切り取る」

「具体的にはどんなものを切り取るんだ？ いや、切り取ることができるんだ？」

「その人間のトラウマ的記憶であったり、つらい過去であったり、しがらみであったり。とにかく、^{はたみ}螯が持つ^{はたみ}鋏に物理的な攻撃性能はない。そんなものがあっても意味がないからな」

そういうことが、なんだ、結構いいやつじゃないか。それならば俺は昨日、いたく余計なことをしてしまったのではないのだろうか。少女を逃がすことによって、その少女が捨てたいものを捨てるチャンス^{ヤンス}を、奪ってしまったのではないだろうか。

「ん？」

俺はそこであることに気付く。

「鋏には物理的な攻撃は不可能なんだろ？ つまりはそういう実像のあるものは切れない」

「ん、そうだ」

「俺、昨日そいつに血まみれにされたんだけど。めっちゃ真っ青にされたんですけど。蒼真だけに」

「いや、全然うまくねえぞ。大体お前の下の名前覚えてる人そんなにいないから」

「まじでかつ！ 阿僧祇蒼真というやたらめったら画数の多い名前が俺にはついてるのに」

「テストのときとか大変だろうな。思うんだが、お前もそうだけど、画数の多い漢字が名字や名前にあると、それだけで不利な感じがしないか？ 時間が十秒ぐらい削られるんだぜ」

「たしかに、勘解由小路さんとか瀬瀬さんとかな」

「いやまあ、そういう名字の人は実際いるんだけども、そうそう居ないぞ」

「俺は絶対自分の子供には「このまえはじめ」って名前をつけるね」

「お前、このまえ一じゃねえじゃねえか」

ま、冗談はさておきと、前山は一拍間を置き、

「それはその時お前の悪魔性が上昇していたからだろうな。鰐の鋏は肉体こそ切らないが、精神や感情、果ては怪異まで、そういう霊的なものを切断するためのものなんだ。微々たる怪異性ではあるが、霊的な者のうちに含まれたんだろう」

「なるほど」

確かに、実像のあるものを切れないというのならば、それこそ俺は実像のない存在だ。

まして、夜から明け方にかけての俺には影や鏡に映る自分と言った、虚像も存在しないのである。

「まあ、話は少しそれるが、意外にけっこう気付かないもんなんだぜ？　一番大切なものはともかく、一番必要ないものってなあ」

「そんなもんか？」

一番いらない物は気づきにくい。

それはさっきも言ったように、その人間のトラウマであったり、過去であったり、果ては、嘘で塗り固めた自分であったり。

「それなら、お前の今一番いらない物ってのはなんだ」

「不幸」

俺は即答。たぶん、コンマ一秒も間がない。

ただ、それに対して前山は、大して驚いた風でもなく。不幸。不幸を呼ぶもの。

「そうだろうな。まあ、お前の場合そうだろう」

と言った。

自分としては半分ボケのつもりだったので、突っ込まれないと結構悲しい。結局、俺は突っ込みに回るしかないのか……。

「しかし、なんだってその鰐はさみはとおりゃんせなんて歌ってたんだ？」

「とおりゃんせだけじゃないぞ、奴は古い民謡を歌いながら現れる。今となつては不気味に思わせるリズムではあるが、昔はあーいうのが子守唄や遊び歌だったからな。人間、ここでは子供なんかに警戒心を持たせないためだろう」

「完全にいつちゃってる人だったけどな……」

「しかして、その追われてた子、早いとこ見つけといたほうがいいぞ」

「？　どういうことだ？　螯はさみは人間の一番いらぬ物を切り取る。つまりは結構いいやつなんじゃないのか？」

俺はそう思っていたが。

「考えてもみろ、この前の桐島の一件を」

「桐島の？」

桐島が死神に憑りつかれたエピソード。今となっては早いところ忘れない。

だけでも、俺にとっても桐島にとっても、将来はいい笑い種ぐさにしたいと思えるような、そんな不思議なお話。

「もしも、その少女の要らない物が、桐島と同じ、「命」だったら？」

前山は煙草をふかして、妙に力のある目でこちらを見据え、そう言ったのだった。

一番いらぬ物が、「自分」であった場合、どうなるのか。

「……」

俺は黙って踵を返す。

「待てよ」

そんな俺を呼び止める前山。

「今回、お前はなんのために行動する？ 他ならぬお前自身や桐島みたいなクラスメートが関わっているわけでもない。そんな赤の他人のために、なぜお前は動こうとしている。何がお前を、お前の命を代えるだけの行動に移そうとする原因なんだ」

前山は前山らしい、的を射た質問をしてきた。桐島にもそんな質問をされた覚えがある。

俺はそれに、なんとなく、と答えたんだったな。

「俺は基本的になんでも知っている」

コイツ、言いやがった……。

ここに来てなんでも知ってる発言。相当な変人だと思っていたが、とんだド変態だ。

「だが、どうしてもわからないものがあるんだ」

「なんだよ」

「人間の”心”だ」

人間の心はその人間だけのものだ。それは絶対に他者からは知れない。

「人の頭の中を読む”さとり”と言う妖怪がいるにはいるが、そいつらでも人間の心はわからないだろう。さとりが読むのは人間の

”思考”であって”心”じゃない」

「珍しくおしゃべりじゃないか、前山」

この男は漫才以外必要最低限のことしか話さないような奴だ。それが、ここに来てなぜこうも語りだすのか、俺には理解できなかった。

ただ、俺は最初の質問にだけ答えておく。

「理由なんてない」

それは正直な返答だった。桐島に対してこんなことを言うてしまつと、戸惑われるだろうから。

それを聞いた前山は俺のセリフに対して、

「そうか」

とだけ答えたのだった。

シザースガール 3

あの少女はけっこうすぐに見つかった。

考えてみれば、俺の家の近くで遭遇したということは、あの道が、彼女の家の周辺であるか、帰路の途中である可能性が高いということだ。

それでも、前山と話した後すぐに帰り、あの道にて待ち伏せをしているだけで会えたのは、何ともラッキーなことだ。

そんなわけで、俺と少女が再び顔を合わせたとき、こんな会話をしていた。

「あ」

俺は案の定と言うか、結構あきらめ気味と言うか、あまり期待はしないで待っていたので、その少女がこうして俺の目の前に立っていることに、多少の驚きを感じていた。

背丈は小さめで、この近辺に唯一ある公立中学校の制服を身にまとっていることから、中学生であることは確実だな。

髪型も当然ながら、昨日と同じボブカット。

明るいところで見ると分かるが、顔も整っていて、なんというか、人形を思わせる雰囲気だ。日本人形の髪を短く手入れしたらこんな感じになるんじゃないだろうか。

「ア……アア……あ」

少女の方も少なからず驚いているようで、俺を見て口を金魚のようにはくはくとして動かしている。

なぜここまで少女は動揺しているのか、俺はここに来て理解した。

俺は昨夜、少女の目の前で豪快に腕をぶった切られているのだ。そりゃ、昨日の今日でそんな奴が現れたら怖いし、しかも、ちゃんと腕がくっついてピンピンしているの。だから、少女の心中は窺い知れない。

「あー、その……落ち着いて聞いてく……」

「キヤー！ お化けーっ！」

俺が弁解を図る前に、少女は悲鳴を堪えられなかったのか、大きな声を上げた。

マズイ。非常にマズイッ。

こんな夕方から女子中学生を泣かせたなんてことになったら、俺はいろんな意味で「すごい人」になってしまう。

「キヤーッ！ ムゲッ！？ ンー！？」

俺は咄嗟の判断として、少女の間合いを詰めて口をふさぐ。こっちの方がよっぽどすごい人のような気がするが、突っ込んではいけない。

「ちょっと静かにしてくれ。マジで。大人しくしてたら何もしないから」

何とも犯罪者チックなことを口走りながら、俺は少女と交渉する。やばいやばい。こんなところを誰かに見られた日にゃ、俺は社会的に抹殺され、豚のエサにされてしまう。

そして、一生就職にもつけずに肥溜めこえたでの生活を余儀なくされる

に違いない。

友人たちからは罵倒を浴びせられ、陰口をたたかれ、たぶん、精神的にも社会復帰は無理になってしまうんではないだろうか。

ああ、怖い怖い。

俺は人生のそんな崖っぷちを歩くつもりは無かったのに、まったく、この少女と来たら俺の姿を見るなり悲鳴を上げるもんだから。

「シューッ！ むーっ！」

「もう大声出さないでいてくれるか？」

コクコクと頷く少女。

それを見て、俺はゆっくりと手を放す。

「キヤーツ！ 誰かーっ！」

ダッ！と勢いよく少女がセパレートダッシュを切った。

「待て小娘え！」

俺もそれに倣い、走り出す。

傍から見たら俺は完全に女子中学生を追い回す鬼畜外道である。

しかしながら、事実は異なることを承知してほしい。

約束を守らなかったのはあっちだ。

五分後。

「たくっ！ 手間かけさせやがって」

「うっ……」

俺は少女の制服の襟の部分を引っ掴み、ぶら下げていた。
体力的に言えば、俺はこの少女どころか、そこいら居るやつらに負ける気はしない。

「お前が約束を破るからだぞ？」

「ごめんなさいい。怖かったんですもん」

まあ、その気持ちもわからないでもない。
何度も言うようだが、自分の目の前で腕を切られて血が吹き出していた人が一日もなっていないのに現れたらそりゃ怖いだろうに。

「まあ、ここで話もなんだ。どっかのファミレスかなにかに入ろうぜ。甘いもの一品くらいは奢ってやるよ」

「マジですかっ！？」

「目を輝かせて急に元気になりやがって……」

こうして、俺と少女は、一路、近くに出来たばかりのファミレスがあるとのことだったので、そこに向かうことにした。

「はー、ここにこんなでかいファミレスがあるとはな」

「はい、確か三か月前に」

「まあ、俺はこの町に来たばっかだからよくわからないが」

世の中、便利になっていくものである。

少女の話によると、ここは元は広い畑だったらしい。

俺達はウェイトレスに案内され、席に着く。制服姿の高校生と制服姿の中学生が二人組でのご来店。他人からはどのように映っているのだろう。

とりあえずはお互いメニューを注文して、まずは俺が名乗った。

「あそーぎさんですか。変わったお名前ですね」

俺が名を名乗った時の、少女の反応である。

「よく言われるよ」

「恒河沙じやうがしゃさんと仲良くなれそうですね」

「そもそもとして恒河沙じやうがしゃさんがいるか知らないけどな」

「んじゃー、那由多なゆたさんとか不可思議ふかしぎさんとか、無量无数むりやうたいうすうさんとか

……」

「それはさすがにいないだろう」

「那由多」くらいなら、名前でいそうだが、俺はそこで話を切った。名字の話は前回前山としたばかりである。

と、今度は少女が名乗る番だ。

「私は悠花^{はるか}です」

「え？」

「悠花^{はるか}です」

「いや、名字は？」

「あー、えっと、梁間^{はじま}です。梁間悠花^{はじまはるか}。悠花でいいですよ」

少女は、梁間悠花と言っらしい。

「悠花^{はるか}って、えっと、悠花ちゃん^{はるかちゃん}でいいのか？」

「ええ、友達もそう呼んでいます」

初対面の人にも名前で呼ばせるとは、結構気さくな少女らしい。悠花^{はるか}ちゃんはさすがに人前では呼びづらいが。

「それで、悠花^{はるか}ちゃん。昨日の鉄男の件なんだが……」

「と、その前に」

「ん？」

「阿僧祇さんはいったい何者なのかと言うことを教えてください。
いえ、「何者か」ではなく、「何なのか」と言った方がいいでしょう
か？」

「……」

「昨日は助けていただきましたし、信用していないわけではないで
すけれど、その辺りは、私の興味も含まれますね」

「ああ、そのことね……」

俺は手短に、抽象的に話した。

昨日のあの缺男が怪異と言う異形の存在であること。

俺がほんの少しではあるが、怪異性を持った人間であること。
今までも怪異に遭遇してきていることなどをだ。

「なるほど、それであそーぎさんの手は今でもこうして異常なくく
つついているという訳ですか」

「まあ、そういうことだ。驚かせて悪かったな」

「全くですよ。それでも、その体は便利そうですね」

「でも、こんな体でも結構大変なんだぜ？ 夜になると影もできな
いし鏡にも映らない。塩っ辛いものを食べると力が抜ける感じがす
るし」

「塩っ辛いものはともかく、鏡に映らないのは不便そうですね。髪型
整えたりできないじゃないですか」

「いやまあ、そりゃそうだけどさ。俺にとってはあまり夜に髪型を整える必要はないわけだし」

こんな突飛な話をされた後でこんな会話ができるところを見ると、この子はなかなか順応性があるようだ。

「そういえば、悠花ちゃんは何年生だ？ 制服を見ると、中学生であることは分かるが」

「三年です。中学三年ですよ。まったく、もう受験期だっていうのに、あそーぎさんみたいなのに関わってしまうなんて、私も運がないです」

「だいたい、お前があんな鉄男と関わるのがいけねえんだろうが……。ん、まあちょうどいい、話を戻すぞ」

「私の一番いらない物でしたっけ？」

「ん」

それによって、今後の行動が決まってくる。

もしもそれが命ないし人にとってなくてはいけない物だった場合、俺が悠花ちゃんを守らなくてはならなくなる。

前山の話だと、螫はみは夜な夜な現れるといわれているらしい。

「わかりませんよ、そんなの」

その回答は、前山の言うとおりだった。

「なにか、思い浮かぶものはないのか？」

「うゝん……一番要らない物ですか。一番大切なものならともかく、一番要らない物なんて思い浮かびませんよ」

悠花ちゃんはフワツとした髪に包まれている整った小顔を曇らせる。

「ていうか、さっきからなんで私の見た目ばっか描写してんですか」

「お前と言い贄川と言い、なぜこうモノローグを読む奴が多いんだ」
俺は若干呆れ気味である。

「そんな私もあそーぎさんの見た目を描写してみます」

「どうぞ」

「うゝん……。黒髪で……。痩せてて……。身長は高めですかね？170センチ後半と言ったところでしょいか……。それから……」

「あんまり無理するな」

実際、身長は178である。

「あ、あと目が完全に死んでいます!」

「やかましいわっ!」

今までの会話の流れから、この子なら言っなとは思っていたが。

「ほら、遊・王とかで、仲間が敵に操^{あやつ}られた時の目にそっくりです」

「そのたとえば非常に分かりやすけども！」

その後、悠花ちゃんは一箇千二百円もする一番高いパフエを頼んでいたこととかで一悶着はあったものの、とりあえずは。

閑話休題。

「それで、思い浮かぶものはないと……」

「ええ。ただ、自殺願望とかはないんで安心してください」

「それならそれでいいが。ただ、過去のしがらみであったり、トラウマだって、決してなくしちゃいけない物だと俺は思っただよ」

ここで、俺は自分の見解を述べる。

「? どうしてですか?」

「そう言ったものは必ず人生にプラスになる。お前は願ってそれを切り離すのかも知れないが、それはお前の今までの人生を。十五年間の人生におけるそのエピソードを否定することになるんだぞ」

ここで、俺は気づいてた。

『^{はらいみ}螯』という怪異に頼ってしまったということは、彼女は。

否、桐島と同じく彼女の同様に、何らかのトラウマ的な記憶やら、つらい過去を背負っているということだ。

俺がそれについて言及しないのは、そう言ったものを他人に話すのが苦痛だと知っているからに他ならない。

「そういうものですか？」

「ああ、俺は思ってた。お前にとってそれがどういうものかは俺には分からない。だけど、大人になった時そういう記憶があるのとないのとは、大分、気の持ちようが違うと思う」

あの時はつらかったとか、あの時は泣いてしまったとか、死ぬかと思ったとか。

たまにはそういう思い出もないと、寂しいじゃないか。

螯は結構いいやつかもしれないと言ったが、一番要らない物も含めて、その人間そのものなのだから。

これが、ここに来るまでに俺がじっくり考えた結論だ。

「なるほどです……」

悠花ちゃんは真剣な顔で聞いていた。

螯はどのくらいの期間追ってくるのかはわからないが。

もしも。もしも悠花ちゃんがそう言った記憶を失いたくはないというのであれば、俺はそれに協力しようと思う。

「それで、どうする？ お前はそれを、切り取るのか、切り取らないのか？」

ここで言う『それ』がなんなのか、明言はできないけども、とにかくにも、彼女が決めることである。

「そうですね。それがなんなのか、私には分かりかねますが、それ

を失って損をするのは嫌ですね」

「なんだか誘導尋問のような気がしますけど、と
梁間悠花は笑顔で言ったのだった。

ただ、俺には、彼女は本当はそれを切り離したくて、分離させて
くて仕方ないんじゃないかと思う。
あまりにも要らない物で、不要なもので、持っていてても重荷にし
かならず、時間も解決してくれない物を、彼女は持っているという
のか？

「まあ、考えたって仕方ないわな」

「だけれども、俺は。」

俺達は、当然のことながらこの時点で気付いてはいなかった。こ
の物語の結末とそして、この少女。梁間悠花の切り離したいものを。

シザースガール 4

「いやあゝ。すっかり暗くなっちまったな」

「そうですねゝ。ところで阿僧祇さん、『少年よ、大志を抱け』と言う格言は、いわゆる男尊女卑な志向が含まれているとは思いませんか？ 私は小学生時代にこの格言を聞いて、おかしいなーと思ってたんですよ」

「それを言うなら、ワナー・イカルシネマズの、水曜日がレディースデイとして女性のみ千円と言うのは、おかしいだろ。どっか他の曜日にメンズデイを作れよって話だ」

もうすっかり日も落ちた頃、ファミレスを後にした俺たちは、とりあえず、この少女。梁間悠花の自宅にに向かっていった。
上記のような雑談を交わしながら。

「なあ、梁間ちゃん」

「……」

「梁間ちゃん？」

「……」

あ、そうか。

「悠花ちゃん」

「あ、はい、なんでしょうか」

名字で呼ばれているのに気付かないとは、よほど名前と呼ばれることに慣れてしまっているらしい。

逆に人を名字で呼ぶ癖がついてしまっている俺にとっては、結構やりづらい。

「悠花ちゃん、家、霧丘町だよね？」

「そうですね」

「どの辺だ？ 霧丘町なら俺も住んでるし、結構わかるぞ？」

と言うより、この辺りの学校に通っている学生は大体地元の人間だ。

「えーと、もうすぐそこです。五百メートルくらいでしょうか」

本当に俺や桐島の家と近いな。なにか得体のしれないシナジーを感じるぞ。

「しかし、阿僧祇さんのような変人がこの辺りに住んでいるのは、意外です。私の耳には全く届いていませんでしたよ」

「なんか失礼なことを言われたような気もするが……。ん、まあ俺はここに越してきたばかりだからな」

高校入学と共に、ここの地に越してきたのだ。

「なるほど、道理で。しかし、この辺りは何にもないですよねえ。駅の方に行くにも、若干遠いですし」

「まあ、確かにそうだが、毎日駅に歩いて行って学校に通ってる身としては、あまり苦にならないな」

こんな会話をしている間にも、俺達の足は進む。

「あそーぎさんは、何人家族ですか？」

何か意味があるのかないのか、突然悠花ちゃんはそんなことを聞いてきた。

家族か。阿僧祇家の家族。

「家族か……、俺も含めて4人だよ」

母と父、妹と俺だ。

「4人ですか」

「ん、まあ、今は一人暮らしだけどな」

「え！？ 一人暮らしなんですか？ 高校生なのに！？」

そりゃあ、まあびつくりするだろうな。

今俺は一人でこの近くにあるアパートに住んでいる。

ここには一人で越してきたのだ。

「まあ、訳あってな。ああ、でも家族が死んだとかじゃないから安

心しろ。親父とお袋と、あと妹は、ずっと遠くに住んでる」

「そう、ですか……」

悠花ちゃんはなぜか、下を向いてしまった。自分から話を振ったのに、この様子。なにか家族に、深い思い入れでもあるのかもしれない。

「なんで、一人暮らしなんかしてるんですか？ 寂しくないんですか？」

下を向いたまま、俺に問いかけてくる。

「んー、そりゃ寂しいさ。でも、週に一度は妹から電話がかかってくるし、まあ、死ぬほどではないな」

妹からの電話には、たとえ大丈夫でなくても、「大丈夫」と答えるしかないのだけれど。

あいつはあいつで、なかなか心配性だからな。

「寂しい人はみんなそう言うんです」

「なるほど」

一理あるかもしれない。

体調が悪い人は決まって大丈夫と言い張るのと同じかもしれない。

「そついうお前の家族はどうなんだよ。何人家族だ？」

俺はあえて踏み込んだ質問をする。

第三者が事情を聴くことによって、本人でも気付かないものに気づくかもしれないからだ。

一番要らない。目の敵にしている思いに。

「私の……。私の家族は……………シャリ……………」

「っ!？」

今のは悠花ちゃんの発した音ではない。

『かーごーめ かーごーめ…… かーごのなーかのとおりーは……………』

昨夜と同じように、シャリシャリと音を立て、黒ずくめの大柄な男が、いつの間にか俺たちの十メートルほど前方に立っていた。

その手にはやはり昨日同様、刃渡り百五十センチはあろうかと言う鋏。 螫。

「今日は『かごめ』かよ。なんともえげつない趣味してるな」

俺は悠花ちゃんと螫はみの間に割って入る。

まあ、俺も悪趣味な方だけど、螫こいには負けるわ。

「とりあえずお前は逃げる。ここは俺が何とかしとく。昨日は家までは追ってこなかったんだっけ?」

「え、ええ。阿僧祇さんに逃がしてもらった後、また追いかけられたんです。でも、ある一点を境に追いかけてこなくなつて……………」

「それはどこだ?」

「あのマンションに囲まれてる小さな公園です。真ん中に大きな樹があったけど、この間折れちゃった」

この前の桐島の一件でのあそこか。なんだかよくわからないが、そこまで逃げればいいらしい。

「そうか。だったらそこまでダッシュで逃げろ。時間くらいは俺がかせいでやつから」

日も丁度落ちたところ。俺の影も消えている。

今日を乗り切れば、明日辺りにでも前山に追い払う方法でも聞いとくか。

というより、今日聞いとけばと後悔しているところだ。

「で、でも……」

「何を迷っている。切り取られたくないんだろ？」

俺なりに冷たく言ってみたが、悠花ちゃんは逡巡している。

こうしてる間にも、螯は俺達ににじり寄る。

その間五メートル。

「で、でも。阿僧祇さんはなんでそこまでできるんですかつ！」

「ったく！」

俺は仕方なしに悠花ちゃんを抱えて走り出す。

中学三年生にしては軽めな体躯を抱えて走るのは、俺にとってそれほど酷ではない。

腕力は生まれつき強い方だ。

今は何を頂垂れているのかよくわからないが、俺の腕の中でおとなしくしている。

このままその例の公園に入っちゃえば、なんとかやり過ごせるだろう。

「はあ……はあ……はあ」

と、俺は全力で、無我夢中で走っていたので気が付かなかったが、もう公園は目と鼻の先まで来ていた。

よっしゃ、このままあそこに逃げ込んじゃえば。

「がっはっ！」

今のは俺の喉から自然に出た声。
なぜかって？

俺はここに来て派手に転倒してしまったのだ。

否否、俺は転倒させられた。

右の足首から先を切断されてしまった。

痛みが足先から脳にせり上がってくる感覚。

『いーつういーつう　でーあーう　後ろの正面だーあれ』
シヤリシヤリシヤリ……

見ると、螯の鋏が、いや、その刃渡りが滅茶苦茶に伸びていた。
およそ十メートルくらいに伸びた鋏で、俺の足を切断したらしい。

この時、咄嗟に、俺はこの間の桐島の一件よろしく、悠花ちゃんと路面との間に割って入り、衝突は避けたが。

「おい、これじゃもう走れねえぞ。あとはお前だけで行け……」

「何ですか！ あそーぎさん殺されちゃうかもしれないんですよ！？」

「いいから行け……」

「なんでそんな死亡フラグばっか立てようとするんですか！」

「バカ野郎、『俺にかまわず先に行け！』は昨今では生存フラグなんだよ。これが死亡フラグだったのはプ●テターまでだ」

「こんな時までバカなこと言わないでください！」

振ってきたのはお前だろうに。

そう言っただけ悠花ちゃんも立ち上がると、俺の体をぐいと引っ張ろうとする。

だが、いくら俺が痩せているとはいえ、体重は62キロ。

小柄なこの少女に持ち上げられるはずもない。

「いいんだよ、これは俺が勝手に首ツッコんだことだからな。だから、お前は俺のことを気にしなくてもいいんだ。俺みたいな人だし、ほっておけ」

「人でなしって……」

こうしてる間にも、螯はこちらにじりじりと寄ってきている。
急がなければ、今度こそ悠花ちゃんが切られてしまう。

「いいから自分だけ逃げろ。今日あったばかりの変な高校生のこと
なんか置いて」

「……」

「おい、聞いてんのか？」

黙りこくる悠花ちゃん。

俺にその真意はわからない。

「阿僧祇先輩、私、決めました」

「は？」

「まったく、どうして私だけこんなお化けに目をつけられちゃうの
かな……。わかりません。わかりませんが、もう迷いませんから
……」

「ちょ、おまつ」

悠花ちゃんは何を吹っ切ったのか、俺を路面に横たわれせると、
螯はさみに向かつてまっすぐに歩いて行った。

今やっと、その真意を理解する。

「お前は……お前はいいのかっ！ それで、自分の一部を切り離し
て」

俺は声を上げて問いかける。

それに対して悠花ちゃんは振り向かずに、

「はい、わかりましたから。私の一番要らない物で、一番の重荷。えへへ、やっぱりそれは、心底要らない物でした。其れと阿僧祇さんのことを天秤にかけたら、阿僧祇さんの方が大切だったってだけです」

今日あつたばかりの、変な高校生さん。

「その、その要らない物つてのはなんだったんだ？」

俺は再び問いかける。

そして、悠花ちゃんの首に、鍬がかけられた。

「たぶん、これで――――阿僧祇さんにもわかりますよ」

『後ろの正面、だああれ――――』

最後に、悠花ちゃんは笑顔で振り返り、そして、次の瞬間。

鍬の鍬が、悠花ちゃんの細い首を、文字通り、挟み込んだのだった。

シザースガール 4（後書き）

さて、切り離したかったものとはなんでしょうか？

まあ、一話からここまで読んでくれている人はあまりいないと思いますが……

シザースガール了

むかーしむかし。

いやまあ、言うほどの昔でもないんですけど、とある少女が居ましたとき。いやまあ、私なんですけどね。

名前は悠花っていうんですけど。

名字ですか？

名字は聖。ひつじはるか聖悠花ひつじはるかって言います。

とまあ、その私こと聖悠花を含む聖家は、我ながら、というか、傍から見てもなかなか仲睦まじかったんです。

お父さんの仕事は外資系の偉い人で、今だから言えるかもしれませんが、収入もなかなかだったらしいです。

お母さんの実家もそれなりにお金持ちで。

それで、必然的に、我が聖家もそこそこ裕福な幸せな家庭でした。

私の両親。お父さんとお母さんは近所でも有名なおしどり夫婦。

あ、実際のおしどりは夫婦仲あまりよくないらしいですけど、そういうツツコみは無いですよ？

ただ、それも私が小学校五年生までで。

「なんだってあなたはいつも酒ばっか飲んでんのよっ！ 会社ではしっかり働いてるんでしょね！」

「うるさいなっ！ 働いてるよっ！ 家で家事だけやってのうのと過ごしてるお前と一緒にするんじゃないっ！」

[illegible]

結局は、決められませんでした。

そして、私は裁判所の合理的判断に基づき、実家がお金持ちだったお母さんに預けられたのです。

と、そこで、住居と一緒に変化してしまうのが、名字です。

○
○
○

この日から、私の苗字は○○というものになってしまったので

ただ、私はこの苗字が好きではありませんでした。

それはなんでかって？

好きなんですよ、前の名字が。

だって、かつこいいじゃないですか……聖ひじりって。

とまあ、冗談はその辺で、それだけではありませんよ。

この苗字が、^{ひじり}聖と言う、神聖なものを思わせる苗字が、私たち家族を繋いでいるように思えてならなかったからです。

私が聖である限り、お父さんとお母さんは繋がっていられるから。

できることなら、切り落としたかった。

この。〇〇と言う名字を切り落としたら、もう一度神聖なものに戻って、神様が許してくれて、私たち家族を、元通りにしてくれるんじゃないかと、そんな気がしていたからです。

それから、私は、出会ったあらゆる人に、自分のことを名前で呼んでもらいました。呼ばせました。

友達にも、知り合いにも、もちろんあまり関わり合いのないクラスの子にも。

そうして、私は、。。。に縛られ、なんともがいているしか、できなかったのです。

「んで。その悠花っていう子が切り落としたのは、『それ』だったと」

前山は、いかにも気怠そうに呟いた。

「ん、あいつの名字。あ、いや、ひじょうはるか聖悠花のもとの名字が、どうしても思い出せない辺り、間違いないだろうな」

悠花ちゃん本人にも思い出せないらしい。

昨日教えてもらったばかりの、彼女の名字を。

頭のなかからその名字の単語だけがすっぱりと抜かれてしまった。切り取られてしまったような感覚。

思えば、気付いてみれば、気にかけてみれば。

彼女は執拗に自分のことを名前で呼ばせたがっていた。

最初の自己紹介の時に、名字を忘れる人間がどこにいるというのか。

そして、今は思い出せないが、彼女の名字を呼んだ時、彼女はわざと反応しなかったのだろう。

たぶん、名字で呼ばれたくなくて。

「それで、その子は怪異に頼っちまったかあ……本当はいけないことなんけどなあ。世界中の人間の記憶から、その子の名字は消えるぜえ。その名字本人の持ち主。つまりは、その子の母親の記憶からもな」

そのあたり。後々聞いてみると、母親の名字も元から、「聖」^{ひじり}になつていたのだという。

世界の事象を捻じ曲げるとは。

辻褄合わせに余念がない。

「しかし、お前のセリフで俺も先入観を持つちまったからな。まさか、一番要らない物が名字だったとは」

てつきり、思いや過去の記憶、トラウマやしがらみなどの、内面的な物かと思っていたが、まさかな。

散々ネタにしてきた、名字とは。

「その子もその子で辛かったんだろう。母親と父親の間で、文字通り板挟みにあつて、思いに挟み撃ちされて」

父と母に挟み挟まれて、鰐^{はき}がやってきたのだ。

そうして、彼女の心は、ついには千切れてしまった。

缺でちょん切られてしまったのだ。

「それでも、桐島の件と同じさ、怪異にかかわった以上救いはない。彼女の名字が変わろうが、彼女の母親の名字が変わろうが、家族は元通りにならない。両親の縁はもどらないだろうなあ」

そんなことは、俺も悠花ちゃんも承知の上だ。ただ。

「彼女だって切り取るつもりは無かったんだろ。俺と自分の名字を天秤にかけて、俺の方が大事だったらしいぞ」

「そうかい」

それだけ言つて、前山は白衣の胸ポケットからゆっくりとした動作で煙草を取り出し、口に咥えて火をつけた。

なんというか、まあ。

「そういう意味じゃあ、今回も今回で、悠花ちゃんは板挟みにあっていた。それで、過去のこと想起されただろうな」

「まあ、どのみち変わらねえさ。お前が切られようが、その子が切られようが、結果は同じだ」

本当に。

本当にそうだったのかもしれない。

その点、今回俺は本当に余計なことをしてしまったようだ。

俺が介在してもしなくても、おそらく、結果は変わっていなかっただろう。

「それでもですよ」

放課後の帰り道、偶然なのか必然なのか遭遇した少女、聖悠花は言う。

「あそーぎさんが守ろうとしてくれたことが、私はうれしいです。結果はともかくとして、今までこうやって誰かに守ろうとしてもらったことはありませんでしたからね」

「そうか。まあ、俺みたいな矮小な人間が喜ばせられんだとしたら、それはよかった」

守れもしませんでした。

「思うんですけど、あそーぎさんって自分のことを卑下しすぎではないですか？」

「ん？ そうか？」

そんなつもりは無かったのだけれど。

「ええ、もう少し自分に自信を持った方がいいです。私の漫才相手なんですから」

「漫才相手か！ お前の漫才相手として俺は自信を持たなきゃいけないのかっ！ もっとこう、他にあるだろ、『あこがれの先輩』みたいな！」

「いえ、全く」

あこがれの先輩ではないことを断言されてしまった。

「ただまあ」

と、悠花ちゃん。

「あれですね。先も言った通り、素直に感謝してますよ、あそーぎさんの厚意には。これからも町で会ったりしたら声をかけてください」

素直に感謝している。

悠花ちゃんはそう言ったのだった。

まあそれはそれで、うれしい限りであり、今回首を突っ込んだのも、俺にとっては、無駄ではなかったのかもしれない。

人の縁は金よりも重い。

「それから、ですね」

と続く。

「私、受験は霧丘高校にしようと思ってます」

忘れてしまっている人もいるだろうが、私立霧丘高校と言っのは、俺や桐島が通っている高校の名である。

そこそこの進学校であり、この辺りでは一番近い。

「おお、そうか。ちゃんと考えたなら、それはそれでいいだろう。まあ、待ってるよ」

「ええ、お願いしますよ。あそーぎさんが居れば、二年間は退屈しないと思いますから」

それは何とも、光栄の至りである。

悠花ちゃんにとってこの一件がどう作用したのかはわからないが、人生においての目標。

現在の彼女に置いては、志望校を決めるということは、かなり大きな決断が必要であろうことは、想像に難くない。

「それじゃあ、あそーぎさん。また」

「ああ、また」

俺達は簡素な挨拶をして、帰るべき場所に帰る。

悠花ちゃんの場合、母親の実家。

名字を失ってしまった、母親の実家。

そして、俺の場合は、誰も待っていないアパートへ。

その後のことを、ちょっとだけ。

そうだ、今日はもう洗濯をしないと。

そろそろ、衣類が溜まってきてしまった。

俺はそんなことを考えながら歩く。

我が家に向かつて。

「ああやばい。もうすぐ期末テストだ……」

洗濯からなぜこのことが連想できたのかは謎だが、全く対策を行っていない俺。

中間テストはほとんどが中学校の復習のような内容だったので何とかだったが、今回はそうはいかない。

いよいよ、桐島に土下座をする日が来てしまったか。

とりあえず、明日頼み込んでみよう。プライド？ そんなものは哺乳瓶の中に詰めて実家に置いてきちまったぜ。

ブルルル。

と、携帯の着信音。

音から察するに、電話がかかってきたようだ。

俺はゆつくりとポケットから携帯電話を取り出し、液晶画面を確認する。

妹であつた。

妹からの着信。なんとなく、うれしい。

「もしもし？」

『あ、もしもし蒼真君？ 私私 いやあ、参ったよー。さっきおれおれ詐欺に会っちゃってさ』

「すみません。私私詐欺なら間に合ってますんで」

妹の声に頭を痛めつつ、俺は通話終了ボタンに手をかける。

『詐欺じゃない　詐欺じゃないから切らないでっ』

「……何の用だよ？」

こいつにしては、割合珍しいテンションだ。

それから、いつも”お兄ちゃん”と呼べと言っているのに。

『どう？　元気？　ご飯食べてる？』

「お前は俺の母親かよ……」

『仕方ないよ。お母さん、蒼真君と話したからないんだもん』

「まあ、そうだろうな。それよりどうした？」

妹が電話をかけてきてくれるのは、ありがたい限りなのだが、なんとなく、つつけんどんな言い方をしてしまう。

『いやね、最近蒼真君が美人の女の子と仲良くなり始めてるような気がする。夜も眠れなくて』

コイツ、何者だ……。

いや、確かに桐島に続いて悠花ちゃんと妖怪やら死神がらみで関わりはしたが、やましい関係はない。

それ以前に俺みたいな男が彼女らと友達になれたのが、もう奇跡のようなことだ。

「……い、いや、何の事だかさっぱりわからないなっ」

『……？　なんで声が上ずってるの？』

「……ま、まあ、お前の気にするようなことじゃない」

『まあそうだよな。まさか蒼真君がそんな美人で黒髪ロングヘアーの同級生とか、かわいい系の年下っ娘とかと、仲良くしてるはずないよね』

いやだから、何者だよ、お前。

我が妹ながら恐怖を覚えずにはいられないんだが……。なんかもう。テレビに出て普通に金取れるくらいの能力だぞ、それは。

『あ、あとそれから、夏休みには遊びに行くから』

「は？」

さらっととんでもないことを口にしたぞ、我が愛しの妹は。

『それじゃあ』

「あ、ちよっ！　おまつ……………ブツッ」

ツーツー

聞いていると無性に虚しくなる音を聞きつつ、俺は、静かに呟いた。

「マジかよ……………」

なんだか、今の俺には、その言葉しか出てこなかった。

シザースガール 了（後書き）

キャラクター解説とかやりたかったが、眠すぎます……。
また次回、お会いしましょう。

シャドーインザフレンド 1

人はなぜ努力をするのか。

そんなことを、考えたことがある。

目的を果たすために努力するのは分かる。

だがなぜ人は、その目的を自分にできないと割り切ることができないのだろうか。

それは自分の能力では無理だ。

あきらめよう。

そして、自分は自分にできることをしよう。

なぜそう思考することができないのか。

うん、そんなものは言い訳だ。

わかってる。

つまり、と言ってしまえば最後になっってしまうが、俺が言いたいのは、

どうしても努力しなくてはいけない。

出来ないからと言って投げるわけにはいかない、割り切れない。そんな事柄があるということだ。

「お願いしますっ!」

深々と頭を下げる俺。

深々と頭を下げている、と言うより、これはもはや土下座と言えるかもしれない。

そう言うといよいよ路面で土下座しているような気がしてきたが、こっいつのは気にしたら負けだって近所のあばさんが言っていた。ゆえに気にしないっ!

「ええ……」

桐島さん、ドン引きである。

たまたま時間が重なり、下校した時のこと。

というか、俺が桐島を待ち伏せていたわけなのだが。

「本っ当にお願いします! 試験勉強教えてくださいっ!」

ここが人気のない通りでよかった。

俺のこの見事な土下座を公衆の面前に晒すわけにはいかない。

セリフからもわかるように、なぜ俺がこんなことをしているのかと言うと、一週間後に迫った期末テストに対して、俺は何の対策も取っていないからであった。

いや、まあ……ほら。

悠花ちゃんの件とかで、忙しかったしさ？　ね？

「贅川君にえかわの方がいいんじゃない？　彼、成績良いでしょ？」

「あいつは息をするように嘘をつくんです！　この間も嘘の範囲を教えられましたっ！」

「わ、分かった。分かったから、教えるから頭上げて……！」

「本当ですか？」

「本当ですっ！　本当ですからアスファルトに額を擦り付けるのやめてください！」

「ありがとうございますっ、桐島様！」

俺は素早く立ち上がり、桐島の手を握る。

「あ、う、うん……。とりあえず……おでこ拭いたら？」

それから、俺達は歩みを再開した。

桐島より、明日やろうはバカ野郎、という格言を承り、今日、これから勉強をすることになった。

いやはや、こういうところが優等生と俺みたいな落ちこぼれの差なのだろうか。

「実はね」

と、不意に桐島が俺を目だけで見ながら話しかけてくる。

「実は、ずっと阿僧祇君にお礼をしたかったんだよ」

「お礼？ 俺なんかしたっけか？」

「ほら、私を助けてくれたじゃん。あの山羊から」

山羊。

桐島が呼んでしまった、死の神。

「あーあれね……」

それでもあれは、

「俺は何もしてねえよ。ただ、お前が勝手に決断して、お前が勝手に助かっただけだ」

「それでも、私は阿僧祇君に感謝してる。感謝してもしきれないくらい。勉強教えるなんてことでお礼ができるとは思わないけど、それでも私にできることはやりたいと思ったの」

何と言つか、奥ゆかしいのかなんなのかよくは分からないが。

「気持ちは受け取っておくよ。でも、お礼なんてものはいい。それに今回の俺の頼みは個人的な頼みだ。こっちがお礼をしたいくらいだね」

「んー……」

桐島は納得のいかない顔をしている。

「んな顔するなよ。どうしてもって言うなら、そうだな。いつかまた困った時に言うよ。それでいいだろ？」

「うん、それならオッケー！」

「それで、今日勉強なんてどこでやるつもりだ？」

この辺りは住宅街で、ゆっくりできるような店はない。

強いて言えばこの間悠花ちゃんと入ったあのファミレスぐらいだが、先日勉強していた大学生らしき人が追い出されるのを見てしまった。

つまり、この辺りに勉強できるような場所はほぼ皆無なのだ。

「私の家は別にいいけど、阿僧祇君ちがよければそこでもいいけど」

「ああ、うちも別にいいぞ。ていうか、俺の家はいつでも何時でもオッケーだ」

「へえ、お父さんとお母さんはどうしてるの？」

「いや、俺一人暮らしだから」

「はい？」

桐島がデフォルトの笑顔のまま固まる。

そっいえばコイツに言っていなかったな。俺が一人暮らしであることを。

とりあえず、と言ってはなんだが、俺はこの前と同じような説明

を、桐島に行った。

そのことに対して心底不思議がっていたが、それはそこ。

人間の領分と言うものを弁えているマイフレンドは、それ以上は詮索してこない。

「そ、そうなんだ……。ひ、一人暮らし……」

「それで、どうすんだ？ お前の家か、俺の家か？」

「ひゃつ、え、え、えーと……」

「それとも、ちょっと遠いが図書館に行くか？」

「わ、私はどれでもっ！」

「一番困る答えを選んでくれやがって」

とりあえず、俺の家と言う選択肢はない。

確実でない。

いくら俺と言えども、年頃の娘を独り暮らしの男の部屋に連れ込むような真似はしない。

それに桐島を家に呼んだなんてことがばれたら、テストの点数が悪く以前に、俺は社会的抹殺と物理的抹殺を同時に受けることになるだろう。

と、なると桐島の家か図書館と言う選択肢になってしまうが、しかしながら、桐島の家に行くにしても気が引けてしまう。

それに図書館と言うのはいかんせん早く閉まってしまふものなのだ。

「どうすつかな……」

「一人暮らし……ひとりぐらし……阿僧祇君ち……」

「聞いてますかね？ 桐島さん」

なぜか顔を真っ赤にしてブツブツ呟いている桐島譲。

「お前んちに行くの気が引けるし、今日はもういいんじゃないか？」

「え？ うち全然オツケーだと思うよ？」

桐島はポカンとした様子だ。

「いや、俺がダメなんだよ……」

「ダメだよー。『明日がんばろう』は。今日を頑張った者にのみ明日が来るんだよ？」

「某ギャンブル漫画の名ゼリフを持ち出してきやがって」

ずいぶんマニアックな。

あれ、悪役が吐くゼリフとは思えない。

「分かったよ。行くよ。桐島葵さんのお宅にご訪問させていただきますよ」

「うん、それでよし！」

かくいう俺も、桐島の家に行ってみたいとは思っていた。

俺も年頃の男の子である。

こうして、俺達は桐島の家へと向かう。

夕暮れ時と言うこともあり、すっかり傾いた今にも燃えそうな真っ赤な夕日が、俺達の影を長く長く伸ばしている。

それを見た桐島は、思い出したかのように、こんなことを話し始めた。

「そう言えばさ、今この辺りで噂になってるんだよね」

「ん？」

” 影踏みさん ”

「影踏みさん？」

「影踏みさんに影を踏まれると、その影から魂を抜かれて殺されちゃうんだって」

「何と言うか……ありがち、というか、小学生が騒いでそんな噂だな」

てけてけとか口裂け女とか、そう言った子供だましの都市伝説のようだった。

あー、あと赤マントとかね。

「そうだね」

桐島も、それには同意のようだ。

そんなものは突発的に流行る芸人みたいなものだ。

おそらく、一年後には誰一人としてそれを記憶にとどめる者はいないだろう。

まあ、前山に言わせてみれば今列挙した都市伝説も、あながち子供だましという訳でもなく、立派な怪異らしい。

例を上げてみれば、口裂け女。

あれは実は江戸時代からいて、動物霊の憑き物だと言われている。

「影踏みさんねえ。影を踏まれるだけで殺されるか」

「私も詳しいことは知らないけどね。それでも、火のないところに煙は立たない。前山先生に相談するのもありだと思ったけど、あの先生の所に一人で行くの、なんか嫌だし……」

嫌われてるよ、前山先生。

「んで、俺に言ってみたと……。まあ、妥当だな。前山はこのことも知ってるだろうし、あいつはあいつなりに何か考えてるだろう……」

まあ、噂が回ってる時点でちょっと危ないかもしれないな。

妖怪や怪異は語られ、語り継がれることによって存在し、語られ続けることによって存在を保っていられる。

「明日にでも俺が前山と相談してみるわ」

「そうした方がいいなら、そうかもね。ていうか、ずっと気になってたんだけど、前山先生って何者なの？」

「知らねえよ」

本当に知らない。あいつが何者で、どんなことができて、どんな力を持っているのか。

ただ、怪異に詳しい奴ってことくらいしかわからない。

あ、前になんでも知ってるって言ってたっけ。

「おやおや？」

不意に、俺達の背後からそんな声が聞こえた。
若干幼さの残る少女の声。

「これはこれは。あそーぎさんじゃないですか」

「おー、誰かと思えば、俺の可愛い可愛い後輩、悠花ちゃんじゃないか」

「もう、よしてくださいよ！ 本当の事言うのはー！」

知り合ってからわかる。結構、単純な子だった。

「どうした？ 学校の帰りか？」

「まあ、そんなところですよ」

「そっか、お疲れ」

俺は頭二つ分低い悠花ちゃんの頭をポンポンと優しく叩く。あれから、この娘とも結構仲良くなったものだ。

「お疲れ様です。ところで、気になっていたのですが、この超を付

けても違和感のない美人さんはどなたですか？ ま、まさかそんな！ あそーぎさん、いくら欲求不満だからって、ゆ、誘拐だなんて！」

「どんな曲解をしたらそうなるんだっ！」

色々つかみどころのない子だということもわかったが。

「まあいい。紹介するよ。俺のクラスメート兼友達の桐島さんだ」

「美人とは思ってないけど……よろしくね？ えーと……悠花ちゃん？」

「ま、まさか。あそーぎさんにこんな美人なクラスメートがいたなんて、しかも友達だなんて」

何故か、悠花ちゃんは勝手に戦慄していた。

「お前は相も変わらず失礼だな……」

「いやいや、あそーぎさん。路上で土下座するような人に敬意を払う必要はないと思いますよ？」

「貴様、いつから見ていた!？」

「この章の物語冒頭からですよ。阿僧祇さんが『人間はなぜ努力するのか』とか言う命題を考えていたあたりです」

「やめてくれ！ 恥ずかしい!」

恥ずかしすぎて死んでしまいそうだった。
なぜ、モノローグを読むし。

「いやーしかし、阿僧祇さん、桐島さんとはいつから知り合ったんですか？」

「ん？　なんでそんなことを聞く？」

「いえ、あそーぎさんみたいに変た……いやいや、紳士な方が、どうやって桐島さんのような方と知り合ったのか、少し興味があります」

「おい、紳士の前なんて言おうとした？　紳士の前なんて言おうとした？」

しかし、桐島も悠花ちゃんも、俺とは、怪異絡みで関わっていることになる。

それも、過去や思いの根幹にかかわる部分だ。
言って良いものなのか。

「阿僧祇君？」

俺が逡巡していると、隣の桐島が声をかけてきた。

「私も知りたいなー。こーんな可愛いことどこで知り合ったのか」

表情はニツコニコ笑顔だが、なんか声に怒気が混ざってるのは気のせいではないはずだ。

微妙に厭味いやみったらしい言い方だし。

と言うことで、怖いのは嫌なので、なるべく抽象的かつ、はぐらかし気味で二人に説明。

斯^かく斯^かく云々^{しかじか}。

「私以外にもそんなことをやってたんだ（ですか）……」

完全に声をはもらせて、啞然とする二人。

そういえば、悠花ちゃんの一件から一週間も経つのに、この二人はお互いの存在を知らなかった。

「ま、まあそれはいいじゃないか？」

「いや、よくないと思いますよ？」

「そーだよー？ 誰彼構わず首ツッコんで、そんな危ない目に会ってるんだから、友達としては心配だよ」

「い、……いやその……」

二人に突っ込まれ、あまりの正論さ具合に口応えができない。うむ、ここは完全に不利。話を変えよう。

「ところで悠花ちゃん、”影踏みさん”について何か知ってるか？」

「あ、話変えた」

桐島の小さなツッコみは無視無視。

「影踏みさん」、ですか？」

「ああ、巷で流行^{ちまた}ってるらしいじゃないか。なんでも、影を踏まれると魂を抜かれて殺される奴。」

「ええ、確かに。私もあそーぎさんと関わってからその手の話題は積極的に聞き入れているので、聞いてはいますよ。男か女かもわからず、完全に見た目は不明。ただ今小学生たちの恐怖の対象です。それでも……」

「それでも？」

「それでも、問題はないと思いますよ？」

「なんでだ？」

「だって、影踏みさんについての噂話が、もし本当なら、それこそ事件になりますよ」

確かにそうだった。

ここは片田舎で小さな町だ。

そんなところで人が殺されないし失踪したりすれば、それこそ大事である。”影踏みさん”どころではない。

「じゃあ、なんでこんな噂話、あ、いや、与太話と言っべきか。そんな話が広まってるんだ？」

「今はインターネットも普及してきましたからねー。悪戯好きの誰かさんがどっからか話でも拾って来て広めたんでしょう」

「……そうだと良いがな」

「まあ、私が言っているのは可能性の域を出ない話ですけど」

「いや、助かった。ありがとな」

「いえいえ、それじゃあ私はこれで。桐島さんも、また今度お話ししてくれると嬉しいです」

悠花ちゃんはキャラに似合ったピョコピョコとした動作で、桐島にお辞儀をした。

「あ、うん。こちらこそっ」

「はい。あそーぎさん、桐島さんのことをちゃんと送って行かなきゃだめですよ？ エスコートしないと」

「お前は近所のおばちゃんかよ……。まあ、言われなくてもそうするさ、というよりも、俺はこれから試験勉強をしに桐島の家にお邪魔するところだったんだ」

「おや、そうだったんですか。遠くからですので会話までは聞き取れなかったものですから。おっと、今日は私がお風呂お掃除の日なんですよ。それでは、私は失礼します」

「ああ、じゃあな」

「気を付けて帰るんだよー？」

俺と桐島は揃って悠花ちゃんに手を振る。

まあ、もう日も落ちそうではあるし、とりあえず早いところ桐島の家で勉強をしてしまわなければ。

影踏みさんとやらのことは気になるが、それ以前に俺に残された時間はあまりない。

「じゃあ、行くか？」

悠花ちゃんが角を曲がって、その姿が見えなくなるタイミングを見計らい、俺は桐島に提案する。

「そだね」

うーむ。こんなところをもしクラスの男子が何かに見られてもしたら、俺は明日無事でいられるんだろうか。

奴らが喉から手が出る程ほしい桐島のメールアドレスも、俺は持っているわけだし。

「あともう少しだよ。その曲り道曲がったら、もう見えるところ」
なるほど。

桐島の家の詳しい座標は知らなかったから、これが初めての訪問になるわけで、若干緊張してきてしまった。

しかし。

ここに来て、いや、ここにおいて。

そんな淡い男子高校生の緊張をぶっ飛ばすような出来事が起きた。
起きてしまった。

体が動かない。

いやいや、別に体調が悪いとか、怪我してるとか、そういう訳ではない。

単純に動かない。全く。

「……っ！」

隣を歩く桐島も同じ状況のようで、驚きに目を丸くしている。

「桐島、落ち着け」

何とか口は動いた。

だがしかし、首から下が全く動かない。ピクリとも反応しない。

「貴様、何者だ？」

後ろから不意に、何者かの声が投げかえられる。

体が動かず、振り返ることができないので、その姿までは分からないが、声の質からして女のようなようだ。

「いやいや、お前が何者だよ？」

心の底からの疑問であった。すると突然、首筋に冷たいものがある。
てられる。

それがなんなのか、眼球だけを動かしてようやくと確認する。

刀。

しかも結構長く、野太刀と言った感じの、銀色の光沢を帯びた凶器。

「貴様は質問しないでいい……。うむ、そうだな。あえて言うなら、”影踏みさん”かな？」

いきなりですか。

いきなり遭遇ですか。

まさかの”影踏みさん”とのエンカウト。とりあえず、俺の中でも悠花ちゃんに対する信用度がググッと下がったことは確かだ。

しかして、影を踏まれると死ぬ、と言うのはこのことだろう。

俺達の影が伸びている方向から声が聞こえているということ。影を踏まれると、まるで縫い付けられたように動けない。

「貴様が物の怪だということは分かっている。この娘に何をするつもりだ？」

「あー……。えー……。真に恥ずかしいのですが、英語を教えてくださいかと」

「ふざけているのか？」

声に怪訝さがプラスされ、野太刀がより一層俺の首に押し付けられる。

「危なかったな娘さん^{むすめ}。危うくこの化け物に騙されるところだった

ぞ？」

「あの、阿僧祇君は怪異ですけど、ほとんど人間で……えーと、なんて言えばいいんだろ？」

桐島が何とか弁明を図るが、まとまりがない。

しかし、このまま時間が過ぎてくれれば、こちらにとって好都合。もう、夕日はほとんど沈みきり、西の空を赤く染めているだけだ。たぶん奴は街灯によって投影される影を踏んでいるのだろう。

「知っていて一緒にいたのか？ ……悪いことは言わない。やめておけ」

「なぜですか？」

「この男がほぼ人間であることは分かる。だがな、それでも物の怪は物の怪だ。人間とは絶対に相容れ……」

「そうかも知っ！」

俺は動くようになった体を反転させ、相手の腹に蹴りを叩き込む。敵は剣術でもやっているのか、それを驚きながらも刀でガードした。そのまま勢いに乗せて足で押し出し、相手は少し後ろに飛び退くように移動する。

「っ！ 貴様、影が！」

そう、たった今日は沈み、夜になった。そして、コイツが地面か何かに縫い付けていた俺の影も、悪魔の力によって消えたという訳だ。

「あれー。肋骨数本折るつもりだったんだけど」

なるべく軽い感じで、敵を挑発するようにのたまう。

「貴様……！」

忌々しげな声を発した相手は予想通り女。
しかも、俺や桐島と同じ制服を着ていた。

髪型は長い髪を後ろで一括りにしている、いわゆるポニーテール。
顔立ちもしゃべり方と一緒に、シャープな感じでキリツとしている。

「まさか同じ学校の奴とはな、まあいいや。とりあえず話聞かせて
もらうぞ?」

「まあ、待て」

先ほどとは打って変わって落ち着きを取り戻した女生徒は刀を放
り投げて手を頭の上に挙げた。

「あ?」

「私は何も貴様と戦いに来たわけではない」

「……どういうことだ?」

「私は忠告に來ただけだ。貴様が物の怪であることを知らなければ、
その娘さんは騙されていることになるからな」

「要するに、ただの勘違いってことか？」

「それは違う。同時に貴様に釘を刺しに来た。貴様が何か変な動きを見せると、私が容赦しないぞと言う旨を伝えに来たということだ」

「だから、貴様が何もしない限り私と貴様が戦う理由はない」

「なんだ、あんたはこの町の平和でも守ってんのか？ いまどき月光仮面は流行らねえぞ」

「否。私は霧丘高校の治安を守っているだけだ」

学校の治安？

「あんた、何者だ？」

「これはこれは申し遅れた。私は私立霧丘高校、現生徒会長、水鏡みかがみ時拿ときなだ。以後、お見知りおきを。桐島一年生、それから、阿僧祇一年生」

どうやら、俺はまた面倒くさいことに首を突っ込んでしまったようだ。

シャドーンザフレンド 1 (後書き)

ひゃっほう、今年も家にはバンバン巨大なムカデが出るぜ

シャドーインザフレンド 2

翌日の昼になってしまった。

少しだけ、状況を説明しよう。

昨日は桐島の家で勉強どころではなく、あの生徒会長はいつの間にやら消えてるわ、桐島は若干腰抜かしてるわで、俺がそのまま桐島を送っていくだけとなった。

さて、ここからが問題である。

今朝学校に到着し、靴を履きかえようとすると、下駄箱に一通の手紙。

差出人の見当はついていないため、俺はびくびくしながらそれを開けた。

『阿僧祇蒼真様

先の御無礼、真に申し訳なかったことを、ここにお詫びしたい。

この文を書くに至った理由は、もちろんそれもあるが、貴公と今一度話がしたいと思ったからだ。

もし都合が合えば、今日の昼休み、屋上に来てほしい。

通常立ち入り禁止ではあるが、会長権限によって限定的に開放しておく。

それでは。 水鏡蒔拿』

「……」

こんな文章が高級そうな和紙に筆で書いてあった。

うん、なんというか……うん。

昼休みになり、屋上にいち早く来た柵にもたれながら遠くの景色を眺めていると言う状況である。

鍵はきつちり開いていた。まあ、手前に会った立ち入り禁止の立札は撤去されていなかったが

それにしても、生徒会長、水鏡時拿は俺に何の用があるのだろう。

昨日の様子だと、口では牽制しに来たとか言っではいるが、彼女は純然たる殺気を放っていた。

完全に、俺を殺しに来ていたのだ。
学校の治安を守るため。

生徒会長として当然なのだろうけれど、俺と言う怪異を排除する意味は、正直言ってあまりない。

怪異なんてものはありふれ過ぎて、そこらへんに居すぎて、溢れかえっているものなのだから。

……。

再び、昨夜と同じ感覚に襲われる。

体がピクリとも動かない。

「ハア……。またこれかよ」

「本当に、君はいつたい何者なんだね？」

後ろから、例の生徒会長の声が聞こえる。

「昨日も説明しましたよね？ 悪魔ですよ」

「いやはや、そういう意味に取られてしまったか、これは申し訳ない。私は今君自身に訊ねたつもりなのだが？」

「はい？ どういうことですか？」

「つまり、人間としての君はいつたい何者かと言うことを聞いているのだよ。昨日の立ち回りといい、明らかに動きが一般人のそれとかけ離れているのではないかと思っただけだ」

「……別に。ただの人間としての俺は、文字通りただの一般人ですよ。何の変哲もない、普遍的。平々凡々」

「ハッハ。先輩に嘘はいけないな？ 私はこれでも武術を嗜むものだよ？ 君は、完全に喧嘩慣れしている、否、そうじゃないな。戦闘慣れしている。しすぎているよ？」

「……そんなことは関係ない。俺は一般人です」

「未知の力で体の自由を奪われた状態で、汗ひとつかかずに平然としている人間が、一般人なのか？」

この人、完全に楽しんでいるな。

「……会長、人が飛び散るところって、見たことありますか？」

俺は唐突に訊ねた。

「……いいや、私はないな……」

後ろから投げかけられる会長の声に、警戒の色が現れる。
おそらくは、突然俺の雰囲気が変わったからだろう。

「知ってますかね？ 人間って、飛び散る時、悲鳴も上げないんですよ。ただただ黙って体がバラバラになる。断末魔とかよく言いますよね？ 漫画とかアニメで、人が爆ぜたり、炸裂したりするとき、「ぎゃあ」とか「ぐあ」とか言うもんじゃないですか。でも実際は違う。悲鳴もなにもあったもんじゃない。沈黙の中でグチャグチャに分解されて、『人』は一瞬で『物』になる」

「……私は君を危ない人間だと思ってたんだ」

「へえ？」

「君が悪魔と契約していることを差し引いても、昨日会っただけでわかった。この男は危険だと。私の感覚器官が教えてくれた」

会長の声には、わずかな緊張、そして、先ほどのように大きな警戒の色がこびり付いている。

「だが、君は、私の想像以上に危険なようだ。危^{あぶ}なくて、危^{あや}い男。ヤクザでもそんな殺気は出さないぞ？」

会長の言つとおりだ。

昔の俺はどうしようもなく危険で、有害なクズ野郎。ゴミ。デカイゴミブリ。

だが、そんな俺はもう居ない。

無理やり抑え込んで、ふたをして、クズは元あるべき場所に捨ててきた。

だから。だから！

「あつはは、冗談ですよ。人が飛び散るところなんて見たことあるわけじゃないですか。俺は普通に普通の一般人なのに」

俺がなるべく明るく、この場の雰囲気を変えるために、そんなことをのたまった。

その言葉を聞いてか、場は会長の緊張と共に一気に弛緩していく。

「今の冗談は、君が誰にでも優しいのとの関係があるのかね？」

関係、ないわけじゃないかもしれない。

ばかした言い方をしてしまう。

「それよか、会長はそんなことを話すためにここに呼んだんですか？」

「いや、違うな。君には、私について話をしておこうかと思ってな」

「会長について……」

「堅苦しい呼び名だな。私はあまりそう呼ばれるのが好きじゃないんだよ。生徒会長あんなものは呈のいい雑用係でしかない。名前か何かでいいと思うのだが？ 阿僧祇君」

俺としては、あんたの口調の方が堅苦しいと思う。

「それはちょっと……」

「そうだな。それでは先輩辺りにしておこう」

何と言うか、ペースの掴めない人である。

生徒会長になるような人なのだから、人望も厚いのだろうが、珍妙な人だ。

こういのがいわゆる『大物』と呼ばれる人間なのか？

「初めてだよ。君のような物の怪に会ったのは。今まで私が会ってきたのは、理性の欠片もない奴らだったからな」

「怪異、いや、先輩の言う物の怪に理性なんて求めちゃダメですよ。俺も含め、初めから”そうある”だけなんですから。まあ、そんな話はどうでもいいですけど、そろそろ拘束解いちゃくれませんか？」

「はっは、そうだったな。失礼したよ」

言ったそばから、体が軽くなるような感覚がする。これ、結構肩がこるな。

ようやつと俺は後ろを振り返って、ようやつとその姿を確認する。昨日と同じ制服をきっちりと着こなした生徒会長がそこにはいた。手には木刀が入っているであろう袋が握られている。

「そうだな、まずは、私について語らせてもらおうか。さっきのやり取りで、君についての興味も出てきたところだ」

「いや、前山の前でした方が効果的だと思いますよ？」

「ふむ、昨日君も話していた前山教諭か……。なるほど、いい案だ。それでは放課後、前山教諭の前で、君にも一緒に聞いてもらおうと思う」

そういうことにしておこう。

いや、おそらくそれがベストないしベターな行動だろう。

「それで、なんで会長は木刀なんて持ってるんですか？」

「フッフ……その呼び方にこだわるのだね？ まあいいよ。質問に答えよう。私は剣道部の部長も兼ねているのだよ。親の仕事と言いか、まあ、教育方針みたいなもので、小学生からやっている」

ここに木刀を持つてくる行為に関しては不明だが、なんとなく分かった。

「つまり、木刀を持っていないと落ち着かないと？」

「君は……私どんな危険人物にしたいんだね？」

「実際危険でしょうに……。昨日俺の首筋に日本刀押しつけといて何いってんすか」

我ながら、正論を言えた気がする。

「ハッハ、すまなかったな。私としたことが、判断を焦りすぎたようだ。ただ、私は君に気を許したわけじゃない。未だにさつき言ったように、危険な男だと思っているよ？ だから私は、木刀（じゅうぎょう）を持つ警戒している。しななければならない」

判断焦りすぎたとか、そんな理由で殺されかけたら堪ないんですけど……。

まあ、その辺はいろいろ言っても仕方ないと思うが。俺を警戒しているようだし。

「それでは、私はこれで失礼するよ」

「ああ、また放課後に」

「うむ、昨日はああ言ったが、桐島女史には優しくしてあげなさい。彼女には君が必要なようだ」

「は、はあ……………？」

「クッククク……………わかってないと見えるね？ まあ、いいさ」

意味深。

全く分からないが、そうした方が良い気がした。

なんというか、不思議な圧迫感のようなものが、この会長、水鏡時拿には備わっている。

これも生徒会長と言うポストの威厳のようなものだろうか。

「それでは失礼するよ？ アディオス」

ピツと指を立てて、屋上の鉄扉を開けて出ていく会長。

俺は、その背中を見送りながら、呟いたのだった。

「キャラの安定しない人だな……………」

「阿僧祇ー。野球しようぜー」

「お前はいつから中島君になった？」

教室に戻る俺を、友人、贅川那奈志はそんな言葉で迎えた。まったく似ていない中島君のものまねと共に。

「で、どこ行ってたんだよ？」

「ん、ちょっとな」

まあ、言えるわけもなく。

「桐島さんがお前のことを探していなかったぞ？」

「うんわかった。探してたんだな」

大分、コイツの挙動言動にも慣れてきたと思う。慣れてきていいのかとも思うが。

「それで、桐島はどこ行っただ？」

「さあ？ 知らねえよ」

「そういう場合は知ってるよな？ 言え」

「先生に呼ばれて視聴覚室に行つたぞ？」

「分かつた、視聴覚室以外を探そう」

俺とのやり取り中、ずっと贅川はクツクツと笑っていた。

人のことは言えないけれども、コイツはコイツでぶっ飛んだ男だな。

「お前、いい加減やめた方がいいぞ？ その嘘つき癖。俺は慣れてきたが、俺以外の人間と会話するときに支障が出るだろ？」

「分かつたよ」

嘘だ。

こいつの半分は嘘で構成されている。

一応、嘘とは異なる真実も言えるはずだが……。

「いやいや、俺の言を述べさせてもらうとだな？ 嘘っていうのは真実を交えつつ出鱈目を言うから嘘になると思うんだよ。そう考えると、言ってることがすべて嘘の人間は、嘘つきになるのか？」

「お前は明らかに前者だがな」

「フフフ……」

俺の親友は否定も肯定もしないという技を身に着けたようだ。そうとう怪しい男だが。

笑うせー●スマン見たいな笑い方だ。

「まあ、探しておくよ」

「ああ、そうしてやれ、彼女、泣いてたぞ」

「はいはい」

こんなんだから、俺達はクラスの連中から奇異の視線で見られるんだ。

ま、何度も言うけど人のことは言えないがな。

俺はそんなことをぼそぼそ考えながら、教室を出る。

「おわっ」

「わっ」

そこで、目的の人、桐島と鉢合わせになった。

贄川の方を振り返りながら歩いていたら、若干衝突しかけるが、お互いが急ブレーキをかけて、それは避ける。

「おう、桐島。どうした？　なんか俺を探してたって聞いたが」

「あ、いや、その……今日は勉強どうするのかなって」

すっかり忘れていた。

俺はそんな大事な懸案事項を抱えていたんだった。

「今日放課後忙しいかもしれない……。昨日の件で」

俺は周りに聞かれないように、小声になりながら言葉を濁す。

まあ、昼休みの廊下なんてものは騒がしくて当然、滅多に聞かれることはないだろうが、俺の会話の相手が相手。

桐島の容姿は目立ちすぎるからな。

「まあ、その件なら仕方ないかもしれないね」

桐島は顎に手を当てて考える。

「じゃあ、この一件が終わったら、みっちりやろうか！」

「……はい。よろしくお願いします」

なんだか、やけに教育熱心な桐島さんである。

もう、見てて眩しいくらいのニコニコ笑顔。

やはり、美人はどんな顔をしたとしても美人だが、桐島の場合、この笑顔が一番似合うと思う。

「とりあえず、会長の話だけは聞いておくか？ お前も無関係ってわけじゃないんだし」

俺の問いかけに、桐島はたっぷり十秒、悩んだ末、

「そうだねっ！ もし邪魔じゃなければ、私も話くらいなら」

と言う結論になったのだった。

ふと、俺は思う。

桐島もわかってるんだろうか。

俺がどうしようもなく危険で、危うくて、救いようがないことに。あの会長、水鏡蒔拿だけが特別なのだろうか。

もしかしたら、桐島にもわかってるのかもしれない。
分かっていて、こんなクズとつるんでくれているのかもしれない。

俺は、ニコニコと笑う桐島の表情を、はかりかねていたのだった。

シャドーンザフレンド 2 (後書き)

感想、お待ちしております

シャドーインザフレンド 3

テストも近いこともあって、比較的まじめに授業を受け、放課後までやり過ごした。

なんというか、俺にあの生徒会長と桐島を回収して社会資料室に連れて行くことができるのだろうかと言う不安がこみ上げてきたが、まあ、それは何とかするしかあるまい。

「こうして、様々な苦難を乗り越え、俺達はこちら、社会科資料室に到着したのだった」

「何言ってるの?」「」

フツ……どうやらこいつらにモノローグを読む力はないらしいな。そんな力が備わってるのは贄川と悠花ちゃんくらいなもんだ。それ以前に、そんなのがごろごろいて堪るか。

「前山ー、入るぞ?」

俺達は引き戸を開けて、室内に入る。

「なんだ、今日は複数の女子をはばらせてるのか?」

部屋に入るなり、聞き捨てならないセリフが飛んできた。

「てめえ……。まあいいや。知ってるだろ? うちの高校の生徒会長だよ」

「お前はまた面倒事を持ち込んできやがってよお」

相変わらずと言っかなんというか。

なんとも前山じみたため息イッパイの言葉だった。

「お前のことだから知ってるんだろうが、前山、会長の話聞いてやってくれ」

「生徒会長か……。三年A組出席番号21番、水鏡蒔拿。身長165センチ、体重は50キロ。三月三日生まれ。血液型はAB型。成績は優秀、スポーツも万能。絵に描いたような生徒会長。家は自営業。くらいしか知らないがな」

「充分じゃねえか」

どうやってその有り余る個人情報を集めたのか、気になるところだが。

まあ、深入りはすまい。

そして、なぜ、この会長は平然としていられるのかも。

「お話はいいかな？ 阿僧祇君。いやはや、何度も言うようだが君には全く失礼をしてしまった。私の判断が早計だった。申し訳ない。桐島女史よ、君にも迷惑をかけてしまった。今日は腹を割って私の力について説明したい」

ぺらぺらと演説のようになしゃべる会長。

……。

身勝手ながら、会長の話を要約してしまつと、こつこつとらしい。

会長、もとい水鏡蒔拿は、力が弱かった。

いや、剣道部で主将をやっているくらいなのだから、今は強い。

そう、今は強い。昔は弱かった。

生まれつき、筋肉の質なのか量なのか、それともホルモンバランスとかなんなのか。

そんな感じの理由で、彼女はおよそ力、身体能力と言うものにおいて、他の同級生よりも劣っていた。

生まれつきの非力。

それが彼女のコンプレックスであり、悩み。

先天的な者のため、いくら自分が鍛えようが、他の人間との差は埋まることはない。

まあ、運動やスポーツが絶望的に苦手と言うだけであって、彼女自身の体つきは普通であつたし、実生活には何の影響もないのだが。

だが。

親の教育のせいであろう、彼女、水鏡蒔拿は、人一倍正義感に満ち溢れた少女だった。

まったく、親も良い教育をしたものである。

だが、そこが問題。

怪異と関わることとなった問題。

正義感なんてものは自分勝手の裏返しのようなものだ。

正義感も自分勝手も、力がなければ振りかざせもしない。

正義なんてなおさら、力がなければならない。

逆説的に言ってしまうえば、力がなければ正義じゃない。

当時小学生だった彼女も、それをわかっていたのだろう。
力こそが正義であり、自らに力がないということ。

『正義は勝つ』とはよく言ったもので、文字通り、歴史の教科書を開いてみるだけでよくわかる。

過去の変遷をちよつと見るだけで、分かってしまう。
正義が最後には勝つ。

当たり前だ。

勝った奴が正義を手にするのだから。
最も力を持つものが、正義を名乗るのだから。

「私にはそれを成し得る力がなかった。武術を片っ端からやったが、一向にうまくならない。強くならない。運動もてんでダメ。五十メートル走が16秒だった時は、一週まわって笑ってしまったものだ。だから求めた。私は」

力を。

求めたのだった。

「そんな時、突然だ。本当に突然。話しかけてきたのだ。影が」

影。

夕暮れに伸びた、色の濃い、真っ黒な影が、彼女に語りかけた。
力が欲しいかと。正義が欲しいかと。

そうして、彼女は、欲した。

力を。

正義を。

己の正義を。

「^{かげおに}影鬼”。だな、そりゃ」

前山はゆつくりと、語り始める。

「やったことあるだろ？ ^{かげおに}影鬼。鬼に影を踏まれたら、アウトーっ
ていう兇戯。遊戯」

「知ってはいるが、やったことはないな」

「まあ、知ってるならいいさ。あれな、元々地獄の遊びなんだよ」

地獄の遊び。

「そんなに辛いものだったっけか？」

「いやいや、地獄の遊び。地獄での遊びってわけだ。この影鬼と、
影鬼する。まあ、この鬼から遊びの名前は来てるんだけどな」

「影鬼、か……」

「元々は地獄の鬼。罪人を裁く影だ。地獄に落ちた奴は、コイツと
永遠に鬼ごっこをすることになる。もちろん、影を踏まれたら動け
なくなつて、食われるけどな」

永遠に鬼ごっこ。

考えただけでつらそうだ。

「そいつは、人間に力を貸すもんなのか？」

「貸すときや貸すだろうな、怪異だもん」

あっさり。本当にあっさりとした口調だった。
塩ラーメンよりもあっさりしている。

「危険は？」

「ん？」

「危険はあるのか？」

対価、代償と言い換えていいかもしれない。
力を手にしたことによって、危険はあるのかないのか。

「さあ？」

「さあ？ お前、なんでも知ってるんじゃないのかよ」

「前にも言っただろ？ 人間の心は分からない。その生徒会長の心の持ちようだ。精神力と言って良いかもしれない」

まあ、と前山は続ける。

突如、前山の視線が鋭くなったような気がした。

「おそらく、お前の判断は正しいよ。ここで水鏡に話させたのがな。

教室とかでやられた日にゃ、堪ったもんじゃない」

「……？　どういうことだ？」

意味が分からない。

だが、次の瞬間には分かった。
分かってしまった。

ペリペリペリ。

異様な音。

のりで張り付けたものを、無理やりはがすような、この場にはふさわしくない音が、室内に響き渡った。
咄嗟に後ろを振り返る。

そこには、影。

まさしく影が起き上がっていた。

こういう言い方しかできないけれど、まさしくそう。
まったく文才のない自分に嫌気がさす。

会長の影が、地面からペリペリと剥がれ、まるで生き物のように起き上がったのだ。

その場にいる者、正確には、前山を除く全員が絶句する。
その影の持ち主、水鏡蒔拿でさえ、その例からは漏れない。

「な、な……何なんだ、これは……」

生徒会長は口を金魚みたいにパクパクさせて、やっとこさ言葉を紡いだようにしゃべる。

そんなことは、こっちが聞きたいというのに。

しかしながら、次の刹那には、彼女も口が聞けなくなってしまった。

影が、自分の持ち主、水鏡時拿に張り付いた。

「っ!？」

声にならない悲鳴を上げる生徒会長は、見る見るうちに全身を影で覆われていく。

5秒もしないうちに、影が彼女の全身を飲み込んだ。

『ううううううううあゝあゝ!』

まさしく、影がそこにいた。

影に飲み込まれてしまった彼女も、真っ黒に染まり、目も耳も髪の毛も見て取ることができない。

ただ、その姿は人型を保っており、いうなれば、立体的な影がそこにいた。

そして、その影は、ゆっくりと、手に持っていた袋から木刀を取り出す。

やばい。

直感的にそう感じたと同時に、俺は影と桐島の間割って入り、自分でもガードの構えをとる。次の瞬間。

パン！

という音共に、俺の重なるようにガードしていた上方に位置する右腕が、いつの間にか消えていた。

何かをたたいたような音が、影が木刀を振った音だと。

今自分は木刀によって右腕を失ったのだと、気付くのに、結構な時間を要する。

「……っ！？」

自分で考えたわけでもなく、完全に100パーセント反射で、影のどてっばらを蹴り下した。

少しだけ後ろに後退したが、ダメージを受けている様子は微塵にもない。

先ほどの一撃で折れてしまったのであろう、木刀の柄を投げ捨てると、影は、拳を握るような動作をとる。
やばいやばいやばい。

木刀をあんな恐ろしい速度で振る奴の拳なんか食らったら、俺でもただではすまない。

下手すりゃ後ろにいる桐島も危ない。本当にマズイ。

と、そんな時、この場にそぐわない、全くもってやる気ない声が、

俺は冷静なりながら、桐島を諭す。

まるで素っ頓狂なセリフだ。

まったく、俺も心配されたものだ。

「今は、あの鬼を追うのが先だ」

「気が抜けたんだろうな」

これまた冷静に、前山は真実と思われる考察を述べる。

すっかり日も沈み、俺の腕も無事くつついたところだ。

桐島にもちゃんと説明したし。

「あの生徒会長は、お前みたいなのに出会ったのは初めてだと言ったんだろ？」

「ああ」

「だとしたら、うん。間違いないな。あいつは俺達、つまりは怪異と関わった同じ穴のムジナに、自分のことを話したことによって、精神的に緩んでしまった。」

「どういうことだ？」

「あいつは、影鬼。つまり自分に憑いている物の怪について、今の

今までずっと抱え込んできたんだ。小6からとすると、まあ、ざっと六年もの間な」

それだから。それ故に。

彼女、水鏡時拿は、強固な精神力を保っていたのだ。だが、たった今。それはなくなってしまった。

悪い言い方をしてしまえば、俺達に、心の拠り所よこしろを求めてしまった。た。

甘えてしまったのだ。

「そこ、鬼に付け入られたってことか。いや、憑け入られたか」

「おそらく、待っていたんだろうな、やつ、影鬼も。六年もの間、あいつの体に乗っ取るのを」

「止める方法は？ あるのか？」

「おそらくは、お前ならいける。悪魔、怪異のお前なら、水鏡の体に癒着している鬼を、無理やり引きはがせる」

「じゃあ、俺が行くしかないな？」

「ああ、だが、現実的じゃない。とても」

前山はこんな話をしているというのに、いつもとなんら変わらないペースを保っている。

「相手は本物。モノホンの妖怪だ。半分どころか、四分の一以下し

か力を使えない悪魔もどきのお前が、勝てるわけがない。お前の性質上、相手の影を踏んで動きを止める能力を無視してもだ」

「ふーん……勝率はどのくらいだ？」

「おそらくは0.1%にも満たないレベルの話だぜ。そだな、例えるなら、中学生がプロボクサーに勝つようなもんだ」

それはそれは、何とも分かりやすい例えだこつて。だけでも、だけれども。

「ゼロじゃないんだな？」

俺の問いかけに対して、前山は黙りこくる。

妙にぎらついた目で、俺の死んでいると揶揄される目をまっすぐに見据えて。

そうして、たつぷり10秒。

「まったく、困ったものだな。お前は。そこまで行くと、逆に気持ち悪い」

「おいおい、自分で言うのもなんだが、俺は偽善者なんだぜ？」

俺はおちゃらけた感じで返答してみる。

前山は俺をジトツと睨むだけだった。

おそらくは、「勝手にしろ」と言っているのだろう。

こいつは何よりも面倒くさいことを嫌う男だから。面倒くさいことを回避するためには、全力を尽くす男。

「じゃ、ま、とりあえず夜中に行動開始する」

その方が、俺にとっては少しでも勝率を上げることである。
まあ、相手が相手だし、意味があるのかどうかは甚だ疑問だが。

俺は黙って資料室を出る。

もう月が煌々と輝いており、それに照らされて投影されるはずの影も、もう消えていた。

「阿僧祇君」

続けて、今まですっかりおとなしくしていた桐島が出てきた。

「悪かったな。こんなことに巻き込まれて」

俺はとりあえず謝しておく。

元はいえ、俺が桐島を連れていたからこんなことになってしまった。

それにこいつには怖い思いをさせてしまったし。

思えば、思ってみれば、

本当なら、桐島は今頃平穩に暮らしていたはずなのである。
俺なんかと関わらなかつたら。

「どうして……どうしてそんなこと言うの？」

「どうしてって……」

んなこと言われても。

桐島は、なぜ泣いているんだろう。

「分かってるの？ 阿僧祇君、負けちゃうんだよ？ 99.9%、勝てないんだよ？ 下手すれば殺されちゃうかもしれないのに、どうして私の心配なんかしてるの……？ なんでもっと自分の心配しないの？」

全く理解できない。
みたいな声をしている。

「桐島、お前、俺が心配なのか？」

「え？」

「俺が心配か？」

「当たり前だよ……！ これで心配しない方がどうかしてる」

そっか、とだけ応えた。

桐島は俺のことを心配しているのか。
って、何言ってるんだ俺、さっき自分で言ってたじゃん。

「だけど、なんだろうな……うれしいよ。ありがとう」

正直に言ってしまうと、俺は今まで他人から心配されるような、御大層な人生を送ってきてはいない。
なんだろう、まあ、いるにはいたが。

俺のことを心配してくれるような人間は、妹しかいなかった。

「桐島、お前に教えておくよ」

「……………」

「俺が他人に優しくする訳」

俺は前山じゃないけれども、ゆっくりと語りだす。

「昔さ、俺の大切な奴が言っただよ、俺に」

親を大切にしろ、友を大切にしろ、赤の他人を大切にしろ。自分以外の人間に優しく、たとえ疎まれようと、その人の為にできることをしろ。そうすれば、そのなんでもないことで、友や、親や、赤の他人が、自分を大切にしてくれる。

「それが、俺の正義だ」

「大切な奴って……………」

「まあ、昔の話さ。でも、そいつは正しかった。お前はこうして俺みたいな路傍の石ころのことを、心配してくれているわけだし」

「……………」

「それじゃあな、桐島、今日はもう遅い。送ってはいけませんが、家に帰れ」

俺はタイミングを見計らって、そんな話を持ち出した。

「……………でも!」

「帰れ」

「……」

桐島は、しぶしぶと頷いて見せる。

何故泣いていたのかはわからないが、もうその涙は乾いて、顔に若干の跡が残っているだけだった。

「それじゃあ、また明日ね、阿僧祇君」

桐島は念を押すように、その言葉を言う。

何度も何度も言った。

それに俺は、

「ああ、また明日」

と答えるしかなかった。

校門まで桐島を見送ると、のんびりとした歩調で校舎に戻る。さて、これで心置きなく、影鬼さんと鬼ごっこできるわけだが。

「どうしたもんかねえ」

はつきり言って、全く策がない。

あると言えば、影鬼を呼び出す作戦くらいなものだ。

しかし、呼んでも、呼んだとしても、勝てなければ意味がない。

勝てなければ、会長は正気を取り戻せないし、俺も犬死だ。

だが。

だがどうしたらいい。

（ククク……困っているようだな）

「……!？」

突如突然、俺の頭の中に、声が響き渡る。
若くもなく、老いても居ない、男の声。

「お、お前……！ 起きたのか!？」

そう、この声には聞き覚えがあった。
今まで、長い眠りについていて、俺の中のもう一つの存在と言っ
てもいいかもしれない。
そんな、そんな存在。

（声に出さずとも、我に話しかけるように思考すれば伝わるよ。我
が主）

悪魔。

俺の中で眠っていた、悪魔だった。

（お前、もう起きて大丈夫なのか？）

（主よ……貴様が大きな負傷を負うからではないか。主の感覚は我
にも通じているのだぞ？ あんな痛みで眠れるわけなからうが）

（それは何というか……すまなかった）

確かに、悠花ちゃんの件と言い、今回と言い、俺は怪我をしすぎ

た。

しかも大怪我である。

それで目を覚まさない方がおかしいな。うん。

（まあいい、今はそんな話をしている場合ではないのだろうか？）

（話は聞いてたのか？）

（記憶も共有しておる。まあ、我も主に死なれるのは、本意ではないからな、手を貸すくらいならやぶさかではないぞ？）

（なにか、考えでもあるのか？）

圧倒的、というか、文字通り、悪魔的奇策。

そんなものがあるというのか。

だがしかし、この悪魔の言ったことは、俺の想像の斜め上を行く、奇策と呼ぶにはあまりに乱暴な代物だった。

（なーに、主よ。さつき若造が言っていた貴様の勝てる確率を、ほんの少し、上げるだけだよ）

若造つてのは、前山の事だろう。

（ざっと500倍程度にな）

0.1%の500倍。

50%。つまりは、五分五分。

悪魔は俺に、甘く囁いた。

シャドーンザフレンド 3 (後書き)

超展開、だと思われけり

感想、お待ちしてます。

シャドーインザフレンド 4

ガシャンガシャンガシャン。

リズム感よく、小気味よく、私立霧丘高校の廊下に、けたたましい音が響き渡っていた。

いやまあ、何をやっているのかと、言ってしまえば、俺がガラス窓を、手にした箒で叩き割っていた。

別に今日が卒業式ってわけでも、この後に盗んだバイクで走り出すわけでもない。

そういう訳ではないが。

明日、すごい騒ぎになるんだろうなーとか考えている今この頃。

ただ今、夜中の一時半。

晴れて、一階に配置してある窓すべてを割り終えたと、俺は素早く移動した。

目指すは体育館。

そのためにはまず、昇降口を右折して渡り廊下を渡り、そこにある階段を上る。

事前に職員室からかつぱらってきた鍵を使い、重めの鉄の扉を開ける。

まあ、一般的な体育館となんら変わらない風景が、そこには広がっていた。

言っておくが、ここは普通の高校である。

「学校中の扉が鍵もかけられずされずに開いていたということは、前山が何かやったんだろっな」

俺は舞台に腰かけながら、そんな独り言をつぶやく。
まあ、今となつては独り言ではなくなつてしまつたが。

（しかして主よ、このようなことで本当にあの影の者は来るのか？）

（俺の見立てでは来るよ、必ずな。えーと……お前のことはなんて呼べばいいんだ？ やっぱアハネスか？）

（その名は好きではない。そんな我をコケにしたような名、二度と呼ばれたくはないな。それに、もう我は貴様の一部だ。好きな名を付けろ）

えー……。いきなり名前つけろって言われても。

何だろうか。悪魔だろ？

なんか真つ黒なイメージしかない。

ふむ、気まぐれな奴なんだよな。

気まぐれ……。

（？^{くら}なんてのはどうだ？）

気まぐれな猫のような名前だ。

こいつの陰鬱なイメージを払拭するにはちょうどいい。
と思う。

こんなふざけた名前を付けられて怒らないだろうか……。

（うむ、？、か。私のイメージを端的に人間感覚の色彩で表したということか……。悪くない）

気に入ってくれたようだ。

人間の思考パターンはわからないらしいから、この名前が猫みたいだと認識できていないのだろう。

要するに、クロ〃猫の名前、みたいなイメージが全くない。

「……！ 来たぜ、？」

さてさて、こんなくだらない会話をしている間に、お出ましのようだ。

（分かっている）

いつの間にか、というか、当たり前のように、影はそこにいた。まるでそれがこの世の理であるかのように。

閉めたはずのの体育館の扉が、いつの間にか開いている。

やはりそうか。

あんな、真っ黒な姿に成り果てようとも、奴は生徒会長らしい。

おかしいとは思っていた。

何故社会科資料室から逃げ出す際、わざわざ扉を開けて、出て行ったのか。

奴ほどの力ならば、扉をブチ破った方が早いに決まってる。

それでも、影鬼、もとい水鏡時拿は、扉を破壊しようとはしなかった。

これがどういふことを示すのか。

それは、彼女がまだ鬼の中で生きているということ。

彼女の、生徒会長としての意識。学校を壊してはいけないという倫理観、道徳観、常識的見解。

そう言ったものが、未だに残っているということなのだろう。

『あゝあゝあゝ あゝ ああああああ！！』

そこで俺は、学校のガラスを割って回った。

おそらく、彼女が来るだろうと踏んで。

現に、彼女はこうして来たのだ。変わり果てた姿でも。

自らの正義を守るために。

（さあ、主よ。覚悟はいいか？）

（ああ、いつでもいいぜ）

（我の精神が貴様という肉体の操縦桿になることによって、貴様の力は我の元々の力に近づくだろう。だが、それは同時に主が悪魔化するということ。人間には戻れないということ。それは我の本意でもない）

難しくて訳が分からない。

が、要するに、こいつが俺を乗っ取れば力が増すということだ、

そうしてしまつたら、もう俺は人間ではなくなつてしまい、もう元には戻れないと言つことだろう。

（ああ、わかつてる）

（そこでだ、我が主に会う前、世界中を回っていた時にとある悪魔からちよろまかしてきたものがある）

ちよろまかすつて……。

どうにもコイツはしゃべり方と語彙に違和感があるんだが。

（我はまだ”それ”を持っている。だから、”それ”を、ほんの少しだけ、貴様に貸してやる）

（んなもん、どうやって出すんだよ？）

（名を呼べ。ただそれだけでいい。”それ”の名前を。英語では、たしかrequiem）

（requiem？ それって……）

（そう、たしかこの国の言語で……）

俺達は、同時にその名を呼ぶ。

「鎮魂歌」

巨大な紅。

それしか感想が出てこないようなものが、俺の手に鎮座していた。

「鎌……？」

鎌だった。

俺の身の丈を軽々と超える超巨大な鎌。

刃や柄は所々湾曲していて、なんだか、禍々しい雰囲気醸し出している。

さらに、最大の特徴と言えば、赤いことだ。

湾曲している柄も刃も、その鎌を構成するすべてが紅色。簡単に言ってしまうえばまっかつか。

「軽いな、これ」

その巨体の割に、この鎌はそれほど重くはなかった。

と言うより、これは鉄でもなければ金属っぽくない。

一体、この鎌は何で出来ているのだろうか？

（鎮魂歌。その名を示す通り、魂を鎮める鎌だ。昔、ある悪魔から盗んだものだが、その悪魔はそいつで他の悪魔を殺して回っていたのだよ）

（悪魔を殺せるのか？ これで）

（逆に言えば、それで殺せるのは怪異だけだ。人間は絶対に殺せない。まあ、肉体から分離した魂を切るくらいならできるかもしれないがな）

なるほど。

つまりは、悠花ちゃんの時に遭遇した、螯の鋏と、似た性質を持っているということなのだろうか。

まあ、こちらは名字なんてものは切れそうにないが。

（鋏^{あれ}は鋸^{やつ}の望んだものを切るものだ。だから、人間を切れない。だがな、こっちは違うんだよ。魂だけを、靈魂だけを、実体無き者を切るためだけにある。そう、殺すんだ）

鎌と言うのは元々、農具の一種だ。

無駄に生えた雑草を刈り取ったり、作物を刈り取ったり。

とにかく、そういう目的で作られた農具だからこそ、死神とか悪魔が持っているようなイメージがついてしまったのだろう。

そう、命を刈り取る道具だからだ。

「これで、五分五分ってわけか？」

ずいぶんと頼りないことを言ってくれるじゃないか。

（知りはしない。あとは、神にでも祈れ）

「悪魔が吐くセリフとは思えないな。ただまあ、感謝してるよ、？」

これで、勝負になる。

勝つか負けるか、自分の頑張り次第になった気がする。

俺の頑張り次第によっては、桐島との約束も、守れそうだ。

『ううううううあー！！』

めっちゃめっちゃでかい声だ。叫び声だった。

体育館中に木霊して、窓をガタガタと揺らしている。

「ガラス割ったのは謝りますよ、すいません」

俺は心にも思っていないことを口にしながら、鎌を構えた。
俺の身の丈を優に超える大鎌。

正直言つて、鎌は実戦に向かない。

と言うより、さっきも言つた通り、鎌自体がそもそもとして戦いを
目的として作られていないのだ。

だがしかし、やるしかないのだろう。

我が校の生徒会長を、解放するためにも。

水鏡時拿の、正義を打ち砕くためにも。

「ちよつと、不良少年に鎌^{かま}ってもらいますよ？ 生徒会長」

我ながら、ひどい洒落だった。

『が あ あ あ ああああああっ！』

鬼が俺に突っ込んできた。

いや、突っ込んできたという表現は、あまりにもかけ離れているな。
飛んできた。

恐ろしいほどの速さだ。

一瞬にして距離を詰められてしまう俺。

「ぐっ!？」

相手のラリアットののような手を横に振る攻撃を、ギリギリのタイミングでしゃがんで躲した。

俺の頭上数ミリの所で、ものすごい風切り音が聞こえる。

だが、もう片方の手を見てはいなかった。
というより、見る余裕がなかった。

残った左腕で、制服の襟を掴まれ、そのまま大きく投げ飛ばさる。俺の方が体はでかいのに、十メートルくらい垂直に投げられた。まさにと言うか、そのまんま鬼のような力だ。

だが、俺も悪魔は悪魔。それなりな身体能力は備えているので、空中で体制を立て直し、床に転がって衝撃を和らげた。

「っ!？」

いやいや、驚いた。

俺を投げ飛ばしたはずの影鬼が、頃がる方向に先回りしているのだから。

そして、相手は足をサッカーの要領で後ろに振り上げ、俺に向けて思いつき振りぬいた。

ボキッと言う鈍い音。

持っていた鎌、『鎮魂歌』の長い柄でガードはしたが、俺の転がる速度プラス足の威力じゃ、どうやったって防ぎきれない。

鎌は折れないが、それを持っていた俺の右腕がド派手な音をかまし

ながらおかしな方向に向く。

だが、それも一瞬の事、メキメキと言う音共に、すぐに正常な腕に元通り。

まったく、気持ち悪い。

「やっべー、マジでやっべー」

と言うより、得物がこれ以上ないくらい使いにくい。

一件巨大で頑丈、強そうではあるが、小回りがきかない。

しかも今回のような高速で移動、接近してきて間合いに入られる敵に対して、あまりにも相性が悪すぎる。

と、そうこうしているうちに、本気の拳が俺の腹にぶち込まれた。考えられないような勢いで、後ろにぶっ飛ぶ俺。

そのまま、体育館の壁に激突し、ずるずると下に崩れ落ちた。

「ぐっ！ おゝえゝええゝ」

急な吐き気で、床に血を吐いてしまう。

だが、これもすぐに回復……

するかに思われたが、敵のスピードが速すぎる。

もうすでに俺の目の前にまで迫っていた影鬼が、俺の手に持っていた鎌を蹴り飛ばすと、今度は俺の側頭部に回し蹴りを決めた。

「がっ！」

そのまま右方向に吹き飛ぶと、今度はそちら側の壁に顔面から突っ込んだ。

完全にピンボール状態だ。

『阿嗚呼嗚嗚呼ああゝあゝ嗚吁啞？ああつつつつ！』

声にならない声を発し、鬼が遠吠えでもするかのように、上を向いて叫び声を上げる。

勝利の雄叫びのつもりか、バカ野郎。

まあもつとも、俺はもう鎌を手放してしまったのだ。

腕力で勝てない以上、『鎮魂歌』がないと厳しい。というか絶望的。勝率0,1%に逆戻りだ。

ただまあ、まだ確率は残っている。

あきらめてはいけない、と思う。

そんなことを考えている間にも、俺の傷は見る見る治る。

なんか、字面がいいな、見る見る治るって。

（何バカなことを考えているのだ、主よ……。まったく、貴様が死ねば、我も死んでしまうというのに）

頭の中に、若干苦しげな？の音が響き渡る。

「勝つぞ……？」

（我はそのために動いたのだが？ 勝てない勝負をするなど、元よりそんなつもりは無い。そんなものはバカもいいところだ）

まあ確かに、勝てないとわかって勝負を挑むなど、バカのやることだな。

だが、それはあくまで勝率が0%の場合だ。

俺の予想が正しければ、勝機はある。

当初前山が言っていた、0・1%の可能性ってやつだ。

「そのためには、もうちつとばかしボコられなきゃならないんだけどな」

(……ふっ。まあ、どのみちそれが失敗すれば、貴様も我も死ぬのだし、やってみればいい。もう少しだけ、この苦しみに耐えてやるう)

「まあ、これが失敗したら、俺とお前が死ぬ前に、お前が乗っ取ってでもなんでもして、好きにしろよ」

(……そうさせてもらっ)

相談事が終わると、俺は立ち上がる。傷はもう完全に癒えたし、足も震えていない。

側頭部を蹴られたところも大したことはない。

「さつてと、いっちょやりますか」

俺は影鬼に向き合った。

向き合ったはいいが、一瞬で視界から影鬼は消え、俺の鼻先まで奴の拳が迫る。

グシャツと言う漫画的な擬音が発せられ、俺は後方に思いつきり吹っ飛ぶ。

まあ、そこはすぐ壁で、先ほどまでぶつかってへばりついていた壁に、もう一度ぶつかるだけだ。

そして壁にぶつかる俺が崩れ落ちる前に、鬼は俺の脇腹を蹴る。ボキボキキツと、肋骨が砕ける音。再び俺は横にボールのようにすっ飛ばかに思われたが、それだけでは終わらなかった。

更に反対側から蹴り、一瞬で対面から二発蹴りを打ち込むなんて、常識外れもいいとこだ。

これにより、俺は慣性の法則に従って一度勢いを殺されると、予想していた方向とは逆向きに吹き飛ばされた。

床を数度バウンドした後、もう何度目かわからない壁に叩きつけられる。

いやあ、体育館の壁って丈夫だな。

こうやって人間をたたきつけても壊れないなんて。

こんな風についていくだらないことを考えてしまいうくらいに痛い。

「がつ……！ はッ……」

だが、鬼は容赦しない。

俺と言う、校舎のガラスを叩き割った悪を、執拗に叩きのめす。己の正義を示すために、悪魔を叩きのめす。

究極的に言ってしまうえばそうなんだ。

この世の中、ほとんどの人間は正義なのかもしれない。

正義正義。個々の正義。

みんながそんな正義を持っているから、争いが生まれるんだ。だから、そんな争いを避けるために、大体の人は自分の正義を隠す。牙を隠してしまう。

「少年よ大志を抱け」と言う格言があるが、みんながみんな大志なんて抱いてて、それをかなえるために奔走していたら、世の中めちゃくちゃだ。

どこかで誰かが挫折して、妥協して、甘んじているから、この世の中は回っている。

正義だって同じだ。

みんながみんな自分の正義を貫いていたら、世界中どこ行っても紛争地域になっていただろう。

ドゴッ！

「ぐっ！」

こんな風に。

俺は三度壁に叩きつけられ、そこで倒れ伏せる。

ダメだ。回復が追い付かない。被ダメージ量が大きすぎる。

全身の骨を片っ端からおられたような、激痛に次ぐ激痛。

もう完全に死にかけですよ的な見た目だ。

そして、俺が動かなくなっただのを見たのか、影鬼は、ゆっくりとこちらに歩いてくる。

そうだ、これが奴の正義だ。

悪は徹底的に潰す。潰れるまで潰す。

そして、とどめを刺す。彼女、水鏡蒔拿は最初からそうだった。

夕方、俺と言う悪魔を滅するため、本気で殺すため、不意打ちを仕掛けた。彼女は剣道家でありながら、俺と言う悪魔を殺すために、手段を選ばなかった。

だから、容易に想像できた。

油断なんてしない。頭を潰すなりなんなりして、確実に仕留める。俺の頭を、影鬼は踏みつぶそうとしている。

何度も言うが、己の正義を貫くために。

「だからお前は、負けるんだ……。本物の正義は、影から襲ったりはしない。特撮物でも見て、出直してこい……」

そうして、俺は口にする。

「鎮魂歌……」

俺の手に、蹴り飛ばされたはずの巨大で、真っ赤な鎌が出現した。そして、出現すると同時に、その空間にいた影鬼を、一刀両断する。

『嗚呼吁???あゝあゝあゝあゝ嗚あゝあゝあゝあゝあゝあゝアアアア嗚嗚呼っ!』

ざらつと砂が落ちるように、会長の体だけを残して、影だけが地面に崩れ落ちた。

それに遅れるようにして、会長の体も支えを失ったように体育館の床に横たわった。

（なるほど、『鎮魂歌』を己の中に一度しまってから、再び出現させたということか。考えたではないか）

「がつ……！ おえ、」

返事をしようと思ったが、肺から胃から、いろんなものがこみ上げてくる。

だが、それを気力で押し込めると、俺は這う這うの体ながらも、會長に近づいた。

氣絶しているらしい會長を差し置き、影はまだうようよと水面に浮かぶ海藻のように蠢いている。

「っ！？」

影が、一人でに逃げ出そうとしている！

いや、正確には鬼だけが會長の影から離脱し、のろのろとどこかへ行こうとしている。

「ちっ！」

俺は靈魂を切り裂く鎌、『鎮魂歌』でそれを床に縫い付ける。腹を搔つ捌かれた痛みなのか、鬼、いや、影鬼は苦しげに蠢く。

「がつ……！ ゲッホ、ゲッホ……。ようやく終わった……」

壁を背にして、思わずずるずると崩れ落ちてしまった。

そりゃ、こんだけ負傷して回復して、負傷して回復してを繰り返していたら、さすがの悪魔でも堪えるもんだ。

「さてと、あとは影鬼をどうするべきか、なんだが……」

（殺してしまえばよかろう？ 貴様にとってもこの娘にとっても、こやつは害をなすものなのだろう？ まあ、我が言えた義理ではないがな）

「ん、でも、俺の独断でコイツを殺してもいいもんか？ 仮にも鬼、つまり、人間よりも高位の存在なんだろう？」

どうにも始末に困ってしまう。

まあ、確かに、このまま鎌でコイツを切り裂いてしまうこともできるんだろうが、どうにも俺では決めかねる。

「殺すな……！」

と、そんなことを考えていると、弱りながらも凄みをきかせた声が飛んでくる。

俺が疲れ切りながらも、そちらに目を向けると、見た目はそれほどでもないが、これまた疲れ切った会長が震えながら起き上がろうとしていた。

「会長……無茶ですよ。人間の体のままあんな無茶な駆動を強い戦いを繰り返したんだ、二、三日動けませんって……」

俺も若干疲れてしまった。

「阿僧祇君、君には迷惑をかけたな……。これは私の心の弱さが招

いた失態だ。どうお詫びしていいのやらわからない。だが、これは同時に私のけじめでもある……！」

「……。どうするつもりですか？」

「私にとってこの影は、なくてはならない存在だ……。私が今現在もこうして生徒会長と言う地位を持っているのも、元をたどればこの鬼のおかげ。文字通り、影から私を支えてきた、影のお蔭^{かげ}という訳だ……」

「……」

「だからこいつは、私が殺すっ！ 私の今までの、十七年間の人生の中で、最も親密なこいつを、私は殺す！ これが、私のけじめであり、正義だ！」

「……そうですか」

俺には何も言う権利がないだろう、彼女自身が決めたことならば。其れが彼女の正義ならば。

そう答えると、会長はどこにそんな力が残っているのか、無理やりに立ち上がると、巨大な鎌の柄を持った。

おそらくは現在進行形で怪異に憑かれていた彼女だからこそ、鎌に触れられのか。

「それじゃあな、私の影よ……。今までありがとう、そして、私のわがままに付き合ってくれてありがとう。弱い私にずっと付いていてくれて、憑いていてくれてありがとう」

実際、相手は鬼だ。会長のため、なんて毛ほども思っていないの

だろう。

だがしかし、会長は言葉を紡ぐ。

「だがな、今日でお別れだ。ありがとう……。すまない……。私が身も心も弱かったばかりに、こんなことになってしまつて……。申し訳ない……。お前にも阿僧祇君にも、なんと謝つていいのかわからない……。そうだ、腹に刺さつたままだと辛いだろう？　今、私が楽にしてやる。恨むなら、私を恨め。その恨みを背負つて、私はこれから生きていく……。一生、この罪を背負い続ける……。！」

そうして最後に、会長、否、水鏡蒔^{みかがみ}拿^{まきな}は言つた。

「ありがとう、会話をしたことはなかったけれど、姿を見たことすらもなかったけれど、さよなら……。私の友達……」

彼女は、手前に自分に引き寄せるように、鎌を引っ張り、己の影を切り裂いたのだつた。

シャドールインザフレンド 4 (後書き)

最近、よく小さな蜘蛛を見ます。

よく中くらいの蜘蛛も見ます。

よく大きな蜘蛛も見ます。

感想、待ってます。

シャドーインザフレンド

「んで、結局大騒ぎじゃねえかよ……」

前山は白衣の胸ポケットから煙草の箱を取り出すと、いつものごとく気だるげに言った。

今日は水曜日だが、休校となり授業がなくなった俺は、朝からここ社会科学資料室を訪れていたのだった。

「悪かったよ……」

俺もあえて、機嫌が悪い様子をふるまってみる。

今日は開校記念日でもなければ、祝日でもない、ならばなぜ休校なのか？

それは言うまでもないだろう……。

死闘ですつかり頭から抜け落ちていたが、昨日俺は一階の窓ガラスを突つ張る男よろしく、すべて叩き割ってしまったからに他ならない。

あのままでは、一階教室を使用している一年生、つまりは俺の学年が、吹きさらしで授業を受けることになってしまう。

今は夏だし、気温的な問題はないものの、それはそこ。

「まあ、会長が疲労を引きずりながら口添えしてくれてよかったよ、あと、お前もな」

まがりなりにもこの学校の生徒会長、そして、どんな権力を持っているのかはわからないがこの男、前山のおかげもあり、なんとか

警察沙汰はさけ、今日一日休校にして、ガラス窓を修復するという結論至った。

「それはそれとして、よくまあ勝てたなあ、お前」

興味なさげに煙草をふかしながら、前山は呟くように言葉を発する。

「お前のことだから、分かってたんじゃないのか？ 悪魔が目覚まして、俺に力添えすることも、そして、最後の会長のあの行動も」

俺の中に住む悪魔、？は、疲れた、と言って再び眠りについてしまった。今度いつ起きるのかもわからない、永い永い眠りに。

「……まあ、お前が勝つであろうとこまでは分かったが、水鏡生徒会長の行動までは把握してなかったな。言つたろう？ 人の心は分からない。と言っても今回の場合は分からなくても特に問題はなかったがな」

なるほど、会長がどう思ってるのかわからないと、あの行動はよめないか、確かにその通りだ。
前山も人の心までは分からない。

ちなみいうと、昨日俺と死闘を繰り広げなされた生徒会長、水鏡時拿女史はというと、窓ガラスの件で東奔西走、もとい、右往左往している最中らしい。

生徒会長なんてのは呈のいい雑用係、という言葉は本当だったってことか。

「しかし、どうしたっておかしいんだよなあ……」

俺は頭を掻きながら呟く。

「なにがだ……？」

「桐島、悠花ちゃん、今回は生徒会長だろ？ 俺の周囲には、いや、この近辺には、そういう妖怪やら怪やらの事件に巻き込まれてる連中が多すぎるんじゃないのか、とな？」

「……」

前山は一言も発さず、ただ興味なさそうに煙草をふかしている。

「……まあ、その辺はいいわ。後々わかることだしな」

俺はてきとーに手を上げてぞんざいに挨拶をすると、扉を開けて社会科資料室をあとにする。

今日は授業もないので、これ以上学校にいる必要もないだろうけども、一応、この騒動は俺が巻き起こしらことだ。

手伝おうか、否か。

そんなことを迷っている間に、俺の脚は自然、昇降口に向いていた。

「やつぱ、今日は疲れたしな……。体中痛えし。俺が行っても何もできないし」

「ずいぶんとそっけないじゃないか？」

言い訳を考えていると、不意に後ろから声がかかる。この声は聞き飽きた感が否めない。

「会長……」

生徒会長、水鏡時拿みかがみ まきながそこにはいた。

俺の見立てでは二、三日は動けないと思ったが、今はこうしてだるそうにしながらも、働いている。

まったく、どっちが化け物なんだか……。

「後遺症、というのが正しいのだろうか？ 鬼が私から離れ、私の筋力、運動能力は元に戻るかと思ったんだが……。どうやらそれは違ったらしい」

力の残留。水鏡時拿の体には、少なからず鬼の力が馴染んでしまったということなのだろうか。おそらく、一生、少なくとも長い間、この力ある限り、昨夜の悪夢を思い出すのだろう。この人自身、昨夜のことは鮮明に覚えているらしい。

ただまあ、さすがにもう影を踏んで相手の動きを止めるなんてトンデモ能力は使えなくなってしまったとか。

「そういえば、聞いてなかったことがありました」

会長は職員室に行くということなので、途中までは一緒だ。俺はそこで唐突に話題を切り出す。

生徒会長に聞かなかったこと。聞けなかったこと。

「会長、あんたの正義つてのは、いったいなんなんですか？ そんな辺詳しく聞いてなかったような気がするんで」

学校の平和？ 少なからずそれは含まれているにしても、その範

困がどの程度のものなのか、俺は知りえない。

「そうだな、君には話す義務があるのだろう。私の正義、それは…
…世界平和だ」

「は？」

俺は素っ頓狂な声を上げる。

いやいや、そりやそうだろう、世界平和？　この人今、世界平和と言ったか？

「ふふ、まあ、驚くのも無理はないだろうね。ただまあ、勘違いしないでほしい、ここでのいう世界と言うのは、”己の世界”ということだ」

「己の世界」

「そう、自分が今見て、聞いて、感じている世界。自分の感覚の世界と言って良いかもしれないな」

つまり会長は、その自分の感覚の世界とやらの平和を守りたかったということか。

「自分勝手だろ？　わかってるんだ。こんなものは独善だ。独りよがりの正義でしかない。否、元々正義と言うのは独りよがりであるものなのだと、最近では思い始めているけれどね」

「つまり、会長にとっての俺は。会長の正義にとっての俺はコンピュータウィルスか何かってことですか」

「いや、君に限らず、物の怪は私の世界にとって悪でしかなかった。奴らは話が通じない上、強大な力を持っているからね。いや、こんなものは言い訳で、実際は同族嫌悪なのかな」

「まあたしかに」

最もであつた。

「だから、話した通り最初君のことも、他大多数の物の怪と同じだと思つていたんだ。人間をだまし、こかし、貶める。そんな害悪としか見ていなかった節がある。しかしながら君は違った。君は自分に切っ先を向けてきた私のために、何のためらいもなく助けてくれたそうじゃないか？」

状況だけ見ればそうなのかもしれない。だが、昨夜桐島に語つた通り、あれも、あの行動も俺の正義に基づいたものでしかなかった。俺はそんなトラブルシューターなどではないのだ。

誰かに優しくすれば、その誰かが自分を大切にしてくれる。

「だから違ふんです。俺は会長を助けたんじゃない。俺の独善を行使しただけです。実際、俺があそこで動かなくても、後々、前山が何とかしてましたよ、たぶん」

それでもだ、と会長。

「君は自分の正義を貫いただけなのかもしれない。それは君自身にとつても私にとつても、決して正義なのではなく、正しくないのかもしれない。だが」

「だが？」

「君は優しい。誰よりも正しくないのかもしれないけれど、誰よりも危険なのかもしれないけれど、君は同時に誰よりも優しい男だ」

正しくはないけれど優しい。本当にそんなことがあるんであろうか。

確かに、正しい＝優しいではないのかもしれないが、少なくとも、俺は自分をそんな風に考えたことはなかった。

「しかし、私は私の正義を貫くために、どうすればよかったんだろうな……」

会長は曇った顔で、天上を見上げる。

「それこそ、もう過ぎたことでしょう」

「分かってはいるんだが、ふむ、君ならばどうした？ 自分には力がなくて、それでも自分の世界を平和にしたい。負けたくないと思った時、君ならばどうした？」

「逃げましたよ」

俺は即答する。

「は？」

「もし正義を振りかざすだけの力がないのなら、逃げちゃえばいいんですよ。だって、自分にはそのための力がないんだから、どうしようもないんだから、他の力のある奴に守ってもらえばいいんですよ。そして、自分は自分にできることをするんです」

俺が何の気なしに自分の考えを語っている途中、終始会長は啞然とした顔をしていた。

「人間、無理に努力したり、気張る必要はないんです。それぞれの人間にはそれぞれの役割があるんですから。そんな無理に鬼になんか頼らなくても、逃げればよかったんですよ。隠れればよかったんですよ。そうして、生きていけばいいんです。辛いことから逃げればいいんですよ。影なんて踏んづけて、親にでも何でもすがればいいんです」

とはいっても、世の中には逃げられないことの方が多いのかもしれない。俺達で言くと、学業が最たるものだろう、あれからは誰も逃げられない。逃げられないからこそ、努力するのだ。

人間には、生きている限り、逃げてはいけない時がいくつもある。だからこそ。

「だからこそ、逃げられるんなら逃げちまえばいいんです。片意地張らないで、プライドなんか持たないで、つらいことから逃げられるときは、一目散に逃げて、隠れる。そうした方がいいんだと思いますよ」

どれもこれも、節度あつてのことだが。例えば、友達が困っているのを見過ごしたりすると、評判が悪くなる。

先ほども言ったが、逃げられても逃げちゃいけない時もあるということだ。

「俺はそう思いますけどね？」

会長はしばし沈黙した。だが、その数秒後。

「ぶつ」

⌈
⋮
?
⌋

「くくくっ！ あははははははははははははははははははははははは！」

爆笑。あ、いや、一人で笑うのは馬鹿笑いだっけ？

「ははっはっはっは！　くくく……まったく、君はつくづく面白いね！　ははははは！」

なんかもう、腹抱えて笑っちゃってる感じた。抱腹絶倒。涙目で大笑いをする会長。

「君は……ははは、勇敢なのかね？ 臆病なのかね？」

「……なんで、そんなに笑うんですか？」

別に受けを狙ったわけではないのだが……。まじめに話していた分だけ、ちょっと傷つく。

「いや、悪いっ！　なんだか急に、自分が馬鹿らしくなってるね。そうか、辛いことから逃げるか……考えもできなかった選択だ」

ニッコニコ笑顔で会長が弁解の言葉を述べる。そういえば、この人のこういう顔を見たのは初めてかもしれない。

いつもは笑っているというより、にやけているからな、この人。そう思うと、今日は何だか会長のいろんな表情が見れた気がする。

「ありがとう、阿僧祇君」

今度は清々しい顔。

「私は君という後輩を持てて幸せ者だ。今回の事のお礼もしたい。もし困ったことがあったら何でも言いたまえ、”私にできること”だったら、逃げないで協力しようじゃないか？」

最後に会長はそれだけ言うと、まだまだ改修作業が残っているかと、さっきよりも軽い足取りで職員室に消えて行った。
なんというか……嵐のようにきて去っていった。

「あんたの方が面白いわ……」

俺は呟きながらも、歩を進める。

やばい、やっぱり体が重いし、そこらじゅう痛い。特に念入りに碎かれたからか、脇腹の辺りが特に悲鳴を上げている。

「よ、阿僧祇」

廊下を曲がると、贅川が背を壁に預けて立っていた。
一体どうしたというのだろうか？

「どうした、贅川。珍しいじゃないか」

「いやいや、阿僧祇君は今回、どんな事件に巻き込まれたのかな、とね？」

「……」

「嘘嘘、冗談だよ。お前の一挙手一投足を俺が知るわけないだろ？」

「それも嘘、なんだろ？」

「……ふつ、まあいいや、言ってしまうと、お前が事件に巻き込まれたのは知ってるが、その詳細は知らないって感じだな」

「どついう要件だ？」

「冷たいな？ 俺はお前のことをこれでも”気の置ける”友人と思ってるんだぜ？ そんなお前が事件に巻き込まれたんだ、黙って”見過ごす”しかないよな？」

こいつもコイツで、不器用極まりない奴だ。正直に言え、正直に俺が黙っていると、贄川はこんなことを言い出した。

「まあさ、困ったことがあったら、俺には言えつてことだ。これは本当」

なんとというツンデレ。気持ち悪いZE。

「そんだけ。……ただまあ、お前が俺の嘘を知るのは、いつなんだろうな？」

奴の去り際の言葉だけは意味深だったことを覚えている。

おかしい人間二人とエンカウントしてしまった俺であるが、ここに来て、ようやく昇降口にたどり着くことができた。

他の生徒は今日が思わぬ休校となったため、今頃は午前中から友人たちと楽しく遊んでいることだろう。

そんな中、俺はそこに立ち尽くす人を発見する。

「……桐島」

そいつの名を呼ぶ。

クラスメートでクラスの人気者、桐島葵が、誰とも行動を共にせず、そこに立っていた。若干顔がうつむき気味なので、その表情までは見て取れない。

「すうすう……」

大きく息を吸い込む桐島。

そして。

[illegible]

超大声。

もしかしたら、昨夜の鬼の雄叫びよりも大きいかもしれない声が、俺の鼓膜を揺さぶった。

体育館と昇降口という場所的な差はあれど、女子高生の発する声とは思えない。

だが、そんな声でも透き通っているから不思議である。

啞然としていると、さらにそれを助長させることが起きる。
桐島が俺の胸に飛び込んできた。

「ぐああああっ！」

抱きつかれたことをすっ飛ばし、悲鳴を上げてしまう。

悪魔の回復力は有れど、昨日の戦闘で怪我を繰り返したことにより俺の体は結構限界を迎えていた。？の話よると、これはかなりましな方らしいが。

「……なんで」

そんな俺を盛大にスルーして、桐島が泣きそうな声を発する。いや、泣いているのか。

「なんで、生きてるなら連絡の一つもないわけっ！？」

やっぱり泣いていなかった。

「どんだけ心配したか分かってんの！？　ねえ！」

めっちゃ責められた。

俺の鼻先三寸まで桐島の顔が迫り、不覚にもドキッとしてしまったのは秘密だ。

まあ、怒っていても美人は美人だし、なんか良い匂いもしてくるし。

「本当に死んじゃったかと……思ったんだから……。ずっと起きてても何の連絡もないし……。朝学校に行ったらガラスが全部割れるとかで……。授業なくなつて、阿僧祇君は見当たらないし……。」

実は泣いていた。もうわからん。

「あー……なんというか……ごめん」

俺にはこれくらいしか言うことがないだろう。

モテる男とかだったら、ここでもう少し気が利いたセリフを言えるんだろうが、残念ながら俺は純情な男なのだ。

女の子にこうして迫られるという経験を、未だかつてしたことが……ない。

……うん、たぶんない……と思う。

「もうあんな危険なことしないで……って言っても無理なんだろうけど……」

「あー……。そうかも……」

どう返答しろと言うのだろうか、わからない。

「まあ、それでも、生きててよかった。阿僧祇君も、生徒会長も」

「だな」

それに関しては激しく同意である。誰も死なないに越したことはない。

命は大切である。本当に。

「ところで桐島。とりあえず、ものは相談なのだが……」

「うん？」

だいぶ落ち着いたのか、桐島の涙は乾いていた。

「離してはくれないか？ 結構、この体制は今の俺とっていろんな意味できついんだ」

その後、桐島はぎゃあ、とか女子高生らしからぬ声を上げると、急にもじもじし始めた。

お互い、今日は授業がない。同時にやることはない。とりあえず、何も言わずとも、一緒に帰ることになる。

……。いやいや。いやいやいや。
あつたのだ。やること。

二人で短い路線の電車に揺られながら、帰り際、桐島はこう言った。

「帰ったら、テスト勉強しなきゃね？」

シャドーインザフレンド 了（後書き）

深夜のテンションでお読みください

「……あー？ あー。マイクのテスト中うう」

「何やってんだ？ そのにえかわ ななし贄川那奈志君」

「おい阿僧祇、これあとがきじゃんかよ！ あとがきだぜあとがき！
久しぶりにまともなこと言った気がしたぜ！」

「マジで？ お前ってどれだけまともな事を言っ
てねえんだよ」

「っていうか、なんで俺らあとがきに出てんだよ？」

「分かんねえよ。いつの間にやら、ここに連れてこられて、
「面白
いことやれ」だぜ？」

「しっかしあの生徒会長、大した奴だ」

「もうあの人滅茶苦茶だろ？ メタとか、そういうレベルじゃない
よ？ 本編で俺らちよつとシリアスに絡んじやつただけに恥ずかし
いしよ」

「俺が連れてこられる途中、あの生徒会長は、「最近暗い展開だっ
たからな……私のせいで」とか言ってたぞ？」

「自分でやれよ！ いやマジで。暗い展開による陰鬱な雰囲気を払拭する為に後輩にむりくり面白いことさせるって、あの人はどこぞのジャイ・ンかよ」

「っていうか、この部屋マイク以外鋼鉄製と思われるの扉しかないし、やるしかないんじゃないか？」

「そうかもしれないが……。だいたい、なんで俺とお前なんだよ。話方似ててどっちがどっちかわからんわ！」

「大丈夫、ボケが俺でツツコみが阿僧祇だから！」

「すでに役割分担がつ！？」

「それじゃあさっそくボケるぜ！」

「ああ、始まった……」

「ゾンビのものまね。うゝあゝあああああああ！」

「……………」

「…………どう？」

「いや、そんなドヤ顔されても……。こっち見んな」

「似てたか？」

「似ていたか似ていないかで言えば、うん、似ていた。でもおそろ

くこれを見ている人には伝わらないぞ。ていうか、小説でそのネタをチヨイスした意図が全く分からない」

「俺にもわからん」

「もうなにが何だかわからな過ぎて、何がわからないのかもわからなくなってきた」

「もうお前が何言ってるのかわからん」

「とにかく、次だ次！ 早くボケろ！ 俺がツッコむ！」

「開き直った！」

「よっしゃ来い！」

「ゴホンッ、この間、俺が道を歩いていたら中年のおじさんと通りすがったんだ。まあ、いかにも管理職系の」

「うん」

「そうしたら、俺とすれ違いざま、耳元でそのおじさんは、「G・^{ジー}W！」と叫んで、そのまま去って行ったんだよ」

「分からん！ そのおじさん壮絶過ぎんだろ！ 何だよ、G・Wって！」

「考えうるとすれば、G・^{ゴールデウィーク}Wだな」

「はっ！」

「きつと、あのおじさんはゴールデンウィークの妖精だったんだと俺は考えている」

「ずいぶん限定的な妖精だな……」

「だけど、そうとしか考えられないんだよ」

「そうとしか考えられないか？」

「まあ、こんなところだ。どうだった？ 俺のボケ」

「え、今のボケだったの？ 何かで言えばエピソード話じゃないのか？ まあ面白かったけどさ」

「面白ければボケなんだよ！」

「そうだったのか。それは分からなかった。すまん」

「あ、もう時間だな」

「だな」

「さて、ここでクイズ！ 俺達は、このコーナーで『わからない』と何回言ったでしょう？」

「わからねえ！」

ドリームオブライ 1

夢というのは誰もが見るものだ。

一口に夢と言っても二通りの意味があつて、一つは少年漫画誌が大好きな、将来やら未来やらの夢。そしてもう一つは、寝ているときに見る夢である。

後者の方は、意外にも科学的に解明できない点が多々あり、最も有力な一説によれば、脳内での記憶の整理、なんていうのもある。つまりは、人間は起きている間に起こった出来事を、寝ている間に整理する。

ただ、ここで一つ問題なのが、それでは、夢に置いて、自分が見たものしか見られないではないかという問題である。

正直言つて、俺は見たことも無いような夢。つまりは、記憶にない夢を見たことがある。

そして、今俺はそれを見ている
明晰夢、というのだったのだろうか。これが夢であると分かっている夢。

現在、俺は夢の中で、実家の前に立っていた。ずっとずっと遠くにある、俺の実家である。

「蒼真」

不意に後ろから声がする。優しい女性の声。俺はこの声に、聞き覚えがあつた。

「お袋……」

俺の実際の母親であった。その隣には、父親も立っている。二人は優しく暖かな笑顔をして、自宅の玄関の前に立っている。まるで俺を迎え入れるかのように。

「蒼真、お帰りなさい。ごはん、出来てるわよ？」

やめる。

そう言おうとしたが、口が開かない。言葉を発することができないことに、今気づく。

「大きくなったわね。さあ、家に入りましょう」

やめる。その優しい笑顔も、口調も、やわらかい態度も、何もかも不愉快だ。

「蒼真、何してるんだ？ 早く入ろう。母さんが困ってるぞ？」

やめてくれ。

「蒼真、私は……いえ、私たちは、あなたを……」

やめろやめろやめろやめろ。

「愛してるわ」

「やめろって言うてんだろっがっ！」

ここに来て、ようやく声が出た。

「そんな優しい言葉を俺にかけんなっ！……俺にはいらないつ！
そんなものはいらないつ！」

「蒼真、何かあったの？」

心配そうな顔で、俺に近寄ってくる母親。

「近づくなっ！ もうやめてくれ！ だいたいお前らは……。お前
らは俺を……。だっただろうが
！ あああああああ！？」

天上が見える。しみだらけで、決してきれいとは言えない天井。
いろんな意味での、「我が家」だった。

「はあ……はあ……嫌な夢だ」

7月に入ってこのクソ暑い中、今思い出しただけでも鳥肌が立つ
程の悪夢だった。胸くそ悪いし、気持ち悪い。

夢でよかった、覚めてよかった、と思う。夢じゃなかったら、覚
めなかったら、とも思う。

ここは現在俺が一人暮らしをしているボロアパート、『しょうかそう省過荘』
である。桐島、悠花ちゃんの自宅からほど近いところに建っていて、
トイレとシャワーがかるうじてついているだけの六畳のワンルーム。
それ以前に、ここでどうやって過去を省みるのかかえり気になる。

現在時刻は8時半。普通なら学校に遅刻する時間ではあるが、う

む。ご察しの通り夏休みである。

七月末から九月までの間、学生の上に許された一大バケーション。

「と言つても、やることないんだよな」

そうなのである。やることがないのである。

この一ヶ月とちよつとの間、一人暮らし&友達少ない俺にとつては、やることがなさすぎる。特にこれと言って趣味があるわけでもなし。その苦痛や否や、学校に行くよりもつらい。

いや、いやいやいや。

暇なだけならまだいいのだ。暇なだけなら家でゴロゴロするなりできるのだが……。問題はそこではない。

……俺はすうつと息を吸い込む。

「なんでここの部屋、クーラーついてねえんだよおおおおお
！」

今が夏、ということをし、忘れてはいけけないのだ。

ということしで、クーラーがんだぜ？　な展開を求めて外に出てきたはいいが……。

「いやはや、君に逢うとは奇遇だなあ。阿僧祇君」

夏まつしぐら、というより、夏まつさかさまである。
早々に面倒くさい人に捕まってしまった。

「面倒くさいはないだろう？」

「あんたもモノログ読む類の人か！　ちくしょう！」

水鏡生徒会長も、どうやら地の文が読めるという特殊能力の持ち主らしい。

夏休み中だというのに、会長は制服だった。いつも通りのきりつとした涼しげな顔に、それを象徴するかのようにこれまたきつちりと縛ったポニーテール。

なぜそんなにちゃつきり制服を着て、この炎天下だというのに、汗ひとつかいていないのか不思議だ。

「そうだ、そういえば阿僧祇君。君は今から暇かね？」

唐突にそんなことを聞いてくる会長。

「ええ……まあ」

「それならば、ウチに来ないか？　この近くなんだ」

「はい？」

「私の父が会いたがっているんだよ」

「はい？」

チチガアイタガツテル？ 何語ですかそれは？

「君のことを話したら、父が偉く興味を持ってしまっただけ」

「え？ はい？ それはなんですか？ 会長のお父さんが俺に会いたがっているってことですか？」

「さっきからそう言っているが……」

「いや、いやいやいや」

正直に言おう。ないわー。

「つていうか、俺に興味持つって、あんたは父親にどのように俺のことを話してるんだ！？」

「いや、大したことはないのだ。勇敢で優しく、それでいてしなやかで逞しく、何より強く頼れる真の武士もののふだと」

会長は、なんでこんなことになったの？ みたいなとぼけた顔でそんなことお語りになさった。

「俺はどこかの正義のヒーローですか？」

過大評価ってレベルじゃねーぞ。

今までの経験からわかるとおり、俺はそんな不殺のヒーローでも、正義の味方でも何でもない。逆に、そんなものはクソ食らえとも思っているくらいなのだ。

「まあまあ、おそらく悪いようにはしないと思うよ？ 父は厳しい

が、同時に優しい人だ。それに私としてもなるべく阿僧祇君には良くしておきたいというのが本音だ。なに、心配ない。クーラーの効いた部屋で冷たいコーヒーでも飲んでいきたまえ」

そうして俺は、会長の自宅へ半ば強引に連れて行かれたのだった。

……。

…… 目を疑った。

何に目を疑ったのかといえば、会長宅にだ。

高い塀に囲まれたいかにも高級そうな和の香り。その塀は家の敷地をぐるりと回るように設置されていて、かなり広い。めちゃくちゃ広い。軽くサッカーコート数十個分分は有るうかという広さだ。

ただ、その問題も些細なこと。

俺が目を疑ったのはそこではない。

入り口と思しき巨大な門の前に立つ俺と会長。そして、その目を疑うべきものは、俺達の目の前にある。

表札、という表現が正しいのかと思わせる縦一メートルはありそんな高級そうな板に、これまた超デカイ筆文字で、こう書いてあった。

「水鏡組……」

目を閉じて、目頭とこめかみを揉んでみる。きつと暑さで参ってるんだ、そうに違いない。

そして、もう一度まじまじと会長宅の表札を見た。

水鏡組。

先ほどとなんら変わらない文字である。

「ああ、なるほど」

水鏡組というのは、誰かの名前なのかな？ ほら、漢字間違えちやったパターン？ 本当は水鏡久美なんだよ、そうだよ。会長のお母さんかなあ、なんて。

「では、入ろうか」

「え、ちょ、マジですか？ 俺今ちょっくら現実逃避に行ってきたところなんですけど」

「じゃあ、現実に戻ろうか。現実を見たまえ」

会長は俺より低身長にも関わらず、俺の襟をがっしり掴んだ。
前山、あいつ会長の両親は自営業とか言ってたけど、これは自由業の間違いではないか。よく噂に聞く「893」とか、そういうのではないのですか？

え、ちょっと待てよ。親の教育が良くて、会長は人一倍強い正義感を持っていたんだっただよな？ それってことは、つまり、この家で会長は育ち、そして今のように正義の味方になったのだ。

正義っていうか、義理とか人情ではないか？

そうしている間にもずるずると俺の体は引きずられ、連れて行かれたのが、組長室である。

組長室である。

大事なことなので二回言ってみたのだが、本当に勘弁してほしい。

そこにも達筆な筆文字で「組長室」と書かれていた。本当に。

これが「組長室」ではなく、「組長室？」だったら、どれだけ良かったことか……。

「あまり変わらないと思うぞ？」

さりげなく俺のモノローグに突っ込みを入れつつ、会長は組長室の重そうな木製扉を開けた。

そこにはやはりと言ったか、俺は悪人だよーと言わんばかりの強面の人たちが数人いて、よく漫画とかで見る感じの事務所。

応接セットが置かれており、その一番奥の窓際には高級そうなデスクが置かれている。

「お嬢！ お帰りなさいませ！」

「ああ、ただ今」

なれた感じであいさつをする会長。

「お、お嬢が男を連れていらっしやった！」

「いや、後輩だよ」

会長は落ち着いたものだ。こういうことは、何度もあったんだろう。

そしてまあ、俺の見立てでは、強面ぞろいの中の、その中心に添えられているデスクに腰かけている、”いかにも”なおっさんが、会長の親父さん、ということだろう。

「おう、蒔拿、帰ったのか？」

「はい父さん。それで、今日は約束通り阿僧祇君を連れてきましたよ」

約束とか聞いてない。

「ほう、お前が……。おいてめえら、席外せ」

初老の強面フェイス、会長の親父さんがさういうと、周りにいた連中は威勢のいい返事をして、部屋をあとにする。

やっぱり、あれだよ……。この人が自由業を取り締まっていたっしやる。

「阿僧祇蒼真です。会長の後輩、ということになるんでしょうか」

俺はとりあえず挨拶をしておく。自己紹介と言っやつだ。

「おう、最近のガキにしては良くできてやがる。俺は水鏡みかがみ観戒みかい。蒔拿の父親だ」

そう言つと、会長の親父さんはずっと腕を差し出してくる。俺はそれを握るしかない。

強面のひげ面にサングラス、いかにもこの世界で生きてきましたみたいな顔をしてはいるが、不思議と知的さも漂わせるナイスミド

ルな人だった。

「蒔拿、コイツがお前の言ってた後輩だろう？」

「うん」

以外にも親子関係はフランクなようだ。

「ほう……」

感慨深げに俺の顔をじっくり観察してくる組長。実際、サンゲラスをかけているのでその視線は窺うしれないが。

「ふっ、はっはっはっはっはっは！」

突然の馬鹿笑い。こういうところは会長とそっくりなので、この人たちは本当に血がつながってるんだということを実感させられる。

「若えくせに良い目をしてやがるぜ、蒼真」

なぜ急に名前を。

「いつもはけな貶されてますけどね」

誰もかれも俺の目を「死んでいる」という。俺としては生まれたときからこうだったような気がするが。

「いや、ドブ川が腐ったような良い目をしている」

「マジですか……」

「やっぱ腐ってんじゃないかねえかよ！　という心の声を、隅に置いて、俺はそれだけいう。」

「お前の眼は、汚れた人間をたくさん見てきた目だな。人間ってなあ汚れた人間を見れば見るほど、目は腐っていくが、心は磨かれていくもんだよ」

「……」

「今、蒔拿のいつこ下だから高1だったけか？　大したもんだぜ、何をしてきたらそんな目になるんだか」

「饒舌に話す組長さん。褒められているのだから貶されているのだからよくわからん。」

「この部屋に入ってきた時も冷や汗ひとつかかず、目線も泳いでない、とんだガキだ」

「そう言くと、組長は、ふむ、と顎に手を当てて何かを考えている様子だった。そして、しばらくすると。」

「気に入ったぜ！　お前、卒業したらウチで働かねえか？」

「といった。」

「ええ……」

「まさかのお誘いである。」

「どうやら俺はこの組長さんに妙に気に入られてしまったようだ。」

正直、ヤクザとかやりたくないです……。

「はっはっは！ そりゃそうだ！ まあ、堅気のガキをこっちの世界に連れ込もうなんて正気の沙汰じゃねえよなあ！ はっはっは、じゃあ、どこにも行くところがなくなったらでいい。困ったことがあったら何でも言いに来い。家で面倒見てやる。何せお前は、娘の後輩だからな」

阿僧祇蒼真、16歳。高校一年生にして内定をもらってしまっ
した。

何故だろう、まったくうれしくない。

「あそこまで人を氣に入るのも滅多にないんだ、父さんは」

組長室を出た俺は、とりあえずということで会長の部屋に向かっ
ていた。その道中、不意に会長はそんな言葉を口にした。

「まさかウチの組に誘うとは、私も予想外だよ」

いつもの飄々とした口調で、愉快そうに笑う会長。

それにしても、あの組長は組長で食えない男だ。さすがは会長の
父親と言ったところか。

部屋を出るとき、俺にだけ聞こえるように、組長はこう言ったの
だった。

『ありがとうよ、娘を救ってくれて』

あの人はあの人で、何かしら、詳しくまではいかなくても、知っていたんじゃないんだろうか。気付いていたんじゃないんだろうか。

娘の様子がおかしいことに。

怪異なんて荒唐無稽なものの仕業と知らずとも、親の勘と言うか、そういう子供を見守る視線によって。気付いていたのかもしれない。

そうして、組長も何とかしてあげたかったんじゃないんだろうか……。

救ってあげたかったんじゃないんだろうか、会長を。

そう考えれば、さつき、困ったらうちに来い、て言っただのも頷ける。なにせあっちから見たら、俺は娘の恩人だからな。映画のヤクザと同じ、義理と人情を重んじるんだろう。

「親つてのは、そういうもんなのかもな……」

「ん？ どうしたんだい？」

「いえ、なんでも」

知らないうちに、独り言をつぶやいてしまったらしい。

「さあ、到着だ。ここが私の部屋だよ。ゆっくりしていくと良い」

ほどなくして会長の部屋に到着した。和式な家と同じで、その扉はふすまで閉ざされていた。

そして、会長はさつとそれを開ける。

「……………」

絶句する俺。

「ん？ どうしたんだい？」

先ほどと同じセリフを口にしながら、会長は不思議そうな顔で覗き込んでくる。

「なんか、その……ピンク、ですね……」

「ん？ ああ、ピンクだよ」

会長の部屋は、ピンク色で埋め尽くされていた。

何ってまず、床は畳なのに壁紙がピンクだし、勉強机と思われるちゃぶ台の上にも、ピンクの小物が散乱してるし、そこいらじゅうにウサギやらクマやら、イヌやらのぬいぐるみが置かれている。

……なんだこれ？

「え？ なに？ ここってホントに会長の部屋ですか？ ドッキリとかじゃなくて？」

どこかに桐島とか、会長の友達が隠れているんじゃないのだろうか？ そうして俺のびっくりした顔を見て楽しんでいるんじゃないだろうか。

とりあえず俺達は部屋の中に入り、会長が素早く小物を退けて、ちゃぶ台に座る。部屋に備え付けられている小さな冷蔵庫から、キ

ンキンに冷えた麦茶が出てきた。

まあ、そうはいつでもその冷蔵庫もファンシーでフェミニンなマグネットやシールでデコられてるし、部屋全体がなんとなく落ち着かない雰囲気醸し出している。

ついつい、辺りをキョロキョロと見回してしまう。

「ここが私の部屋だが……何かおかしいだろうか？」

会長は、「何が納得いかないの？」みたいな顔をしている。

何が納得いかないって、そりゃこのピンクい空間全部に決まっているでしょう。

「えっと……これは……」

「ん？ ピンクのクマのファーマシーだぞ？ ちなみにそっちはカバの……」

「いや……そういうことじゃなくて」

部屋を指差していたのだが、ぬいぐるみのキャラクターの名前を聞かれたと思ったようだ。

……ていうか。ていうか！！

「やくざのお嬢でかわいいモノ好きって、今日だけで色々キャラ付きすぎでしょうー！」

「しょうがないだろう……これが私だ。現実を見る、現実を」

「ぜえ……ぜえ……ちゃんと見てますよ」

「それじゃあ、これから本題だ」

そう言つと会長は、今までのどこか優しげな顔から一転、急に頬を引き締める。

「……？ 本題？」

「そうだ。君に相談したいことがあるのだ。夏休みの早いうちに会えてよかったと思つてる」

「どういふことですか？ まあ、それが俺をここに呼んだ理由みたいですけど」

「ふむ、その通りだ。悪いな、あんな道で話すようなことでもなかったのだな」

まあ、暇だからいいのだけれど。

「今日君に相談したいことは他でもない。」 影踏みさん「についてだ」

「 影踏みさん」？」

” 影踏みさん” と言えば、最近この界限ではやり始めている、都市伝説のようなものだ。

影踏みさんに影を踏まれると、魂を抜かれてしまう。そんなありがちでどこかで聞いたような設定で、小学生の恐怖の対象になっているとか何とか。

……それでもあれは。

「会長自身が、”影踏みさん”じゃなかったんですか？」

会長と初めて会ったとき、彼女は”影踏みさん”と名乗ったのだ。てつきり、あの噂は会長が広めたものだとばかり思っていたが。

「そんな噂を広めて、私に何のメリットがあるというんだい？」

「たしかに」

”影踏みさん”なんて呼ばれて、小学生に怖がれても、彼女には何のメリットもない。

いや、むしろ正義の味方を自称する彼女にとって、デメリットにもなりうる都市伝説だ。

「あの時は咄嗟に、ああ言ってしまったただけだ」

「じゃあ、会長とは別に、本当の”影踏みさん”が存在するってことでですか？」

「いや、それも違うな。おそらくは、誰かが”影踏みさん”というでっち上げの噂を流している」

「噂を流している？」

「そう、何の意図かはわからないが、その噂を流しているらしい。おそらくは、私の素性を知ったうえで、そんな根も葉もない噂話を」

そして、と会長は言葉を続け、

「そいつ自身も、噂になり始めているようだ」

「……つまりは、そいつ自身も、自分の噂に触れ回っているというんですか？」

「いや、違う」

真っ先に否定する会長。

「どうやらそいつが噂を広める以外の活動を開始し、それが噂になっっているようだ」

噂を広める以外の活動。

だいたい、その「噂を広める」っていう行動の意図も分からない。そんな奴の次の行動って聞くと、嫌な予感しかないんだが……。

「それで、その活動の噂ってのはなんなんですか？」

しかしながら、それを聞かないわけにはいくまい。会長は、そのために俺をここに呼んだのだから。

一拍おいて、会長が口にした。

「そいつは、この界限で、『夢』を売っているらしい」

ドリームオブライ 1 (後書き)

キャラ紹介しての方がいいんですかね？

感想待ってます。

ドリームオブライ 2 (前書き)

例によって雑談パート

ドリームオブライ 2

俺は宝くじを買っているわけじゃない、夢を買っているんだ！

確かどこかで、そんなセリフを聞いたことがある。

「夢を売る、か……」

あの後、会長宅を出てから、俺は炎天下の紫外線を体全身で受け止めながら、ただ所在無げに歩いていた。

「『夢』を、売る？」

俺は若干訝しみながら、そう聞き返す。

『夢』を売るというのは、どういことなのだろうか。将来の夢を売るということか？

「いや、違うな。そいつは、夜に見る『夢』を売るらしい」

「で、具体的には？」

「ふむ、その男は、小学生や中学生などの低年齢を中心に活動しているらしい。なんでも、そいつに夢を売ってもらうと、それからしばらくは大層良い夢が見られる、という話だ。何が目的かはわからないが、金は取らずにな」

金を取らないんじゃないって言わないんじゃないだろうか。

232

「その子は誰だ？」

悠花ちゃんよりも背丈が大きいにもかかわらず、彼女の背中に隠れるようにいそいそとこちらの様子を窺っている少女が一人。

もつとも、悠花ちゃんより大きいと言ってもこの年齢の少女の身長差なんてたかが知れているわけで、実際には数センチも違いはない。

「ああ、この子ですか？ 私の友達の稲葉戌亥ちゃんです。普段は元気で活発なんですけど、どうにも男の子がダメらしくて」

「……」

サラサラのショートヘアを揺らしながら、申し訳なさそうに稲葉さんはペコリと頭を垂れた。

「なるほどな」

通りで先ほどから会話に入っていないわけだ。

「あの……」

と、そこで稲葉さん。

「えっと……その。阿僧祇、さん？ でしたっけ……。と悠花ちゃん、はどんな、かんけ……いなんですか？」

つかえつつかえながらも、意図することは伝わった。ただ、それにどう答えるかが問題で……。

「あー、なんていうんですかね？ 阿僧祇さん？ ね？」

悠花ちゃんめっちゃテンパってるし。

「あー、その、なんだ。妹分？ みたいなもんだよ。な、悠花ちゃん」

「そ、そうですね！ 妹分的なアレデスヨ！」

「……？」

頭の上に？マークをいくつも飛ばして首をかしげる稲葉さんは、
なんというか、庇護欲を掻き立てられる感じがする。

「あれ？ そういえば、阿僧祇さんって実の妹が居たのではないですか？」

「ああ、いるよ」

うまいこと話題をそらしてくれた。

「ほう、妹さんはどんな感じなんですか？ やっぱり阿僧祇さんと一緒にパンティー大好きとか、そういうのですか？」

「俺いつからそんな設定になった！？ ……まあ、いいや、名前は阿僧祇紅音あそつぎ あかねって言うんだ」

「蒼真と紅音ですか、対になってるんですね。三人目が生まれたらどうするつもりだったんでしょうかね？」

「ああ、どうだろうな。やっぱ三原色ってことで黄色なんじゃね？」

「黄助きすけですか」

「なんでそんな某NHKアニメに出てくる子鬼みたいな名前なんだよ……」

「お、阿僧祇さんもおじゃ●丸世代でしたか」

「言つとくけど、俺は悠花ちゃんとか一個しか年変わらないからな。あとなんだよ、おじゃ●丸世代って」

ポケ●ン世代とかならわかるけども。

「んで、俺の妹の話にもどるが、これがな……」

「はい」

俺はありったけの感情をこめてしゃべる。

「めっちゃかわいいんだぜ！」

「……」

こんなことで我が妹の可愛さ、愛くるしさが伝わるとは思っ
てないが。

「もう最高だぜ！ 我が妹ながら最高に可愛いんだぜ！ 俺の事『蒼真君』って呼ぶとか、ちよっと生意気なところはあるんだけど、

そこがまた可愛いんだ！ もう俺は妹を愛していると言って良いね。俺は紅音の為なら何でもやるし、紅音の為なら、それこそパンティ―泥棒の汚名を被るくらいの事はお茶の子さいさいだな！ それにあいつ、なんだかんだでちっちゃいんだよ。悠花ちゃんより少し低いくらいで、俺の腹上くらいまでしか身長ないんだけどな、それでも抱き心地はさいこうなんだわ！ なんとというか、こう、やわっこいつていうのかな？ 体ほっそいくせに色々やわらかいんだよ！ こう！ こんな感じで俺の腕の中にすっぽり収まるとこと……」

「だっ」

自らの口で効果音を発しつつ、悠花ちゃんは瞬時に稲葉ちゃんの手を取って全力疾走で逃げた。

横から頼だけ見え隠れする悠花ちゃんの顔は、完全に青ざめている。まるでそれでは、偶然変態に遭遇した女子中学生みたいじゃないか。

「ちよっ、どこへ行く、悠花ちゃん！」

俺はそれにコンマ数秒で反応すると、スタートダッシュを切って追尾を開始する。

例によって身体能力の差は圧倒的であり、すぐに捕まった。

「ぎゃー！ お巡りさん！ 警察！ 助けてポリスマー！ 変態が！ ここにシスコン変態野郎がいますよーっ！」

「何！？ どこのだいつだ！？」

「今私を後ろから羽交い絞めにしてるその高校生ですよ！」

どうやら、その超絶変態野郎と言つのは俺の事らしい。

「おいおいおい、俺のどこがシスコンで変態だ？　むしろ紳士と言つてほしいね。シスコン紳士だぞ、俺は」

「シスコンは認めてんじゃないですか。っていうか、妹の体やわっこいとか言ってる時点で変態ですよ。神聖で真正の変態ですよ」

シスコン紳士ってなんだ、とかブツブツ文句を垂れつつ、悠花ちゃんは乱れた髪をてぐしで整えた。
ちなみに稲葉譲はというと。

「あれ？　稲葉さんはどこ行つた？」

「……？　どこ行つたんですかね？　まさか、阿僧祇さんの変態具合に恐れ戦いて逃げちゃったのでは？」

「俺の場合はシスターのみだから、あんまり害はないのにな」

「今どさくさに紛れてさらっと問題発言しましたよね？　もうシスコンってレベルじゃないじゃないですか」

「いやいや、それほどでも」

「なぜ照れる？　まあいいですよ。戌亥ちゃんはいぬいであれでしつかりしてるので、大丈夫として、今は阿僧祇さんの今後についてが問題ですよ」

顎に手を当てつつ、洪面を隠すそぶりも見せない悠花ちゃん。

「因みに、妹さんって今阿僧祇さんの実家にいるんですってっけ？」

「ああ、たぶん……」

その質問は……正直しんどい。

「……そうなんですか。阿僧祇さん、好きな女性のタイ……」

「妹一択」

「即答!？」

「なんだよ何がそんなに不満なんだよ。じゃあ、紅音^{あかね}一択で」

「意味合い変わってませんよ……。ああどうしよう……。桐島さんに話すべきなんだろうが……」

悠花ちゃんはその場で頭を押さえて蹲ってしまった。なぜそこで桐島に話すのかわからない。今の会話のどこで桐島に係する事柄が出てきた？

まあもつとも、そんなことを話された日には、桐島から真っ白な目線を向けられること請け合いだが。

「桐島さん……ごめんなさい。私には阿僧祇さんの病気を治すことはできませんでした……」

「そんなに落ち込むなよ。後輩」

「誰のせいだ! 誰の! このシスコン○○○○の○○! 阿僧祇さんなんか○○○○で○○○○になっちゃえばいいんだ!」

「女子中学生が吐くセリフとは思えないな……」

もう下品とかそういうレベルではないぞ。下劣と表現してもいいくらいの下ネタだった。世に言う、見せられないよ！というやつ。

「はあああ、阿僧祇さんにこんな隠れた一面があったなんて……。それなりに尊敬してたのに」

「いやいや、これからも尊敬し続けてくれていいよ」

「だからそれが出来ねえって言うてんだよ！」

「すいません」

悠花ちゃんの口調も乱れつつある。暑さのせいだと思いたい。

「でもまあ、隠れた一面なんて、誰もが持つてるものだよ。逆にもつてない奴なんて仙人くらいだろ」

桐島にも、この悠花ちゃんにも、水鏡会長にも、もちろん俺にも人間は絶対に本音と建前を使い分けて生きてるんだ。そうしないと、生きてはいけないから。

「……そういうもんなんですかね」

「そういうもんさ。例えば、俺の妹好きを学校のクラスで大声で言ったら、俺は確実に変態扱いだしな」

「自覚はあったんですね……」

「趣味趣向は人それぞれで、それが特異なものだと、どうしても周囲には言いづらい。だから、大半の人は嫌われるのを恐れて口を噤んじまう」

人間にはそれぞれの個性があり、現代日本の教育現場においても最近では個性だなんだとうるさいのだ。身体的な個性はともかく、精神的な個性と言うのは、他人には見えない物なのに。

「以上が、阿僧祇先生による道德の時間だ」

「そんなこと言って、シスコンごまかそうとしてもダメですよ？」

「やっぱり？」

深々と頷く悠花ちゃん。どうやら、本気で俺のシスコンを心配しているらしい。

「まあ、それでも心配ないさ、悠花ちゃん。兄ちゃんってのは、どいつもこいつもなんだかんだ言いながら、妹のことが大好きなんだよ。どんなに生意気でも、どんなに言うこと聞かなくても、妹っただけで、大事にする理由には十分なんだ」

「阿僧祇さんは別に異常ではないと？」

「そういうこった。もっとも、悪魔は悪魔。そこところは極めて異常だけだな。性格や内面に関してはってだけの話」

「なんか阿僧祇さんがまじめなことを言ってますね……」

「まるで俺が普段からまじめなことを言っていないみたいな口調はやめてくれ……」

そこで俺は、ふと思いつく。会長宅で話した、会長との会話を。

「悠花ちゃん、最近、変わったことはないか？」

「変わったこと？」

俺はあえて遠回しな言い方をする。

今回ばかりはやばいかもしれない。俺の動物としての本能なのか、はたまた悪魔の力による察知能力か何かなのかは分からないが、やばい匂いがするのだ。この案件には。

それに悠花ちゃんみたいなの、いたって普通の中学生を巻き込むわけにはいかない。

「ああ、そういえば……」

「……」

そして、悠花ちゃんは事情が分かっていないキョトン通した顔で俺を見ながら、

「最近、『夢を売ってくれるおじさん』っていうのが、私の学校で流行ってますね。主に女子の間ですが」

「……！」

俺はいつたいどんな顔をしていただろう。悠花ちゃんは俺の顔を見ながら訝しげな表情を浮かべていた。

さらに、悠花ちゃんは思い出したように、こつ付け加えたのだった。俺の雰囲気になんかを感じ取ったのだろう。若干青ざめながら。

「そういえば、さっきまで一緒にいた稲葉戌亥ちゃん……。この間、夢を売ってもらったって……」

震える声で、そう言った。

ドリームオブライ 2（後書き）

まずは言うことがあるだろう……

遅れてしまって申し訳ないです！ ホントすんません！

でもまあ、テストもようやく終わり、これで晴れてのびのびできるというもんですよ。

テストの直後は体育祭が重なり、高校生の自分はかなり忙しかったです。

重ねて、遅れてしまって大変申し訳ありませんでした。

感想、お待ちしております。

ドリームオブライ 3

「教えてくれ悠花ちゃん。その男にはどうやったら会える？」

俺はだしぬけにそんなセリフを吐いた。

その男とあつてどうするかはわからない。だが、そいつを放っておいたら大変なことになるような、そんな予感が俺の脳裏をよぎったのだ。

「まさか……」 “ここ” とはな……」

それは、結構な頻度で訪れている、あの大木がそびえ立っていた公園。桐島の一件で折れてしまったあの大樹は未だ撤去されず、その周りには三角コーンで囲いがしてあった。

こんなところで商売をするとは、相当酔狂な輩のようだ。

「……」

俺は無言で例の公園に脚を踏み入れる。そして、踏み入れてから気づく。

公園の真ん中、大樹がそびえ立っていたであろう大きな穴の縁あたりに、一人の壮年の男が佇んでいた。気配らしい気配を感じられない、何とも不思議な雰囲気をしている男であり、そこにいないのか、曖昧な感じがする。

「……これはこれは。大変なものを呼んでしまったようです。ともかくにも、僕を訪ねてこられたお客様のようですし、まずはいらっしやいませと言っておくべきでしょうか？」

慇懃だが、さつきも言った通り居るのか居ないのかわからない。簡単に言えば、霧^{もや}がかかったような男であった。中肉中背。特徴と言えば、夏だというのにちゃつきりとした黒のスーツを着ていることぐらいだろうか。そのくせ全然汗をかいていない。

「あんたか？ この辺りで夢を売っているっていうのは」

俺は開口一番そんな質問をぶつける。

「いかにも」

即答であった。

「……なんでこんなことをする？ 噂を広めて何になる？」

「ご質問ばかりですねえ。まずはお名前をお教え願えますか？」

「阿僧祇蒼真。観阿弥^{かんあみ}の阿に、坊さんの僧。祇園の祇に、蒼い真実」

「結構。なかなか珍しいお名前ですね。僕は、我妻^{がさい}と申します。下の名前は……別にいいですよね？」

「ああ」

「それですが」

やはり、居るのが居ないのかわからない。うつかりすれば、この男の存在を忘れてしまいそうな存在感。そこにいて、そこにいない。怪異のような男。

「僕がなぜこんなことをしているのかをお教えしましょう」

「……ああ」

「風が吹けば桶屋が儲かるということわざをご存知ですか？」

「……まあな」

質問の意図は全く分からないが、一応は返答する。

「それと同じですよ。僕っていうのはしがない霊媒師のようなことをやってまして。現代社会日本と言うのは、どうにもこの職業は儲からないのです。そこで僕は考えました。僕が商売繁盛するには、どうしたらいいのか？　つまりは、怪異に憑りつかれた人を増やせばいいんです」

のらりくらり。その言葉が一番適切なんではないかと思うような口調だ。

「阿僧祇君、君ならばご存じの事と思いますが、怪異は人間によって作られ、創造される。人間に想像され、恐れられ、怖がられ、崇め奉られ、信仰され、願われることによって存在しうる存在なんですよ。だから僕は、僕の仕事が増えるように噂や怪談話を振りまいている」

それだけの理由ですよ。と、我妻は肩を竦めながら言った。

「興味はありませんか？ 怪異^{かれら}はなぜ存在しうるのか。僕は霊媒師をしながら、そんな研究も行っているんですよ」

「怪異の研究者……」

「その通りです。なぜ彼らは存在しうるのか、なぜこうも『人間』という種と密接に関係を保っているのか。なぜ創造主である人間に対して牙をむくものもいるのか。なぜ人間が想像し、信仰し、忌み嫌う者たちがこの世に存在しているのか」

存在意義。小学校の道徳の時間とかでは扱われないような、哲学的なテーマだ。自分の存在も分からない俺に、そんなことがわかるわけがない。

「それはそうと、害は……お前が夢を売って、良い夢を見た奴に何か害はないのか？」

「あるに決まってるじゃないですか」

「なっ!？」

さらりとんでもないことを言いやがる。害がある？ つまりこいつはその夢と一緒にその害を振りまいているということか。

「良いものにはリスクが伴う。世界共通の常識でしょう?。」

ここは一旦気を静め。

「どんな影響が出る？」

俺の手にはすでに、巨大な鎌、「鎮魂歌」が握られていた。というのに、いきなり出現した巨大な鎌に対して、この男には何のリアクションもない。

「何、大したことはありません。ただ『これから先、どんどん良い夢を見続ける』と言うだけです」

「良い夢を見続ける……？」

「そう、どんどんどん良い夢を見て、そのよい夢はますます良い夢に変わっていく。それこそ、夢みたいに」

「その何が『害』なんだ？」

「お分かりになりませんか？ 見た夢が良ければ良いほど、起きたときの落胆は大きいでしょう？ それが一生続くんです。もっとも、寝れば必ず良い夢が見られるんですから、現実なんてやめてしまつて、ずっと寝て過ごすようになる可能性はありますが」

我妻は言ったのだった。寝れば必ず良い夢を見られる、それにより、現実の意味をなくす。夢の世界に心酔する。そしてその人間は容易に現実を捨ててしまう。

「もっとも、ここでの噂広めは終わりました。もう充分です。そのうち、僕の所に依頼が来るんでしょうね、「夢を売る男」を除霊してほしいというような依頼が。一年もすれば、僕の事なんて誰も覚えてませんし」

確かに、この存在感の希薄な男のことを1年も覚えてるなんて、意識してなければ不可能だろう。

「どうすればそれを止められる……！ 教える……！」

「そんなに怒らないでくださいよ。本人たちも了解の上なんですから。僕は夢を提供する前にちゃんと言いましたよ」これからずっと良い夢を見ることになりますよ』って」

このノロノロしたしゃべり方が、完全に俺の癪に障る。もうこれは触るとかじゃない、接触事故を起こしてる。

「おっと、僕としたことが、質問に適切に返答していませんでしたね。参考までに、止める方法はきちんとあります。この良い夢を作り出している怪異そのものを消滅させるという方法が一番簡単で確実ですね。あ、あとは怪異に罹^{かか}った者を一人残らず屠^{ほふ}るという方法もなくはないですが、そんなことは君の望むべくでないのは明白だ」

それじゃあ言うんじゃないやねえよ、という言葉が喉から出かったが、ギリギリのところで飲み込む。ここで食ってかかって、あとで何かされたんじゃないかたまったもんじゃない。

「その怪異は、今お前に憑いているのか？」

「いえ、最後のお客様に差し上げましたよ。なかなか野心的な目をしながら、夢を売るはずの僕に力をくれと言い出しましてね。僕もここでの活動をそろそろ控えようと思っていたので、ちょうどよかったです」

「それってまさか……」

「ええ、あなたはここに彼女の件で来たのでしょうか？ たしか、稲葉成亥さんって言いましてっけ？」

この野郎。よくもいけしやあしやあと平気でいられるな。これは思ってたよりもやばい事態になってきた。

あのおとなしい稲葉さんが力を欲する？ 野心的な目で？ わからない。理解できない。

「それじゃあ、僕はこの辺で。せいぜい頑張ってください。ゆつくりとコーヒーでも飲みながら、健闘を祈ってますよ。『不幸な悪魔さん』」

このまま行かせてしまっているのかとも思うが、今は稲葉さんの案件が先だろう。とにかくにも、稲葉さんを探して、その夢を操る怪異を引っぺがし、そいつを無力化しないことにやあ、この町に精神科の病院が建つことになる。

「ああ、そうそう、前山の奴によろしく言っておいてください。今回は会ってませんから」

「なっ！？ お前、前山を知ってるのか？」

「知っている……まあそうなんですかね？ まあ、旧友、いや、旧悪友と言っべきなんでしょうね」

まさかまさか、こんなところで前山の知っている、それも、昔のあいつを知っている人間に会うとは、かなり驚いた。

「それから、この辺に『水鏡組』ってヤクザグループがありますよ

ね？ その組長、水鏡觀戒みかがみ みかいっていうガラの悪い男も、僕たちの仲間内の一人でした」

「マジかよ……」

ここに来てあの組長まで絡んでくるとは……驚きと言うか、そういうのを通り越してるぞ、これは。っていうかそれ以前に、組長と前山が繋がっていたのにびっくりした。

旧友と言うことは、三人は少年、または青年時代を共に過ごしたということか？ スゲー気になるんだが……。

「それよりも、君はこんなところでのんびりと僕の相手をしていていいんですか？」

確かにそうだった。だがしかし、この男を放っておく、という訳にもいかないだろう。どうすべきなのか。俺はこれからどう動くべきなのか。

「君には君のポリシーがあるのでしょう？ ならばあの中学生を守りなさい。それが君が君であるということだ」

「てめえが元凶だったのに、ずいぶん綺麗ごと言ってくれるじゃねえかよ」

「確かに僕が元凶、それは間違いないでしょう。しかしながら、それはもう過ぎたことだ。今更僕にはどうしようもできないし、どうしようとする気もない」

「……」

およそ大人とは思えないような開き直りっぷりに絶句する俺。さすがは前山の友人と言うか、さすがは組長の友人と言うか、とにかくそんな感じである。

「じゃあまあ、とりあえず僕はこれで。後のことは君に任せますよ。退治するなりなんなりしてください。君には、中々に頼りになる友人がいるようですから」

実にジェントルな笑顔を作り、『俺、知ーらね』という意の言葉をさわやかに言つてのけた。

頼りになる友人というのは、前山の事だろうか？ あいつは友人っていう感じじゃないんだが。というより、なんで前山と言い組長と言い我妻と言い、こうも世の大人は変人揃いなんだ。

まあ、前山は胡散臭いけども、この男からは胡散臭さは感じない。存在感が希薄なだけかもしれないが。

「それでは」

顔を上げたときには、すでに我妻の姿は消えていた。自然とそれが、不思議じゃないように思う。あのところが公園から歩いて出ていく姿など、想像できない自分がいた。

「とりあえずは……」

稲葉さんを探さないと、な。

滅茶苦茶邪魔な大鎌をしまいこみ、公園のベンチに腰をおろす。俺はとりあえずケータイ電話で悠花ちゃんに電話をかけた。理由

は当然、現在夢を操る怪異に憑かれている、または所持しているであろう稲葉さんを捜すためだ。

あの時は稲葉さんよりも夢を売る男を優先させたが、たった今事情が変わった。稲葉さんがどうして我妻が言ったようなことをしたのかはわからないが、今は考えている時間はない。最優先事項を我妻から稲葉さんへとシフトさせる。

ルルルというコール音の後、すぐに電話がつながる。

『あ、阿僧祇さんですか！？　どうでした？』

「緊急事態だ、悠花ちゃん。稲葉さんがどこにいるか知らないか？」

『え……戌亥ちゃんですか？　でもどうして？』

「事情は後で説明する。とにかく今は稲葉さんを確保する方が先だ」

力の為に怪異なんか頼ってはダメなんだ。会長がその悪い見本と言えるだろう。

『えっと……たぶん家、かな……？　それから戌亥ちゃんとよく遊びに行くところとかもあるかも……』

「わかった。とりあえず家に向かってみる。場所を――――」
ぐっ！？」

突如として、世界が暗転する。途方もない吐き気と眩暈。加えての頭痛と耳鳴りが押し寄せて、まともに座つてもいられない。視界はグニャリグニャリと歪み、世界が遠のく。

『阿僧祇さん！？　どうしたんですか！？　あそつ…さん！　あ…
う……ん…！』

ずっとずっと遠くから、悠花ちゃんの叫ぶ声が聞こえる。最初の方はなんとか聞き取れたが、今はもう何を言っているのかわからない。

「あ……ぐ……が……ああ？」

これまた急に世界がいつも通りを刻み始める。いや、いつも通りなんかじゃない。

「ここは……どこだ？」

全く知らない場所だった。言葉では説明しにくいような、異様な景色が眼前に広がっている。そう、簡単に言ってしまうえば、どこぞのおとぎの国のような所だった。

無限に広がる空はすべてピンクで、下の地面も桃色。所々にお菓子でできた家が数件立ち並んでおり、木の代わりのようにその周りにはスティック菓子が突き刺さっている。

明らかに日本でないのは確かだが、おそらくは世界のどこを探してもこんなところはないんだろう。

「いやいやいや、ありえないだろ？　俺別にウサギ追っかけてたわけじゃないんだけど……」

むしろ女の子を追っかけてたと言っべきなんだろうが。

俺は先ほどまで例の公園のベンチで悠花ちゃんに電話をかけていたはずだ。其れだというのに、急な眩暈に襲われたと思ったら、急にこんなところに飛ばされてしまった。

「阿僧祇先輩」

うんうんと一人で唸っていると、後ろから呼ぶ声がする。
振り返ろうとするはずだったが、その直前、腰に違和感が走る。

ズンッ

鈍い音と共に、何かが俺の背中にぶつかってきた。声や背丈からすると少女のようだが、そんなことは今はどうだっていい。問題はそこではない。

「なっ……！」

問題は、少女が俺の腰にナイフを突き刺したということだった。しかもただのナイフじゃない。刃渡り30センチはあるかという、むしろ小刀と呼ぶべきんじゃないかと言うほどのごっついアーミーナイフを容赦なく俺に突き立てたのだ。幸いなのかどうかは不明だが、ドデカいナイフの刃がすべてがささることはなく、刃渡りの三分の一、10センチくらいが俺の体に埋まっている。

そして、少女は俺の体から離れると同時にそのナイフも抜き去っていった。

当然ながら俺の背中血で真っ赤に染まり、激しい痛みが体を襲う。むしろ立っていられるのが不思議なほどだ。

「ここじゃあ、悪魔の力も使えませんから、ご自慢の”化け物”みたいな回復力ありませんよ？ 阿僧祇先輩」

少女は俺から距離を取りつつ、冷酷な言葉を投げかける。

そこに来て、俺はようやくその少女の姿を確認し、身も心も結構な衝撃に包まれる中、俺は震える唇を動かして、こう言ったのだ。

「ははは……。おいおい……。中学生の悪戯にしてはずいぶんと物騒が過ぎてるんじゃないか？ 稲葉さん……」

血まみれた巨大なナイフを片手に、稲葉成亥は静かに微笑んだ。

ドリームオブライ 3 (後書き)

感想、お待ちしております

ドリームオブライ 4

「冗談きついで……。お兄さん、女子中学生に後ろから刺されるなんて思わなかったんだがな……」

わざとおどけて言ってみてはいるが、正直かなり痛い。そりゃまあ、背中をナイフで刺されたんだから、誰だって痛いのは当たり前か。

「うふふつ、無理しなくたっていいのに。ここは私の夢の中。阿僧祇先輩の化け物みたいな回復能力も無力化されていますし、なににより痛いでしょう？」

「どっから俺の悪魔の力の話を聞いた……？」

「あの我妻っておじさんが教えてくれました。簡単なことじゃ殺せないって」

「……あの野郎」

本当に信用できない野郎だった。胡散臭くないといったのは取り消そう、あのおっさんは真っ赤な嘘つきだ。

「それから、阿僧祇さんってやっぱり強力な悪魔を従えているだけあって、かなり厄介なんですね。夢の中に引きずり込むのに、手間取っちゃいましたよ」

稲葉さんは嘲笑の笑みを浮かべている。

「……全てのことを置いておいて一つだけ言わせてくれ。俺は悪魔を従えてなんていない。コイツは俺の命の恩人だ……」

恩人って言い方もおかしい感じがするが、今は気にしている時ではないだろう。

しかして、どうやってここから出られるか、全く見当もつかない。

稲葉さんは私の夢だと言っていた。言動からして、つまり俺は稲葉さんの夢の中に引きずり込まれ、こうして殺されかけているということだろう。

つまりは夢の世界での稲葉さんを殺せばいいということなのか？
しかしそれじゃあ現実世界での稲葉さんはどうなる？

「さつきも言いましたが、ここは私の夢の中。すべては私の思うがままです。例えば、こんなことも」

稲葉さんが何か目くばせすると、俺の後ろにあるお菓子の家から大量の小人がわらわらと飛び出してきた。多種多様な色のメルヘンな服を着た小人たちは皆一様に不気味な笑みを浮かべ、今稲葉さんが持っているものと同じ刃渡り30センチのアーミーナイフを手に携えている。

「……なぜだ。稲葉さん、なぜこんなことをする？」

これはもう俺への個人的な恨みで決定だろう。ここまで殺意をもつて接してきた人間も初めてだ。なぜあつた最初、俺は稲葉さんの危険因子に気づかなかったのか。

「分からないんですか？ 阿僧祇先輩」

「……分からないな、分かるわけない。第一、俺と君は今日初めて会ったばかりだろう?」

「ええ、そうです。私たちは今日知り合ったばかり。ですけど、私にとつてはそうであつて、そうでないんです」

「……?」

彼女は何を言っているんだ? こんな会話をしている間にも、俺の体内から血液が刻一刻と流れ出ているし、凶暴な小人さんたちが俺を取り囲んでいる状況下に置いても、聞かすにはいらなかった。

「私は前から阿僧祇さんのことを知っていたんですよ」

「……どういうことだ」

「悠花ちゃんがね……話してくれるんですよ。阿僧祇さんがどうしたーだとか、阿僧祇さんが面白かったーだとか。良く聞かせてくれます。面白そうに、愉快そうに。でもね、阿僧祇さんとういう経緯で会ったのかつていうのは全然話してもらえなかった」

「……」

「私なりに色々聞いては見たんですけど、やっぱりお茶を濁されるばかりで全然話してくれなくて……。でも私分かったんです。怪異絡みだったんだって」

「それも、我妻から聞いたのか?」

「違います。私の家つて少し変わつてまして、怪異と言うか、占い

を本職にしている節があるんですよ。私の名前にも現れてて、ほら、戌亥^{いぬい}って方角を表すんですけど、縁起がいいらしいんですよね」

話を総合すれば、稲葉さんの家は怪異ないし、そういう人ならざるものを専門とする占い師らしい（戌亥という名前からすると、おそらくは風水系）。人に憑いた悪しきものや、悪さをするもの、そう言ったものを専門的にトラブルシューティングしている、ということだ。

なるほど、だとしたら、稲葉さんは先に俺が悪魔だということを知っていて、我妻に力の献上を乞いに行ったとき、一緒に倒し方も聞いたと。そうすれば、我妻が俺の名前を知らなかったのも頷ける。我妻からしてみれば、悪魔を倒す方法を聞かれ、答えただけなのだ。前山でもあるまいし、なんでも知っているわけない。

「それで、なんで俺を殺そうとする理由になる」

確かにそこまでの話の辻褄はあっているが、それでどうやって俺を殺そうという結論に至るのか。そして、どうしてここまで稲葉さんが激昂しているのかの道理が通らない。

「まだ、分からないんですか？」

「わからないな」

本当に、心の底からの言葉だった。俺も贅川ないしたまに嘘をつくことはあるが、ここまで自分の心から言葉を発したことはなかったかもしれない。

「あなたが……」

「……？」

「あなたがあんな化け物の事で、悠花ちゃんを引きずり込んだからでしょう！？　くだらない自分ごとの悪魔のことで、関係のない悠花ちゃんを巻き込んだ！」

「……っ！」

勘違いだ。俺が悠花ちゃんを巻き込んだわけじゃない。君は勘違いしている。君には与えられた情報が偏りすぎたんだ。それは君の妄想で、本当は悠花ちゃんが望んで怪異にかかわってしまった。それだけでいい。悠花ちゃんもそれは重々わかっていて、俺とは今のようない関係構築しているんだ。

そう言おうとしたが言えなかった。完全にこの娘は頭のタガが外れてしまっている状態だ。はつきり言って超危険。ここが稲葉さんの夢の中だとすると、それはなおさらだ。

いわば俺は今稲葉さんの精神世界にいるような状態なのだから、今彼女の精神を乱すわけにはいかない。

「稲葉さん、とりあえず落ち着くんだ。冷静になれ、自我を持つんだ……」

自分が殺されそうで、背中から刺されながらも一人の少女を説得しようとして見ている俺っていうのは、なんていうか、周りが言う様につくづくお人好しなのだろうか。

「うるさい！　化け物！　どうして悠花ちゃんを巻き込んだんですか！　どうして親友を巻きこんだりしたんですか！　どうして悠花ちゃんなんですか！」

「稲葉さん……」

「何もしゃべるな！ もう悠花ちゃんは一生涯と付き合っていくしかないんですよ！ それがどういうことかわかりますか！ あなたは、一人の女子中学生の、私の大切な友達の人生をめちゃくちゃにしたんです！」

ビリビリとこちらに振動が伝わってくるのではと錯覚させられるほどの気迫と声量で怒鳴り続ける稲葉さん。およそ女子中学生とは思えないような、それこそ悪魔のような形相をしている。

「あなたがどうして悠花ちゃんを巻き込んだのかはわかりません。けれど、悠花ちゃんは何かが変わってしまったんです！ 私の知らないところで、私の見ていないところで！ 悠花ちゃんは変わってしまった。其れだけははっきりとわかるんです！」

そうか、稲葉さんは分かっていたのか、感じ取っていたのか。悠花ちゃんが、名字と言う大切に最も憎むべきものを失ってしまったことに、深層心理の中で見抜いていた。

それは親友のなせる技なのかどうなのかよくわからない。しかし、稲葉さんは分かっているんだ、悠花ちゃんが何かしらの変化を果たしたことに。それを生憎彼女は、悠花ちゃんが変化を強いられたと思いつ込んでいる。

それが、そもその誤りだ。

「あなただけは許せない……！ 何があっても……！」

ドスドスドスドスドスッ

「……っ！」

大量の小人が俺の背中にナイフを突き立てる。一瞬にして背中からは数十のナイフが生え、動物のヤマアラシとか、ハリネズミのようだ。

だが、俺は何とか踏ん張る。が、普通の人間、つまりこのワールドでの俺ならば、確実に致命傷だろうことは容易に想像できる。踏ん張ることもできず、その場で血の海に沈む

「俺……を殺して何になる……稲葉さん」

倒れ伏しながらも、何とか言葉を発し、稲葉さんに問いかける。

「私はあなたが許せないんです。生きてることすらおこがましい……！」

「そうか……。俺も自分を……そう思ってるよ」

「……」

「稲葉さん、この死にぞこないの話を聞くのもバカらしいとは思いますが、すこし、聞いてくれないか？」

稲葉さんは眉をひそめる。俺の意図が分かっているのだ。よし、俺が虫の息になったことで、話を聞いてくれる慈悲が出てきたな。稲葉さんが大分冷静になっている証拠だ。なんとか、ここで事実を伝えないと。

「悠花ちゃんについてだ……」

俺は死にそうになりながらも、訥々（とつとつ）と語り始めた。

悠花ちゃんについて。俺が悠花ちゃんに出会った経緯、その時の状況。彼女の事情、彼女が遭遇した妖怪の特性。悠花ちゃんがその一件で失ったもの。俺がその一件で何もできなかったということ。それは悠花ちゃんが望んだことで、俺みたいな他人にはどうしようもないことで、どうにもできないことだったのだ。

「あ……あ……なんで……そんなはったりを……」

「信じないのは十分に結構。ここで俺を殺すのも構わない。だけど俺を殺し終えたら……悠花ちゃんとしつかり話し合え、親友なんだろう？　それから稲葉さん、君は一生俺を殺めた罪の意識と戦っていくことになる。俺がどんなクズ野郎でも、ゴミ以下だったとしても、人ってというのは殺すと手が汚れるんだ」

ブツン！ という音がしたかと思うと、突然稲葉さんの体が揺らめき始めた。それと同時に、ピンクで満たされたファンシーな世界が大地震が起こったかのように揺れだす。地響きとともにあちこちにひびが入り、あろうことが、空にまでその亀裂は及んでいた。

「ヤベー……。俺死ぬのかな……」

空が砕けている。地面も空も、雰囲気さえもピンク色だったこの世界が、灰色に染まりつつあった。こんな状況では稲葉さんをどうすることもできないし、その上もうほとんど意識が途切れそうだ。

ここで死ぬなら、そうだな。心残りがあるとすれば、もう一度だけ妹に、紅音に会いたかったかな……。あいつの笑顔が、もう一度だけ見たかった。

それでもまあ、ろくな死に方ができないことは分かっていたし、怖くはない、か。

「おいおい、勝手に死ぬんじゃないよ……。俺が体育の時間にペアを組む相手が居なくなるだろう？」

「は……？」

驚くこともできず、かといって背中をめった刺しにされて仰向けに倒れている状態では、発声に限界がある。そんな理由から、思わず間拔けな声を上げてしまった。

倒れている頭上から聞こえてきたその声を聞いた途端、急激に意識が覚醒へと向かう。

そこには、ここに居るはずのない人間が、いた。

「まったく……。これだから世界最悪のお人好しは困るんだ。お前がいるだけで話がこじれて、絡まって、色々なものが台無しにして粉々にしまうんだからな」

まあ、それもお前に宿っている悪魔の及ぶところなのか。と、そいつはいつもの軽口を言っているような口調で話す。

「な……え……あ？」

「おお、おお、驚いてる驚いてる。これだから嘘つきってのはやめられないのかもな。まあ、これも嘘なんだけど」

「お、お前、なんで……？」

「なんで？ こりやまた、こういうのもあれだけだな、お前は俺が親友が死にそうだってのに黙ってみてるような人間に見えたのか？俺は嘘つきだが、薄情ってわけじゃないんだぜ」

違う、そういうことじゃない。なぜお前がここにいて、なぜお前が俺の正体を知っている。今までだって、そんなそぶりはちっとも見せなかったじゃないか。

なんで、お前が……！

「贅川……」

最悪の嘘つきで、神出鬼没で、何かと意味深で、謎に包まれてても友人は見捨てない、情に厚い。

俺の親友が、そこにいた。

ドリームオブライ 4（後書き）

なんというか……遅れてしまって申し訳ないです……。
機上からの落下により、僕のPCがアボンしてしまい、こんな日付
になってしまいました。

感想、お待ちしております。

ドリームオブライズ

「おいおい、何呆けてやがるんだ、阿僧祇蒼真。んな大けがくらいで倒れ伏せってんじゃねえよ。ここは、夢の中だぜ？」

「贄川……お前……いつたい」

「親友って言うなら名前で言えよ、俺には贄川^{にえかわ}那奈志^{ななし}っていう御大層な名前があるんだからな。大嘘つきの俺にぴったりの”名無し^{ななし}”っていう名前が」

名無し、那奈志。匿名の嘘つき。誰だ、コイツにこんな無駄に洒落の利いた名前を付けたのは、名付け親出て来い。
名無しの那奈志。

「まあ、細かい話は後にして、今はここから出るのが先決だな」

そう言つと贄川、いや、那奈志はいつものマイペース具合でゆつくりと歩き、ユラユラと幻影のように揺らめいている稲葉さんに近寄った。

そして、目の前までやってくると、

「おら小娘、いつまで甘い夢と幻想に縋り付いてやがる」

那奈志は淡白な言い方でそう言つと、簡単な動作で稲葉さんの額を小突いた。

いや、違う。何か紙を張った。目が霞んでよく見えないが、長方形をしていて文字が書いてある紙を額に張り付けた。

「……っ！」

その瞬間、世界が歪み、視界が歪む。三半規管がマヒし、どちらが右でどちらが左なのかわからず、上下の感覚すらなくなる。

暗転につぐ明滅、さらにフラッシュ。正常な人間がこの光景を五分も見ていたら、正気を失うのではないかというような光の連続であった。

だが、それもほんの5秒ほどだった。

「はっ！ ……はぁ ……はぁ ……！」

急激に視界が回復し、目の前に青空と真夏の太陽が広がる。

どうやらここは俺が元いた件の公園のようだ。俺は例の公園の地べたに仰向けに横たわっていた。長い悪夢は終わり、夢から現実へと戻ってきたのだ。

背中に手を伸ばしてみる。何もない。稲葉さんに刺されたナイフの後も、不気味な小人にめった刺しにされた後もない。きれいな背中、もちろん痛みもない。

なんだか、すべてが悪い夢だったのではないかと思えてきた。夢の中で俺がどういうことを言ったのか、どういう行動をしたのか、薄ぼんやりとしか思い出せない。

悪夢も悪夢、偽りの悪夢。

「その通りだ」

不意に、俺が寝ている頭上から声かけられた。俺はこの声の主を知っている。

まだ眩暈や吐き気は伴うが、ふらつきながら何とか立ち上がり、近くにあったベンチに腰掛ける。

ゆめまくら
「夢枕」

贅川那奈志は、大木がそびえ立っていた穴の縁、ちょうど我妻と言つ影の薄いおっさんが立っていた辺りにいた。

そして、顔をこちらに向けず、ただ大木の抜け後である穴を覗き込んでいた。

「夢枕……」

「そ、夢枕つてのは、もともと良い夢を作り出す妖怪なんかじゃない。猥^{ばく}みたいに悪い夢を食べてくれる妖怪でもない。ただ、儀式によって人に憑りつき、夢の内容を移し替えるだけだ」

「移し替える？」

「良い夢でも悪い夢でも、それを還元して術者に移し替える」

「いまいち、話が見えてこないな」

「つまり、今回の一件、良い夢を買った連中は、『良い夢を買った』のではなく、『悪い夢を引き取ってもらった』という方が正しい。そりゃあ悪い夢や不思議な夢を奪ったたら、良い夢しか見ないさ」

ただ、ここからが問題だ、と那奈氏は続けた。

「悪い夢の行き場だ。術者がその悪い夢を引き受けなければならぬいのさ。これにより、その術者は悪い夢しか見れなくなる。毎晩毎晩夜な夜な、悪い夢にうなされ続ける生活を送るのさ。そうして、その人間には負の感情が溜まっていく」

「それが、稲葉さんがあんな行動に踏み切った理由か……」

「我妻巍がさい ぎうち一のように、妖怪の扱いを弁えているような奴ならまだしも、ずぶの素人、しかもまだ精神的に不安定な中学生がそんなことに耐えられるわけない」

我妻巍一というのは、我妻のフルネームだろう。

「結局……あの男は何なんだよ。前山の旧友とか言ってたが……。あいつもあいつで鱈目過ぎて、訳わかんねえよ」

「あいつの言ってたことは本当だよ。あの男は霊媒師であり、自分の仕事を増やすために噂を広めまわっている。”影踏みさん”についても、結構な騒ぎになったしな。ただ、あいつは根っから食えねえ男ってだけだ」

なるほど、とりあえずはそれで納得しておくでしょう。もう二度と会いたくはないし、どんな顔だったかもぼんやりしか憶えていないが。

しかしながら、俺はまだ重要なことを聞いていない。

このお話の根幹にかかわるような、竹取物語で言えば、かぐや姫の正体のような、大事で欠かせない部分を。

「お前は……何なんだ……」

俺の友人にして親友、贄川那奈志の正体である。

この嘘つきは、なぜ夢の中に現れ、しかも、いとも簡単に脱出したのか。それもこの事件の概要をすべて掴んでいるかのようなこの言動。さすがに謎だらけすぎる。

「これは、申し遅れたな。まあ、これから話す話は嘘じゃないからな」

「それが嘘って可能性もあるがな……」

「信じるも信じないもお前次第だ。そう言ってもんだろ？ 都市伝説や妖怪ってというのは」

悪役っぽいのか正義のヒーローっぽいのかわからないニヒルな笑いを浮かべ、那奈志はこちらに歩いてくる。

そして、俺が腰かけているベンチの隣に座ると、ただ前を見据えて話し始めた。

「俺っていうのは、我妻と同じ霊媒師だ」

「……ふうん」

「あれ？ 驚かねえの？」

「まあな」

「これが嘘だって言ったら？」

「驚くかも。じゃ何なんだって話だ」

「あつはつは、本当だから安心しろよ。俺は正真正銘本物の霊媒師だ。ここには京都から派遣されてきた」

「京都？」

京都っていうと、あのいろんな寺が立ち並ぶ着倒れの町か。古くからの都にして、現在は世界有数の観光都市。ひとたび道を歩けば新選組の格好をした連中も居れば、舞子さんも優雅に歩いている。そして。

そして何より、妖怪の総本山と呼ばれ、陰陽師で知られる都市だ。

「そうだ。俺は京都の陰陽師の家系に生まれ、生まれたときから霊媒師として育てられた変わり者なんだよ」

「そんな陰陽師がどうして霧丘町^{（霧丘）}に？」

「今はまだ言えねえが……ある事柄を監視するためにここに来たって感じだな……」

そう言うと、那奈志はまたあさつての方向を向く。落下しないように仕切りをされた、大木の抜け後である大きな穴に視線を向ける。それからまた前を見ると、

「お前にもいつかわかる時が来るんだろうな……まあ、いずれにしても来ないことを祈るが」

静かに抑えた声で、神妙な言葉を呟く那奈志。割合、珍しいテンションだ。

いつもはおちゃらけて出鱈目や嘘八百ばかり言っているコイツが、珍しく悲しげな、少しだけ落ち込んだような顔をしている。

「ただまあ、それにしてもだ。ここに来たときはびっくりしたんだぜ？ 高校入学の時に越してきたばかりだけどな、いきなり同じクラスに悪魔が居やがるもんだから、かなり面食らったんだぜ？」

「それは……なんというか、すまん」

「はっはっは、謝るなよ。別にお前を消そうってわけじゃないんだ。驚いたっただけだよ、あと、前山にもな」

「結局、あいつは何なんだよ？」

「分からない、ただ、人間であるってことは確かだな。本当に、謎だらけだからな」

祇園の陰陽師であるこいつにもわからないとなると、いよいよ持つて組長か我妻に聞くべき時なんだろうか。組長はともかく、我妻は絶対にご遠慮願いたい。

俺が前山の正体について、思索にふけていると、唐突に那奈氏が肩を小突く。

「ん？」

「ほら、来たみたいだぜ？」

見ると、公園の入り口には今にも泣きそうな少女が立っていた。綺麗に切りそろえられたショートヘアは若干乱れており、顔も下を向いているのでわかりにくい。が、やつれて、青白くなっている。稲葉戌亥の姿が、そこにはあった。

「んじゃ、俺はこれで。また新学期」

そういえば、珍しくというか、ほとんど奇跡のような天文学的か周期で、那奈氏は嘘をつかなかったな、なんて思っているうちに、

稲葉さんが立っている公園の入り口を避けて、那奈志は生垣を飛び越えて行ってしまった。

これで、この公園には俺と稲葉さんの二人つきり。殺そうとした人間と、殺されそうになった人間。

「阿僧祇先輩……」

泣きそうな顔で、近づいてくる稲葉さん。

「本当に……本当にごめんなさい……！ 私は……私は……なんて、ひどいことを……夢の中とはいえ、悠花ちゃんによくしてくれたのに……」

「稲葉さん」

「はい……」

「怖い夢、見たんだろ？」

「はい……！ はい……！ お母さんが死んだり、お父さんが死んだり……とても惨い^{むご}死に方で、悠花ちゃんが私の目の前で死んじゃったり……怖い……怖い夢……」

やはり、夢を買った人から吸い上げた悪い夢は、すべて稲葉さんのもとに行っていたのか。

怖い夢、恐ろしい夢。寝れば必ず恐ろしく、怖い夢を見る。それは、味わってみなければわからない、想像を絶する苦痛だろう。

「そうか、辛かったな？」

「……はいつ。でも……私は……阿僧祇先輩を……」

「死んでないからな、大丈夫だ。俺も稲葉さんも、稲葉さんのお母さんもお父さんも、悠花ちゃんも、死なないよ。全部、悪い夢だったんだ」

「悪い……夢……」

「全て偽りの夢だ。人為的に作られ、創作された悪い夢だ。俺が今から、それを断ち切る」

俺は立ち上がると、小さな声で『鎮魂歌』と呟く。それに合わせて、血をぶちまけたような朱色の大鎌が出現する。

血を啜り、滅却し、消滅し、悪魔を狩りつづけた巨鎌。

「あ……」

そして、稲葉さんの反応も待たず、それを思い切りふるった。

ヒュンという風を切る音も出さず、一瞬で稲葉さんの体を通り過ぎたそれは、切るという行為ではないのかもしれないが、確かに、意味はあった。切ったものは明確だ。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

稲葉さんの体から滲み出すように黒い霧が噴出し、たちまち彼女を彼女の姿を隠してしまう。

「これが、夢枕か……」

煙の中に佇んでいたのは、大きな象だった。文字通り、とてつ

なく大きな象。哺乳綱ゾウ目に属する動物の総称。

ただ、一つだけ大きく違っていたことは、そのゾウがすべて、布団のような布地で構成されていることだ。目はボタンで、全身が白い布でできた、いわゆるぬいぐるみのような姿をしており、その姿はとても愛らしい。

だが、愛らしい姿、と言っただけだ。全く可愛くない。確かに女の子が好きそうなぬいぐるみであるが、なんというか、そう、雰囲気 が完全におかしい、鼻から黒い霧を垂れ流すその姿は不気味以外では形容できない。

「あばよ……お前には何の恨みもねえが、とりあえず、帰るべき場所 所に還れっ」

俺は、出現した象に向け、容赦なく鎌の刃を振り下ろした。

『オオオオオオ……ッ!』

雲散霧消を体現したように、霧と化す夢枕。

すべてはこいつを我妻巍一が利用したことから始まったのだ。悪い夢だけでなく、良い夢も変換可能な、決して一概に悪いとは言えない。しかし、取り返しのつかない妖怪。

夢を吸い込み吐き出すポンプのような妖怪。

「……とりあえず、終わったか」

「阿僧祇さんっ!」

公園の入り口付近から、俺を呼ぶ声がする。
稲葉戌亥の親友、聖悠花がそこにいた。

「よう、悠花ちゃん」

「稲葉ちゃんは……、稲葉ちゃんは大丈夫だったんですか!？」

炎天下の中を全力疾走してきたのか、シャワーを浴びたように汗だくな悠花ちゃんが叫びながら近づいてくる。

見ているだけでこっちが汗ばんどきそうだ……。

「ほらな、稲葉さん」

「……？」

「悠花ちゃんが何も話さなかったのは、稲葉さんを巻き込みたくなかったからだよ。稲葉さんが悠花ちゃんを親友だと思ってるように、悠花ちゃんにとっても、稲葉さんはかけがえのない親友なんだ」

「どうして……怒らないんですか？」

「ん？」

「何で阿僧祇先輩を殺そうとまでした私に怒りもせず、恨みもせず、あまつさえ、私と悠花ちゃんの心配までしてるんですか……？ 私にはそれが理解できません」

「ん……」

難しい質問だ。嫌な質問だ。

俺はバツが悪くなって、頭をポリポリと掻きながらこたえる。

「別にさ、俺は自分がどうなっても良いと思ってるわけじゃない。

だけど、自分はどうなってもしょうがないとは思ってる。俺は世界一害悪で、世界一瘴気をまき散らしてて、絶対に幸にはなれない奴だからさ……」

怒るに怒れない、やむを得ない。自分は人類最低の『不幸』だ。

「何のお話をしているんですか？ 阿僧祇さん」

「何でもないさ。ほら、稲葉さんはこの通り無事だ」

「なんで泣いてるんですかっ！？ だだ、大丈夫？ 稲葉ちゃん。阿僧祇さんにセクハラでもされたの？」

「おい……」

悠花ちゃんよ、この状態でいつものようにネタを振られても、俺は疲労困憊で対応しきれんぞ。まあ、そんなことは悠花ちゃんの知るところではないが。

「いや、違うの悠花ちゃん……あの……ただ……本当……なんて言うていいかわからないけど……ごめんね」

「なに謝ってるの？ やっぱり阿僧祇さんに何かされたんじゃ……」

「だから違えてるだろ、んじゃ、俺もう帰って寝るわっ！ じやあな」

俺は二人の女子中学生を残して、その場を足早に離れる。俺は二人の問題を抱えた女子中学生を残して、公園を出た。

人の為、と書いて『偽り』となるように、人の夢、と書いて『夢い』と読むのだ。

人の為とかほざくやつは偽善者で、偽りで、人の夢と言うのはとても夢いものなのだ。漢字と言うのは、恐ろしくよくできているんじゃないかと思うときがたまにある。

「阿僧祇先輩っ！」

後ろから声がかかり、振り返ってみると、そこには恥ずかしさも臆面もなく、公衆の面前で大声を張り上げる稲葉さんの姿があつた。

「ありがとうございますっ！ 阿僧祇先輩のお友達にも、よろしくお願いします！」

「……わかったよ」

できものが取れたような、満面の笑みの稲葉さんは、大きく手を振った。

彼女はこれから、自分の取り込んだ悪い夢が消化されるまで、毎日うなされ続けることになるだろう。それが何年なのか、それとも何か月か、何週間が分からないけれども、稲葉さんの戦いはこれからだ。

夢は捨て、現実で生きる。夢を売り、現実を買う。

人の夢と言うのは、寝てみる夢も将来の夢も、どちらも文字通り夢いものだけけど、それでも、おそらくはそんな漠然としたものを、人間は信じ、貫いてきた。

おそらく、今回の一件は夢いものでよかったのだ。人が見る夢のように、夢く果敢なく、誰の記憶にも残らない、そんな事件になれ

ばいい。

人の為に、人の夢に引きずり込んだこの事件は、まさに、偽りの、
偽い事件だったのだろう。

ドリームオブライ 了（後書き）

次回、ついに阿僧祇君の妹が登場。

この時点で言っちゃいますが、かなり重要なお話で、主人公の根本にかかわる部分です。

つまりはそう、俺も妹萌えということさっ！

感想、お待ちしております。

まず初めに言っておこう。

俺は妹が大好きだ。

おい、その歪みきった心の持ち主。お前だよ、お前。
妹が好きだからって何でもかんでも「属性」とか、そういうのと一緒にするんじゃないよ。妹属性は確かに魅力的ではあるが、ここではそういう意味で言ったんじゃない。

ただただ単純に、妹が、妹として好きなのである。リアル妹だ。実際、妹を持っている人間ならわかると思うが、普段なんだかんだ悪口を言いつつ、言い合いとかもしつつも、どこか。心のどこかで憎み切れないのだ。

それが妹と言う存在なのである。

どんなに生意気だとしても、どんなに言うことを聞かなかったとしても、妹は妹であるだけで、妹たり得るのだ

今回は俺の妹、阿僧祇紅音あそうしき あかねに関する出来事。

蒼と紅あお くれなゐ。三人目の兄弟がいたのならば、どんな名前を付けたのか気になるころではあるが。

とりあえずは、語ってしまおうか。

もう一度だけ言っておこう。

俺は妹が大好きだ。紅音あかねの為なら、この命を易々と差し出せるくらい、愛している。

紅音の命に比べれば、俺の命なんて、本当にちっぽけなものに見えてしまうくらいなのである。

九月一日。

新学期と言うのに不安を覚えるのは、俺だけだろうか？

なんか、集合場所ここでよかったつけ、とか、集合時間よかったつけとか、いやそもそも集合日時は今日でいいんだよな？　もしかして昨日とかだったらめっちゃ恥ずかしい。みたいな。

新学期である。

「……」

「どうしたの？　阿僧祇君」

「お、おお……桐島」

朝、ほとんどの生徒が登校してきていない早い時間、俺はなんとなくそんな時間に登校してきていた。

そこに、これまた早く、桐島が登校してきたのだ。

「なんか、すごいクマ出来てるけど」

「いや、昨日寝ずに宿題をエンジョイしてたからな……ふぁ……」

夏の休みのなんやかんや、と言えばおわかりだろうが、前回の事件よろしく、俺は夏休みのかなりの期間、炎天下の中を東奔西走していたのだ。

おかげで、宿題が全く手につかないのなんの。畜生、なんで高校の宿題はこんなまじめなものが多いんだ。もっと絵日記を出せ、自由工作を出せ、自由研究を出せ。

「それは無理でしょ、さすがに」

「やつぱり？」

「それで、宿題は終わったの？ てっきり私はまた泣きついてくるものとはかり思っていたから」

「意外に失礼だな……。まあ、今日の提出分は終わらせたまさ、ただ新学期最初の授業で提出のものはまだ手も付けていない状態だな」

「それって結構やばいんじゃない？ 明日から普通に授業始まるよ」

「まあなあ……。どうにかするしかないっていうのが本音かな……。さすがに留年はまずいからな」

基本放任している俺の両親でも、さすがにそれは許してくれないだろう。

おい、学校やめて仕事しろよ、と言われかねない。

「どうでもいいけど、なんでそんな夏休み忙しかったの？ まあ、予想はついてますけど……」

「いや、ちょっと女子中学生の夢の中を覗いてきちゃっただけだよ。いやー、すごい世界だったね、もはやネバーランド」

「うん、ちょっと職員室行ってくるね」

「おい、待て」

ガシッ。

桐島のか細い腕を話さぬようにつかむと、とりあえず落ち着いてもらう。

「嘘だ、いや、嘘じゃないけど誤解だ」

「えー？ 何がー？」

「いや、本当すいませんでした。調子こいてました。謝りますすいませんでしたもうなんも言いません」

「別に私に謝られても困るんだけど。後はゆっくり警察の方に」

鬼畜な桐島さんだった。クラスの人気者で美少女の桐島さんの信用を失ってしまったらしい。

「い、いや、本当桐島さん今日もお綺麗ですわぁ、可愛いですわぁ。もう桐島さん俺の嫁」

完全に苦し紛れである。苦し紛れもいいところで、まず間違いなく通用しないであろうことは目に見えているが。

「……いや……あの……その……えっと……」

「………？」

頬を紅潮させ、唐突にモジモジしだす桐島。……なんか、予想し

ていた反応と違っぞ。

よくわからないがこれならうやむやにできるかもしれない。

「えっと……桐島さん、職員室に行くの、やめていただけます？」

「……うん」

そこで、教室に他のクラスメートたちが登校してきて、会話は途切れてしまった。

それにしても、出会った当初との桐島とは、大分違うような気がする。なんというか、全体的に言えば明るくなった。

もともと明るかったのだが、根本的な、表面的ではない明るさが出てきたような気がする。

桐島には辛い過去があり、色々これから辛い目に会うだろうが、なんとか、頑張ってもらいたいな、友達として。

「えー、それじゃ、きりーっ」

教師が入ってきて、ホームルームが始まった。

俺にとってはこれといった懸案事項もなく、のんびりと時間が進む。

言うなれば、激動の夏休みを過ごしてしまった俺にとって、こういう時間は何ともありがたい。考えてみれば、これが普通の高校生のあるべき姿なんだろうな。

なんて感慨にふけるのも束の間の事、本日は夏休み明けで始業式を行い、ホームルームをしてそのまま帰るだけの日だ。

俺の気持ちなんて置いてけぼりにして、矢のように時間は過ぎていった。

「んじゃ、明日から授業が始まる。いつまでも夏休み気分でない

で――――

最後に教師のありきたりな注意事項を言い渡され、本日のスケジュールはすべて終了。後は帰るだけである。

桐島の方を見ると、友人たちと夏休みの積もる話でもあるんだろう、楽しげに話しこんでいた。俺にそれを邪魔する理由もなく、一人、教室を出る。

帰り道。

「阿僧祇さんっ」

「……おう、悠花ちゃん」

まるでそれが当たり前かのように、聖悠花とエンカウントしたのだった。

「なんか目の下にもものすごいクマが出来てますよ、怖いです」

「あ、ああ。悪いな、昨日徹夜で宿題をやったもんで、ついでに今日もこれから帰って宿題だ」

「え、阿僧祇さんってそんなまじめな方だったんですか？」

「なに？」

なんだ、夏休みはもう開けているのに、これから宿題をやるっていう俺の、どこがまじめなんだ？ 全く分らないぞ。

「……悠花ちゃん、ちゃんと宿題はやっているの……」

「いえ全然」

即答だった。質問を言い終える前に返答された。

「おいっ、じゃあ先生にはなんて言っているんだ？」

「いえ、『家に宿題を忘れました』と」

「それで通るかっ！ だいたい、悠花ちゃんは今受^{うち}験生だろ？霧丘高校を受けるんだろ？」

「宿題なんてやらなくても余裕ですよ、テストなんて一夜漬^ひけで充分です」

「それでも内申点は大事だろうに……」

作者は高校受験の時、内申点がオール3いってなくて大変苦労したんだぞ。

いまだにあの時、音楽の先生にケンカ売らなければ、とか思っているような奴なんだ。

「まあでも、夏休みは比較的まじめに勉強しましたよ、これでもね」

「それが当たり前なんだけどな、受験生。ってあれ、今日は稲葉さんは一緒じゃないのか？」

「ええ、稲葉ちゃんはクラス委員なので」

「なるほどね」

いかにもまじめな稲葉さんに当てはまっている。ただ、恥ずかしがり屋なのに大丈夫なのかと言う見方もあるが。

「それで、悠花ちゃんの宿題の話に戻すが……宿題はちゃんとやれよ、お兄さんとの約束だ」

「いやいや、私みたいなプロになれば、やってこなかったとしても何も言われませんかから、認められてますから」

「単にそれは呆れられて、諦められてるだけだからな？」

「だいたい、プロってなんだ。プロって。宿題をやってこないことにプロなんてあつてたまるか。」

まあ、悠花ちゃんなら宿題をやっていなかったとしても、口八丁手八丁でうまくやり過ごしている姿が目には浮かぶが。

「阿僧祇さんこそ、テスト前は桐島さんとかに頼らず、自分でやったらどうなんですか？」

「人に頼っても来ない奴に言われたくねえよ」

「それを言っちゃうと元も子もないじゃないですかっ！」

「何の元も子がないのか言ってみろっ！」

まったく、今度稲葉さんに頼んでおかないとだめかもしれない。と、その時、不意に俺のケータイ電話がメールが来た事を知らせる着信音を奏でます。

「意外ですね、阿僧祇さんの場合でつきり、『お兄ちゃん、メールだよ?』とか紅音ちゃんの声が録音されている着信音だと思っ
たいんですが」

「悠花ちゃんは俺のことをどんだけ重度のシスコンだと思ってるんだよ……確かに一時は設定しようと思ってたが」

「……」

……とりあえずメールを拝見しようか。

「……っっ!」

そのメールの内容に俺は驚愕し、目を見開いた。
そして、

「すまん、悠花ちゃん、用事が出来た。またな」

「あ、ちょ、阿僧祇さんっ!?!」

悠花ちゃんの返事も待たず、俺は走り出す。

目指すべきところは我が家であるボロアパート、「省過荘」。そこに、俺の大切な人が居るのだ。ずっと会いたかった、とてもとても、大事な人。

ああ、やっぱり自分は悠花ちゃんが言ったように重度のシスコンなのかもしれない。そうでなければ、こんなにいつまでも全力疾走できるわけがない。

「はあ……はあ……はあ……」

荒い息を整えつつ、俺は自分の部屋の前へ向かう。
そこには、

「あかね紅音……」

『ああ、遅いよ、蒼真君』

そこには、俺と同じ髪色をした、線の細い色白の美少女が居た。
髪型はいわゆるセミロングヘアで、肩甲骨の辺りまで伸びている。
体つきはほっそりしていて、肌は透き通るような白色。目は髪と同じように漆黒をしていて、顔は身内びいきを除いても美少女と言わざるを得ない。

「お前、どうして急に……夏休みに来るって言ったのに」

『今が夏休みだからね』

「……そうか」

俺の地元とここじゃあ、夏休みに多少ずれがあるようだ。
だが、そんなことはどうでもいい。

「紅音……!」

気づけば、俺は背丈が二回りほど違う妹のことを抱きしめていた。
なにせ、久しぶりに会った妹なのだ。

『蒼真君、いきなりこんなところで抱きしめられたら恥ずかしいで
しょ?』

「あ、ああ……すまんすまん」

俺はすぐさま紅音の体を解放してやる。

『寂しかった？』

寂しくなかった、と言えば嘘になるな。本当に。

「ああ……そうだな、うん」

『そっか』

紅音は優しく微笑みながら頷いた。

本当に、天使が舞い降りてきたんじゃないかと思うほど、それこそ見とれてしまうほどに美しい笑顔だった。それは俺にとって、掛け替えのないものだ。

「そうだ、どうか遊びに行くか？　て言っても、この辺りにはあんまり楽しめそうなところはないけどさ」

『いや、それいいね、行こうよ、蒼真君』

紅音は微笑みながら俺の手を取った。兄妹で手を握るのはおかしいことなのかもしれないけれど、それでも、今日だけはいいだろう。俺の手を握る紅音の小さな手は、少しひんやりしていた。

それは九月に入ってもまだ暑いこの陽気の中で、とても、気持ちよかった。

マイリトルシスターイズ・・・ 1（後書き）

僕には姉がいますが、時々鳩尾をグーパンされます。
拳が固すぎます、奴は。

感想、お待ちしております。

マイリトルシスターイズ・・・ 2

「んで、どこ行きたい？ お前の好きなところでいいんだぞ？」

『そうだねー、まずは、お昼ご飯でも食べない？ 蒼真君、まだでしょ？』

「そうだな、じゃあそうするか。何食べたい？」

「そう言っても私はあんまりこの辺り詳しくないし、蒼真君の食べたいものでいーよ。」

俺達は少し大きめの商店街に来ていた。

ここは片田舎なので、ここくらいにしか目立った飯どころもレジヤー施設もない。

「うーん、ここっていうのは、名産品の食い物もないしな……って、お兄ちゃんはいいいから紅音が決めてくれ」

『そう？ そうだねー。私ってあんまりファーストフード店って入ったことないから、そこがいいかも』

「そんなところでいいのか？ もっと好きなモノ言って良いんだぞ？」

「いやいや、良いよ」

とても控えめな妹だった。

そう言う訳で、俺と紅音は一路ファーストフード店へ。

現在は一時半だ。お昼時のピークも少し去り、ファーストフード店も一息ついている頃だろう。

「おや、阿僧祇君じゃないか？」

俺達が歩いていると、後ろから気の強そうな声が聞こえる。

「ああ、会長」

我が私立霧丘高等学校の現生徒会長、水鏡時拿がそこにいた。今は学校の帰りなのだろう、学生服に鞆をぶら下げている。

悠花ちゃんに続けて会長とも遭遇するとは、つくづく世界の狭さを実感させられる。

「ふ、阿僧祇君、君はまた可愛い少女を連れているのかね、罪な男だ」

「俺がいつあんたの目の前で可愛い少女をはべらせた。っていうか、これは俺の妹ですよ」

「なんだ、つまらないな」

唇をとがらせて、会長はブーブーと文句を垂れる。

「しかし、君の妹と言うのには興味があるな。どれ」

そういうと、会長は俺の後ろに隠れている紅音に顔を向ける人の妹観察しといて「どれ」じゃねえよ、というツツコみが喉から出かったが、相手は一応上級生、ここは渋々嚥下する。

よくわからないが紅音は会長のことを怖がっているらしい紅音は、

微妙に縮こまっていた。

「それにしても、君とはまったく似てないな……すごい美少女だ」

「ほつといてください……」

「それから阿僧祇君……分かっているんだろう?」

急に真面目な顔になると、会長はナイフのように鋭い口調で俺に質問をぶつけてきた。

「ええ、分かってます……」

「それならばいいが……ああ、それよりも、これから兄妹そろってお出かけかね?」

「はい、飯でも食おうかと」

「そうか、それならば水を押さす義理もあるまい。私も生徒会の用事で遅くなってしまうてぺこぺこだ。早々に帰るとしよう」

会長は微笑みながら言うと、ゆっくりと俺たちの横を通り過ぎて歩き出す。

しかし、その途中で振り返り、

「ああ、そうだ。今度またウチに遊びに来ると良い、父が会いたがつていてね」

「謹んで遠慮させていただきますよ……いや、マジで勘弁してくださいお願いします……」

ほんと、もうあんな寿命の縮まるところにはいきたくない。またヤクザへの勧誘をうけたら堪った物じゃないからな。

「そうか」

特に名残惜しげな様子もなく、会長はニコニコとした人当たりの良い笑顔で足早に去って行った。

それが逆に、俺にとっては残酷に思えて仕方がない。あの人は、自分にも他人にも、甘えが一切ない人だから。

『……蒼真君、今の人は誰なの？』

「ん？ ああ、お兄ちゃんの数少ない友達だよ」

『そっか』

一方紅音も笑顔だ。俺もきつと似合わぬ笑顔をしているんだろう。そして、みんながみんな笑顔になったのだった。

ファーストフード店と言うのは、店員とのコミュニケーションが最小限な点が良いと思う。どう良いのかとは言えないが、最悪、友達に頼んで買ってきてもらえば、自分は店員と触れ合わずに外食にありつける。

人間関係と礼儀作法に重きを置く日本において、これはあまりにも異端なのではないだろうかと思う時があるが、それでもだ。

「おいしかったか？」

『うん、とっても。私ってああいうジャンキーなもの、食べたことなかったから』

「……そうか」

『あのポテトもおいしかったな』

今更ながら、紅音は中学校指定の制服を着用していた。

黒のセーラー服は熱いのではないかと思うが、紅音は汗ひとつかいてない。

「紅音、次はどこ行きたい？」

『そうだね……』

俺は紅音の行きたいところならどこでも行こうと思った。

そして、控えめな紅音の要望を聞き取って、どこでも連れて行っ
た。

「そうなんだよ、お母さんったらね、また泣いちゃってね」

「あの人は、本当に泣き虫だから……」

『あの人、なんて言っちゃダメだよ。親に会える日数の計算式って
いうのを知ってる？』

「知らないけど……」

『日本人の平均寿命・親の年齢×一年で親に会える日数』今から親に会える日数。まあ、あくまでも目安だけだね』

「ふーん……」

物知りな妹だった。いつの間にこんな知識を得たのか。

この間の電話でふざけて私私詐欺とか言ってたし、あんまりテレビは見ない方だと思っていたが。

『すっかり暗くなっちゃったね』

「そうだな……」

紅音を色々な遊びの施設に連れてっていたら、もう気付けば午後7時だ。夏場とはいえ、かなり辺りは薄暗い。

そうだ、そういえば今日紅音は泊まって行くのだろうか。だとしたら銭湯に連れってやらないと、家には風呂がないから。ああ、その前に夕飯か、まあ、その点は財布にまだ金が残っていたから大丈夫だろう。

夜は久しぶりに、紅音と並んで寝よう。久しぶりだったか、小学生以来だな。

しかし、それにしても大分体格差が出てきたな、まあ、中学校一年生と高校一年生じゃ、こんなもんなのだろうか。

「なあ、紅音――」

『あ』

夜道を先行して歩く紅音の背中に話しかけようとすると、不意に

紅音が小さな声を上げた。

道の横を見るその目線の先には、件の大樹が埋まっていた公園。

この前、ここで俺は我妻と言う男と知り合い、そこで夢の中に引きずり込まれるという事件が起こった場所。

本当に、いつになつたら撤去するのだろうか、いつまでも倒れた大木は公園のスペースをつぶし、我が物顔で横たわっている。

『ここ寄つてこうよ』

「ああ……良いけど」

ゆっくりとした歩調で紅音が公園に入る。俺もそれに倣い、公園に脚を踏み入れた。なんというか、最近ここに頻繁に来ていような気がするな。

しばしの沈黙。

「そうだ、紅音。今夜の夕飯はどうする？」

『うーん……いらなかな』

ニコツと言う笑顔を振りまいて、紅音は答える。

「風呂は？」

『いない』

「あ、んじゃどっか遊びに行くか？」

『行かないよ』

沈黙。それでも紅音の笑顔は崩れない。

『蒼真君、分かってるんでしょ？ 私は――』

「言っなっ！」

思わず大きい声を出してしまった。

俺の怒鳴り声が公園に反響し、辺りに木霊する。俺自身も、自分の声の大きさにびっくりしてしまっくらいの大声だった。

前に桐島に怒鳴った時よりも、もっと大きい声。

「う、ごめん紅音……」

『いや、いいよ』

それでも紅音は微笑んでいた。天使の微笑で。

「本当……ごめん……」

『何でそんな顔するの？ 別に蒼真君は何も悪いことしてないよ。今も、あの時も』

どうしようもないと、分かっていた。俺にはどうすることもできないし、俺以外の他の奴にだって、どうしようもできない。

すべてが終わってしまっていて、終結してしまっていて、そこそみんなが笑っている大団円だ。

どこにも救いのない大団円が、ここにはある。

「紅音……俺は……俺は……」

『蒼真君、だからそんな顔しちゃダメだよ。だから女の子にもてないんだからね』

「ぐっ……」

急な眩暈に襲われて、立っていらなくなる。

そんな俺の手を、紅音は優しく握ってベンチへと促してくれる。相変わらずの、冷たい手だった。熱帯夜である今日でも、その手からは涼しさを通り越して、寒気すら感じる。

「ダメなんだよ……俺は……いつまでたってもどうしようもない奴で……人一人救えないんだ……人一人守ってやれないんだ」

『あの時の言葉、覚えててくれたんだね……』

「人に優しくすれば、その人も自分に優しくしてくれる……」

『うん』

本当に、本当の本当に、訳が分からない。俺も、訳が分からない。だから、語るべきなのだろう。語らなければいけないのだろう。語ることが、俺の義務なのだろう。

しばしの間、俺の小話に付き合ってくれないか。

今から話すのは、俺の妹こと阿僧祇紅音が二年前、死亡したときの出来事だ。

マイリトルシスターイズ・・・ 2（後書き）

色々と伏線は張ってきたつもりでしたが……わかりましたかね？
あ、総合評価100ポイント超えました、ありがとうございます。

感想、お待ちしております。

マイリトルシスターイズ・・・ 3 (前書き)

若干グロ注意

僕は昔から何でもできた。

先に言っておくが別に自慢とかじゃない。いつごろから意識し始めたのだろうか、自分は特別なんじゃないかと言うことを。

運動はもちろんクラスで一番だったし、特に努力もなく五十メートル走などの走る競技では県の中で記録を残したこともあった。

運動だけでなく、勉強もさして苦労もなく頭に入ってくる。それでもその当時の僕は自分が特別ななんて自覚はなく、こんな程度の事ならみんなできるんじゃないかと思っていた。

クラス対抗のドッジボール大会があった日も、運動会も実力テストも、皆の動きの緩慢さと言ったらなかった。

見ていてイライラする。

なぜこの程度のことができないのか、なぜこの程度の事も覚えられないのか、なぜこの程度も理解できないのか。

なぜ周りの人間は、僕をそんなに褒め称えるのか、なぜ僕を羨望の眼差しで見るのか。

「意味が分からない」

当時の僕はそう呟いた。

僕ももう中学二年生だ。そのあたりの分別は弁えてはいるが、それでも理解はできない。

この世界で、僕は『天才』と呼ばれる人種だということだということとは理解できる。理解できるのだが……どうしても周りの人間にイライラする。

それ故か、僕には全くと言って良いほど友達がいなかったのである。

「紅音、来たぞ」
あかね

「あ、蒼真君、いらっしやい」

友達のいない僕は放課後の予定もない。全くと言って良いほど暇な時間をどうやって過ごしているかと言うと、こうしていつも妹である紅音の見舞いに来ているのだ。

妹は昔から体が弱く、入退院を繰り返していた。いつもいつも本ばかり読んで、とてもじゃないが健康とは言えない生活を送っている。

「ああ、起き上がらなくていいぞ、そのままで」

「大丈夫だよ、蒼真君は心配しすぎ。私、もうすぐ退院だよ？」

それでも紅音はいつでも笑っていた。雨の日も風の日も、台風の日だって僕が見舞いに来ると、笑いかけてくれるのだ。顔色が悪い日だって笑っていた。

僕はいつしか、ほとんど毎日妹の見舞いに行き、面倒を見るようになった。

「本当に大丈夫か？　ちゃんと食べてるか？」

「大丈夫だって……もう、蒼真君は心配性だなあ」

「そりゃあ、妹なんだから心配するに決まってるだろ」

僕は紅音が寝ているベッドの近くに椅子を持っていくと、そこに腰かける。

「世の中の兄妹はこんなに仲良くないと思うけどなあ」

「そんなもんか？」

いつも控えめな美少女である紅音は、病院でもアイドル的存在であるようだ。看護師さんに話を聞くと、いつも笑顔でいい子だと答える。

「それよりちゃんと寝て、ちゃんと食べよ。退院したら、中学生だ」「うんっ！」

冬も終わりに近づいてきた。紅音は今年小学校6年生だ。

これで体調さえ悪化しなければ、晴れて紅音も中学生。医者話を聞く限り、体調も少しずつではあるがよくなっているらしい。たしかに、入院するたびにその期間は短くなっていったような気がする。

「いいか？ 言い寄ってくる男とかいたらお兄ちゃんに言うんだぞ？ とりあえずコークスクリューをそいつの心臓にぶち込んでやるから」

「そんなことまでしないでいいっ！」

「でも、本当にたちの悪いのが居るんだよ、この世の中には」

「それは蒼真君の方だと思うけどね……」

案外毒舌な紅音。いつもこうやって僕と紅音は楽しくおしゃべりしているのだ。

「ごめんなあ紅音。本当なら母さんとか父さんも連れてこられると良いんだけど……」

「いいよ全然。二人ともお仕事で忙しんだし、それに蒼真君が来てくれるでしょ？」

「……思っただが、いい加減お兄ちゃんって呼んではくれないか？」

「えゝ、でもちっちゃい時からこの呼び方だから呼びなれちゃったよ」

全く、絶対『蒼真君』より『お兄ちゃん』の方が語呂がいい気がするが。

手持ち無沙汰な僕は手近にあつた見舞い品のリンゴをむき始める。シャリシャリと耳に心地いい音を発しながら、時事の話題などを紅音に語る。

と、そこで不意に紅音が漏らすような声を出した。

「いいなあ……蒼真君はなんでもできて」

それは紅音がよく口にする言葉だった。

それと同時に、僕が昔から言われてきたこと。なんでもできて当たり前前の僕は、なんでもできることを強制されてきた。なんでもできたから友達が居ない。

紅音が言ったのはそういうニュアンスの事ではないと分かっているが、正直、胸が締め付けられるような痛みに襲われて、目をギュッと閉じたくなってしまふ。だが、紅音の前だ。ここは堪える。

「紅音も退院したらなんでもできるさ。日本の憲法で国民は個人と

して尊重されているらしいし、自由じゃない日本国民はいないらしいしな」

「相変わらず蒼真君は蒼真君だなあ。安心したよ」

「そつか、そりや良かったよ。でも、退院したら紅音だつてなんでもできるつてのは本当だぜ？ 何せ、まだ義務教育期間は三年とちよっと残ってるんだからな」

その気になればなんだつてできるさ。できないことはない、は過言だが、大半のことはできる。

「そうだね、そうだと良いな……朝に弱い蒼真君を朝起こして、朝ご飯食べて、『遅刻だー！』とか言いながらバタバタと準備して家飛び出して、学校についたら友達とおしゃべりして、勉強もがんばつて……」

「……ああ、できるさ」

僕は言い切った。人生の半分を病院で過ごした紅音にとって、そんな日常は夢のような日々なのだろう。じゃあ、それに付き合うのが僕の役目だ。

何があつても紅音を守ろう、紅音の日常を守ろう。僕は心にそう誓った。

それから若干の時間が流れ、今日はついに紅音が退院する日だ。帰りのホームルームが終わると同時に僕は教室を飛び出す。今日は父さんも母さんも仕事で忙しいらしい。

まったく、娘の退院に付き添えないとは、ひどい親もいたものだ。

まあ、僕はその息子なわけだが。

「あ、阿僧祇君っ！」

「……」

後ろから呼びかけられる声がした。振り返ってみると、そこには一人の女子生徒。

……確か名前は何だったか。同じクラスであることは覚えているのだが、名前が思い出せない。

見た目は完全に普通の女の子だ。黒髪ของセミロングヘア、背丈も普通、体系も普通、目鼻立ちも普通。

僕が振り返ったのを見ると、その少女はいかにも怒ってますみたいなしかめっ面をあらわにし、詰め寄って来る。

「な、なんだよ……」

「……今日、何の日か覚えてる？」

何の日？ どういうことだ？ 全く覚えてないぞ、そんなこと。

「えっと……」

「阿僧祇君、今日掃除当番の日なんですけど」

「え、でも今日は……」

確かにそうだったような気がする。

しかし僕が行かなければ紅音は一人でさびしく退院してしまうことになる。それだけは避けたい。

「す、すまん……今日は……」

「……妹さん絡み？」

「えっ、何でそれを」

僕は紅音の事はおろか、妹の存在も誰かに話したことはないって
いうのに、なぜこの少女はそれを知っているのか。

「知ってますとも、学級委員ですからね」

「それ、理由になるのか？」

「なります」

言い切った。

「いや……それでも今日は……」

「……はあ、分かった。今日だけは私が代わってあげる。その代り、
今度私が当番の時手伝ってよね？」

それで代わってくれと言わない辺り、ものすごくまじめだと思っ

「ありがとう、恩に着る」

僕は少女に礼を言うと、その場で踵を返して走り出した。

「廊下は走らないっ！」

後ろでそんな声が聞こえてきたが、そんなものには構わない。
それにしても、不思議な女の子だった。僕はクラスメートの女子
と久しぶりにしゃべったような気がするが、今回はあまりイライラ
しなかった。

精神的に成長しているおかげなのか、それともあの少女と僕は何
か通ずるものがあるのか。

とりあえず、あの娘には後でちゃんとお礼を言っておこう。

「紅音、来たぞ」

三十分後、僕は無事に紅音の病室に到着していた。紅音は病院服
をから着替え、新しく通う僕と同じ中学校の制服を着ていた。

「えへへ、どう？ 似合う？」

「ああ、似合ってるさ」

「そっか、よかったよ」

医者に礼を言い、僕たちは病院を出る。紅音は終始元気そうにク
ルクルと回ったり、ピョンピョンとジャンプしたり。年齢の割に大
人びている紅音にしては、珍しくはしゃいでいる様子だった。

「良かったな、元気になって」

「うんっ！」

とびきりの笑顔で、紅音は返答する。僕にとってはそれが、何よ

り大切なものに思える。

「あのさ、蒼真君」

「お兄ちゃんと呼べ」

「あのさ、蒼真君」

どうやつても呼ぶ気はないのか、この妹は。

「……なんだ？」

「私さ、人に優しくする」

「……はい？」

「蒼真君が私に優しくしてくれたように、私は他人に優しくする。もちろん蒼真君にも優しくする」

「そりゃあ、いいことだな」

「だからさ、蒼真君も他人に優しくしてほしいな、私にしたみたいに。妹じゃなくても、赤の他人でも優しくしてほしいな」

「そりゃあ、いいけどさ……」

「お父さんとお母さんを大切にして、友達を大切にして、赤の他人を大切にする。そしたら、きっとその人たちも自分を大切してくれるから」

「……そうだな」

紅音がそう言うのなら、そうなのだろうと思えてしまう。

僕は別に赤の他人なんてどうだっていいと思ってるし、それこそ赤の他人なのだから、死んでもどうってことないと思ってる。それでも、紅音がそう言うのなら、そうしようじゃないか。

そうだな、手始めに今日掃除当番を代わってくれたあの娘にしてみよう。掃除当番はもちろん代わるし、学級委員だと言っていたから、その雑務なんかを手伝ったら喜ぶかもしれない。

そうして、友達になれるかもしれない。

「んじゃ、帰るか。家に」

「うん」

そうやって簡素な言葉を交わし、僕たちは帰路につく。

つけるはずだった。

はずだったのだ。

僕たちはこのまま帰って、テレビでも見ながらゆっくりとくつろいでいるはずだった。

横断歩道の前で僕たちが信号待ちをしていると、突如として、一台の乗用車が歩道に突っ込んできたのだ。

「っ！ 紅音っ！」

紅音の後ろにいた僕は、咄嗟の判断で紅音を前に突き飛ばす。

次の瞬間、体に凄まじい衝撃が走った。突っ込んできた車に轢かれたのだと、すぐわかった。

ボキボキボキッという肋骨が数本折れる音と、足が折れる音とが混ざり合い、僕は吹き飛ばされる。

「がっ！ はっ……」

そのままアスファルトの上をゴロゴロと転がり、気が付けば、僕は歩道の上で死んだ蛙みたいに横たわっていた。

だが、それでも、大丈夫だ。

紅音が無事ならそれでいい。紅音さえ無事なら、僕はもういいんだ。

僕は紅音の無事を確かめようと、突き飛ばした方向を何とか見る。

「きゃああああああああっ！」

通りすがりの女性のものだろう。悲鳴が木霊した。

当初それは僕のあまりにあれな姿に向けられたものだとばかり思っていたが、どうやら違うらしい。

「あ……ああ……あ……」

これは僕の口から洩れた声。

大型トラックが停車していた。前面のバンパーには、何かを大きな動物を轢いたような血痕が残っている。

その大型トラックに紅音が轢かれたのだと気が付くのに、その時間にはかからなかった。

簡単だ、僕が後ろから突き飛ばした先は、当然道路で、そこに大型トラックが来たただけの話だ。

ただそれだけの話だ。

「あ……あ、紅音……」

体の小さい紅音ならまだトラックの下をすり抜けているのかもしれない。

れない。

この時の僕は冷静な判断を見失っていた。バンパーに血がついているのに、すり抜けているわけがない。

それでも、僕は這った。文字通り無様に、ゴキブリのように這ってトラック付近へと向かう。

ふと見てみると、僕の右足は乗用車に轢かれた衝撃で見事にひしやがていた。

だが、そんなことは関係ない。

「あ……かね……」

どのくらい時間が経っただろうか、もしかしたら一分かもしれないし、十分かもしれない。一時間だったかも。

僕は文字通りの這う這うの体でトラックに近づいたとき、腕にあるものが当たった。

腕に当たった物、それもまた腕だった。

小さな、僕のものよりも二回りほど小さな腕が、ひじ辺りから千切れて転がっていた。僕には分かる

○ 確かにわかる。

これは、紅音の手だ。中学校の制服が袖ごと千切られている。

そしてその先には、トラツクに踏みしめられている、正真正銘、動かなくなつた紅音の体があつた。

「あああ……アアアアあああああ鳴あああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
あああああつあああああああああああああああああああ
あああああああああああああつ！」

なんで。

何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何

で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で難で男でナ
ンでナンデなんで何でナンで難で男でナンでナンデ難でナンデ
何でなんで何でなんで何でなんで何でなんで何で何で何で
何で何で難で男でナンでナンデなんで何でナンで難で男でナンで男
でナンデ難でナンデ何でなんで何でなんで何でなんで何でなん
でなんでで何で何で何で何で難で男でナンでナンデなんで何でナン
で難で男でナンで男でナンデ難でナンデ何でなんで何でなんで何で
なんで何でなんで何でなんで。

なんで紅音は、死んだ？

僕……いや、俺のせいかな？俺のせいで紅音は死んだのか？

「お、俺が余計なことをしなければ、紅音は死なずに済んだのか……？」

激しい吐き気を催し、這いずりながらその場で胃の内容物をすべて嘔吐する。吐瀉物の酸っぱい味と、血の鉄くさい味が口の中で混ざり合う。

「か……神でも悪魔でも死神でもいい。俺の命を持って行け……だから……だから紅音を」

助けてくれ。最後の言葉は、口に出そうとしても体が悲鳴を上げて声にならない。

そのまま、俺は気絶して、救急車で紅音が入院していた病院に逆戻りしたのだった。

マイリトルシスターイズ・・・ 3（後書き）

はいっ、と言うことで！

暗いですね！ 話が！

このエピソードはこの作品を始めた当初から頭の中にあつた物なのですが、文章に起こしてみると暗いのなんの。そして若干グロい。気分を害された方、申し訳ございません。でも前書きでも一応注意はしておきましたからね？

その辺りの文句はやめてくださいお願いします殴らないでください。

感想、待ってます。

「あの後俺は病院に運び込まれて治療を受けた。大けがだが、命に別状はなかったそうだ。つくづく俺の体は丈夫なんだなって思ったよ……」

公園のベンチに俺と紅音は腰かけていた。

もうすでに日は沈み切り、辺りには申し訳程度の街灯の灯と、住宅からの蛍光灯の明かりしかない。

何とも寂しく、巨木が闇の中に佇んでいた。

この紅音は、おそらく幽霊と呼ばれる類の存在なのだろう。ゴースト、ファントム。

何せ、俺が悪魔と同化した後から、つまりはここに引越してきたから、紅音からの電話がかかってくるようになったのだ。

まるで、俺の寂しさを埋めるように、一定のペースで紅音から電話がかかってきた。最初は驚いたが、すぐになれた。

「俺は信じたくなかったんだ……紅音が死んだということ……」

だから、妹を生きている者と扱い、割り切った。そうして、俺の中で紅音は生きているという現実が出来てしまったのだ。

そう、それはただの思い込みで、ただの独りよがりの真実で、ただの夢で、妄想だ。

それこそ偽りだ。

夢がどうか、偽りがどうか、現実とか真実とか、稲葉さんのことをとやかく言える立場じゃないんだ、俺は。

『そっかー、蒼真君は私が生きてるって思っちゃってたのかー』

星空を見上げながら、紅音はニコツと笑う。

それじゃあまるで、自分が返る方向を見ているみたいじゃないか……。

「ごめん……俺はお前を守れずに……俺が余計なことしなければ、お前は死ななかったのに……俺が……俺が紅音を殺したんだ……」

『いやーあはは、どっちみち私はあの乗用車に轢かれても死んでたよ。あれは蒼真君だから生きられただけで、あんな猛スピードで突っ込んで来たら、誰だって死んじゃうよ』

「それでも……俺は……」

情けない。自分が情けない。

あの時の自分も情けないし、今こうして頭を抱えている俺も情けない。すべての俺が情けない。

あくまで悪魔な俺は、最低最悪のクソ野郎だ。どうしようもない手の施しようもない。

「お前は……何なんだ？」

さつきはああ言ったが、結局、紅音は何のか、その辺りがはっきりとしていない。

紅音と言う存在は今、どのような状態なのか。

『うーん、分からないんだよね。私っていうのは幽霊だとは思っただけど、誰もそれを証明できない。もしかしたら妖怪かもしれないし、それこそ私はここに居なくて、蒼真君の思い込みかもしれない』

「いや、それはない……」

何せ、会長が紅音の姿を見ているのだ。他の誰にも見えなくても、他ならぬあの会長が見えているのだ。

会長はあれで鬼の力を有した特異な人間だ。実体無き紅音の姿を見て当然と言えば当然である。

『そっかー、それもそうだね。ちょっと安心したよ。私はここにいるんだ』

「ああ、お前は確かにここにいるよ……」

ここにいるんだ。しかし同時にここにいない。それが今の紅音の立ち位置なのだろう。

今までと同じだ。

妖怪変化、奇々怪々。

「それで……紅音は何しに来たんだ？」

『ん？ うーんとね、それはね』

紅音はベンチから立ち上がり、俺に背を向ける。

わかつているんだ。

俺は紅音に何もしてやれなかった。何も教えてやれなかった。

それなのに、紅音の死の原因は俺だ。俺があの時無理やり掃除当番を変わってもらったりしなければ、おそらく紅音は一人で帰り、運命は変わっていただろう。

俺が紅音を殺したんだ。何を言われても仕方ない。どんなに責められようと、俺は何もできないし、何もする権利はない。

「……ごめん紅音、俺は悪いお兄ちゃんだった……いつも自分の

寂しさを紛らわすことだけ考えて、ひやかしてみたいに紅音の見舞いに来て……。紅音は動けないのに、無責任な話や、不謹慎な言動をして……」

俺は友達が欲しかったのかもしれない。俺は他人が嫌いだから、友達ができない。

友達が欲しいのに他人が嫌いな、欠陥人間だ。

『……』

しばしの沈黙。

紅音は今どんな顔をしているんだろうか……。怒っているんだろうか、悲しんでいるんだろうか。いや、どっちもだな。

俺はどうしようもない兄貴だ。

『……えーっと、もしかしくなくても、蒼真君はつまり私が蒼真君に怒ってると思ってるの?』

「……そうじゃないのか?」

『プツ——あっはっはっはっはっ!』

「……?」

何がおかしいというのか……?

『いやいや、可笑しいよっ! おかしくて可笑しいよ』

本当に、ヒマワリのような笑みで紅音は笑い声をあげる。

『私が蒼真君を恨んでるって思ってるの？』

「……………」

『そんなわけないじゃん』

心の底からの、否定の言葉だった。俺がずっと聞きたかった、否定の言葉だった。

いとも簡単に、尚且つきっぱりと、紅音は言ったのだ。

『違うよ、私は蒼真君を恨んでなんかいない』

「じゃあ、なんで幽霊になってまで俺に会いに来たんだ……………」

『そんなの簡単だよ。まったく、蒼真君は本当にいい人で、終わってるくらいに良い人だね』

「どついうことだ？」

『それでも気付かないとは……………これだから女心に疎いのかもしれないね、蒼真君は……………』

眉間にしわを寄せてこめかみを揉む紅音の口元から笑みが消えることはない。

『私っていうのはここに、ある一言を言うために居るのでした』

「ある、一言？」

俺の質問に、クルリと回転し俺から背を向けると、一拍おいて紅

音は振り返った。そして、いつものしゃべり口調でこう言ったのだ。

『ありがとう、”お兄ちゃん”』

「ッ——！」

これが、紅音の俺に言いたかったこと。死んで現世に留まってまで、俺に言いたかったこと。

他人から言わせてみれば、なんだそんなことか、と一蹴されるかもしれない。だけれど、俺にとってそれは何よりも価値のある言葉だった。

何度行っても頑なに俺のことをそう呼ばなかったのに。

「……俺は、お前に何かしてやれたのか……？」

『たくさんしてもらったよ。着替えを持ってきてくれて、ご飯を作ってくれて、リングをむいてくれて、心配してくれて、笑わせてくれて、毎日お見舞いに来てくれて、楽しい話をたくさんしてくれて、私のことを思ってくれて、命を張ってまで助けようとしてくれて。ありがとう、お兄ちゃん』

俺はベンチに座りながら顔を伏せた。今自分がどんな顔をしているのかわからないけれども、とにかく、ひどい顔であることは分かった。

人には見せられないな、俺のこんな顔は。

「……俺は、お前にとって良いお兄ちゃんだったのか？」

『うん』

「俺は紅音にたくさん何かをしてやれて、たくさん何かを教えてやれたのかな？」

『うん』

「……紅音、幸せだったか？」

『……うん』

「……そうか」

中学校に入学もできず、人生の一番楽しい時期に死んだはずの紅音が、幸せだと言った。

どうしようもなく生まれたときから体が弱く、人並みの子供時代を過ごせなかった少女が。その上理不尽な目に合って、人生始まったばかりで死んでしまった俺の妹が、幸せだったと微笑んだ。

「俺も……俺もだ」

紅音が死んでから、俺の人生は不幸であり、不幸以外はありえなくなつた。不幸であるならば俺。俺であるならば不幸。どちらも必要十分条件だった。

だけど。だけれども。

「今日……俺は幸せだ……！」

『そっかー。よかった、一緒に幸せになれて』

「紅音……俺はもつとお前と居たい……」

『うん、私も。でももうダメだよ』

私は死んでるんだから、紅音は言った。

『それでさ、最後にやってもらいたいことがあるんだよ。妹からの最後のわがまま』

俺はなんでも叶えてやるつもりだった。たとえどんなに達成困難な夢物語のような願いだったとしても、俺がそれを叶えてやる。どんなことをしてでも。

俺を一時でも幸せにしてくれた、最愛の妹を。世界でたった一人しかいない、俺の妹の願いを。

『んじやさ』

そして、紅音はゆっくりと口にした。

『私をもう一回死なせてよ』

マイリトルシスターイズ・・・ 4（後書き）

妖怪図鑑 NO. 1

名称：祭壇の山羊

関係者：桐島葵

登場話：ゴートオブガール1～4

備考：

いわゆるところの”死神”、と呼ばれる存在。その名の通り死の神、死を司る神。

死にかけ、もしくは死を望んでいるなどなど、とにかく死に近い人の前に現れる。

見た目は完全に普通の山羊、だが、唯一違うのはいつもニヤニヤと不気味な笑みを浮かべていること。この山羊が現れてから次の日、その人間は確実に死ぬ。そうして、その人間の霊魂を食らう妖怪。

逃れる方法は基本的にないが、その人間が死から遠ざかれば、自然に去っていく。

劇中に置いて、メインヒロインであるところの桐島葵の前に現れ、そのことで主人公が関わっていくことになる。

以下作者コメント：

このモデルはもちろん本物死神から来てます。まあ、見た目も設定もオリジナルで、かなり嫌な奴です。

っていうか、この唐突に始まったこのコーナー、これからやっつてこうと思いますけど、実際の宗教上のなんちゃらとは一切関係ないのであしからず。あくまで僕の完全オリジナル妖怪、ということを

ご理解ください。

感想、待ってます

マイリトルシスターイズ・・・了

「な……何言ってるんだ、紅音？」

『いやはや、言葉の通りなのですよ。もう一度私を死なせて』

「それは……どういう……」

俺が言いかけたところで、紅音が俺を指差した。
正確には、俺の胸辺りを。

『蒼真君の持つてるその鎌、あるでしょ？』

「おい、紅音……まさか」

巨大な鎌、『鎮魂歌』。

魂を静める歌。

『成仏つてのは漫画やらアニメやらで言われているのとはだいぶ違うんだよ。この世を彷徨う霊は別に目的を果たしても成仏できるわけでもないし、天国に行けるわけもない。一生この世を彷徨い続けるしかないんだよ』

「じゃ、じゃあ成仏つてのは実際何なんだよ……？」

その辺りの話は前山か贄川に聞いた方が早いのだろうか。

あいつらなら謎々の答えでもいつかのようにあっさりと答えてしまえるんだろう。

『うーん……私も詳しくは知らない、いや、知ってるのかな。なんとなく、感覚的にっていうか、そんなところなんだけどね。成仏っていうのはこの世に残らないことを決めた人だけができるんだよ。だからさつきも言った通り、私はこの世にとどまっちゃったから、成仏できないのです』

「何で……」

『ん？』

「何で成仏しねえで俺なんかに会いに来てんだよ……ちつくしょう……」

『あははは、まあ、私でも考えなしだったかなーって思うところあるよ。ただまあ、蒼真君にお礼を言い終ったら一生この世を彷徨ってもいいって思ってたしね』

なんて、馬鹿な妹なのだろう。

永遠に、未来永劫この世と言う、紅音を受け入れてはくれない世界で、空虚な時間を過ごすつもりだったのだろうか。俺に礼を言うためだけに。

まったく、つくづく俺の妹だ。

『だから、蒼真君が持つてる鎮魂歌それっていうのは、ことさら特殊なものだね、もはやこの世の理に反していると言ってもいい代物なんだよ。だって、おかしいじゃん、この世のものではない者を静める鎌、なんて』

「鎮魂歌で切れば、紅音はどうなるんだ……？」

『分からない』

「分からないって……」

『だって、本当に分からないんだもん。存在自体が消滅するのか、それともその鎌の冠する名前同様、成仏ができるのか』

そんなもので、紅音を切れというのか。俺の命よりも大事な、妹のことを。

『まあ、少なくともこの世には居られないってただだよ。でも、それだけで十分なんだ』

この世には居られない。この世には居たくない。

死んでさえも、死んだからこそ、死んで初めて、人間はそう思えるのかもしれない。そう思わざるを得ないのかもしれない。

「本当に……良いんだな……？ お前はどうなるのかも分からないんだぞ？」

『うん、いいよ。どうなるうが、ここに居るよりはずっといいと思う』

それが紅音の願いならば、俺は従うしかないじゃないか。

それに、紅音は俺の為に、ここに残ったのだ。いや、実際は紅音の自己満足なのかもしれないけれど、それでも、俺が発端で紅音は残った。

どんなに取り繕うが、責任の一端は俺にある。

これは、俺の義務でもあるのだ。

「鎮魂歌……」

俺の右手に、真っ赤な巨大鎌が出現した。

紅に染められた刃の曲線は、月の光に照らされて、回りさえその紅色に染め上げるような光沢を放っている。

『んじゃあ、その鎌でズバツとやっちゃってくださいよ。たぶん痛くはないと思うから』

「紅音」

『ん？』

「ありがとう……」

『お礼を言いに来たのはこっちなんだけどね。でもここに来て、お兄ちゃんは一人で大丈夫みたいだね』

「んな訳ねえよ、人間は一人じゃ生きていけねえんだから」

『そうだね、それでも私は蒼真君と一緒にいてあげられないよ。なんてったって、わたしってば人間じゃないからね』

「ああ、そうなんだな……」

紅音は人間じゃない。だから、人間の代わりにもなれないし、ましてや人間としても居られない。

要するに、紅音は人間と違って一人でも生きていける。

『私が居なくても大丈夫でしょう、一人で生きていけなくても、お

兄ちゃんにはいいお友達が居るし、なによりお兄ちゃんを大切に思
つてくれてる人がいるしね』

「俺を大切に……？」

『これだから……まあ、もうすぐわかるよ。それじゃあね、お兄ち
やん』

「ああ、もう行くのか」

もう紅音は行ってしまうのか。逝ってしまうのか。
俺は鎮魂歌を振りかぶる。なるべく、一瞬で済むように、全力の
力をふるえるように、大きく鎌を振りかぶった。

「じゃあな、紅音」

『うん、元気で』

「おやすみ」

『おやすみ』

まるで寝る前のあいさつをしているかのような簡素な挨拶だ。そ
れでも、こんな時なんて言えいいのかという知識を俺も紅音も持
っていないかったし、そんな言葉が出てくるだけの語彙力もない。

そして、数秒後、俺は鎌を振るったのだった。

振った、と、思った瞬間には、すでに紅音の姿はなかった。

まるでそれが幻のように、夢うつつのように。

紅音と共に過ごした今日という一日が、さながら夢での出来事か
のように、俺の記憶の中で薄まりつつあるのを感じた。

「クソッ！」

俺はその場で跪き、思いつきり地面を殴りつける。

公園の土の上に散らばっていた小石や砂利が、俺の拳を一斉に突き刺し、指の外側を赤く染める。

忘れたくない。

紅音との時間を忘れたくないと思っている自分が居るが、どうしてもその記憶をインプットできない。まるで何かのコンピューターウィルスのように、俺の頭への上書きを邪魔する。

「ちつくしょう……！」

小さな声で唸っている間にも、俺の腕は見る見るうちに回復し、突き刺さった小石が析出してポロリと落ちた。

「……あれ？ 阿僧祇君、何やってるの？」

と、その時だった。俺の背後から澄んだ少女の声が投げかけられる。

もう声だけで分かっってしまうことだが、あえて俺はうしろを振り返ってその人物を見据える。

「桐島……」

いつもの制服ではなく、いつか見ようなふんわりとした私服姿の桐島葵がそこにいた。

「……何か、あったような顔だね」

ゆつくりと子供を諭すような口調で、にっこりと桐島は微笑む。

「……何だよ」

「うん？　だってなんかすごく辛そうな顔してるし」

俺っていうのは顔に出やすいのだろうか。

「……いや、別に大したことじゃないんだ」

「嘘だね、大したことあるような顔してるよ」

この時俺は、どうしようもなく泣き出してしまいそうになった。泣いて、この気の置けない友人に妹のことについての顛末を話せたら、どれだけ楽なのだろう。桐島ならば、妹の事故の事も、今日あった荒唐無稽な幻想の妹の事も、丸ごと信じてくれそうな気がする。

そうして、笑顔で『大丈夫だよ』と言ってくれそうな気がする。

ああ、俺はなんて脆弱な男なのだろう。

なんて弱いのだろう。

それでも、この泣きたい衝動がどこから来たのかはわからない。もしかしたら妹を本当の意味で失ったからかもしれないし、桐島に諭されたからかもしれない。

それでも、今となってはどうでもいい。この時は俺は涙が止まらなかったのだ。

「……少し……話しに付き合ってくれないか……」

「うん」

恥ずかしいところを見られてしまった。

大の男がすすり泣きながら、話をするところなど、醜いことこの上なかったかもしれない。それでも、桐島は真剣に聞いてくれていた様子だったけれども。

俺が紅音について語り終えるころには、時刻は午後九時を回り、すっかり俺の涙も止まっていた。

「そっかー」

それが話を聞き終えた後の桐島の第一声だった。

「ああ……悪いな、話付き合ってもらって……」

「いやいや、それはいいんだけどさ、それはそうと――」

「ん？」

ベンチに座っていた俺達だったが、桐島は唐突に立ち上がると、クルリとこちらを向いた。

そして、一言。

「好きだよ」

「……ああ、うん。何が？」

「阿僧祇君」

「……はあ」

唐突に何を言い出すかと思えば、何を言い出すんだ、この娘は……ん？ いや、いやいやいや、どういうことだ？

「それっていうのはどういうことだ……？」

「いやいや、女の子が愛の告白をしてるのにその反応はないでしょう……」

俺は一拍置き。

「はあああああああっ!？」

「ちょ、突然大声ださないでよ」

「いやいや、そりゃ出すわ。なんだ、好きだって。桐島が？ 俺を？」

「だからそう言ってるじゃん……っというか、今までの狼狽した態度で気付いてないのが驚きだよ」

「いや、だっていま全然狼狽してないじゃないですか!」

なぜか敬語の俺。

「いやいや、心臓バクンバクン言ってますからねっ」

「まあ、待て。良い、桐島が俺のことを百歩譲って好きなのは良い。でもなぜ今だ」

そう聞くと、桐島はいたずらな笑みを浮かべ、

「何で私が阿僧祇君に惚れたか知ってる？」

と尋ねてきた。そんなもの、こっちが聞きたいくらいだっていうのに。

「精神的に参ってる時に優しくされたからだよ」

「……え、そんだけ？」

「そんだけって何っ？ それだけで靡^{なび}いちゃうの、女の子っていうのは」

「……まあいいや。んで、それと今の質問と何の関係があるんだよ……？」

「だから、私も阿僧祇君が精神的に参っている時に告白してみました」

なんという、たちの悪い人だろうか。

っていうか、このクラスのアイドルはそこまで計算高かったのか。

「どう？　今ので悩み吹っ飛んだ？」

「吹っ飛ばねえよっ！」

「でも、元気出てきたじゃん」

まあ、それは認めざるを得ないのかもしれない。
突如突然、本当に藪から棒な話だったけれども、それのおかげで

俺のテンションも役回りも、いつもの突っ込み役の阿僧祇蒼真に戻ってしまったような気がする。

というか、そこまで計算していたのか、恐ろしい。

「まあさ、紅音ちゃんのこととは残念で、それは阿僧祇君にとっては一生残念なのかもしれないけどさ、それでも、紅音ちゃん目的が果たされたからいいんじゃないの？ 阿僧祇君は夢の出来事みたいにもやもやしているみたいだけど、それでも、私は憶えてるから。阿僧祇君が紅音ちゃんとのことを忘れてしまったとしても、私が聞かせてあげるから」

そんなに不安がらないでくださいよ、と桐島は若干頬を紅潮させて微笑んだ。

この桐島の顔を見ていたら、本当に大丈夫なような気がしてきてしまうから不思議だ。たとえ忘れてしまったとしても、俺の記憶に長く残らないとしても、桐島が憶えていてくれる。

ここで語ったことは、正解だったのかもしれない。

「改めて思っけどさ……桐島、お前っていい奴だな」

「そう？ 別に大したことはないんじゃないかな？ 私なんて自分のことしか考えてないよ？」

それでもだと思う。

それでも十二分に、この少女はお人好しなのだと思う。

「それで、返事は？」

帰り際、桐島は明るい口調の中にも若干の不安をおわせて、俺に問う。

返事、というのは決まっているだろう。桐島からの告白の返事だ。俺は女子から告白を受けるなんて経験を今までしたことがないの
で、全く分からないのだが、こういう時はなんて返事をしたいの
だろう。

ああ、俺の語彙の少なさが妬ましい。

「まあ、なんつーか……うーん……」

「また後日、とか言うのは無しだよ」

釘を刺されてしまった。

「うん、俺は化け物で、どうしようもなく人間じゃないけど、それ
でもいいのか？」

「いや、私に分かってないとしても？」

そうですね。

「まあ、そうだな……精神的に参ってる時に告白されたら、どうし
ようもないよな……」

どうしようもないことなのだと。
今は、思っておこう。

「俺は死神じゃなくて悪魔だけど、お前と一緒に居たい。……って
感じでどうだ？」

「喜んで」

俺の面白くないネタに、桐島は今までで最高の笑顔で、返事をしたのだった。

マイリトルシスターイズ・・・了（後書き）

妖怪図鑑 NO.2

名称：螫^{はやみ}

関係者：聖悠花

登場話：シザーズガール1～4

備考：

その人の一番要らないものを切り落としてしまう妖怪。

大きな鋏を持ち、黒のレインコートの大柄な男性の姿をしている。夜道を歩き、古い童謡を歌いながら、対象者を追い続ける何とも怖い妖怪。

動揺を歌うのは、子供を安心させるためであり、自分は怖くない、危害は加えないという自己アピールなのだが、今となっては怖いだけである。

切り落とせるものの範囲はとてつもなく広く、トラウマだろうが、がん細胞だろうが、もはや何でも切り落とせる。劇中では『名字』を切り落としていましたね。

九州に伝わるとか言ってますが、全くの嘘っぱちです。僕が勝手に考えただけです。

まあ、説明はこんなところでしょうかね？

最後に謝辞ですが、遅くなってしまつて申し訳ありません！

僕は受験生なもので、自由時間がかなりの量削られてしまい、この夏はあまり小説に手を付けることができない状態でした。

これからの更新についてですが、おそらく投稿ペースが落ちることが予想されます。あらかじめ御理解ください。

どうでもいいけど、次章はいよいよ阿僧祇君の過去編です。

感想、お待ちしております。

デビルアンドアンハピネス 1

そろそろ言うか、いい加減に、語らなければならない頃だろうか。

別に大した話でもない、矮小な俺と、悪魔の話。

今から語るのは、俺と？の、不運で不幸な物語。幸せであるとは到底言えない物語。

それでも、不運は不運、不幸は不幸。どうしようもなく、どうやっても避けられはしなかった物語であり、人はそれを必然と呼ぶのだろう。

そう、これは俺と悪魔の必然的な不幸の物語。

こうやってだらだらと前ふりを引き延ばしているのにも訳があり、俺としてはこのエピソード、非常に恥ずかしいものなのだ。正直言っ、あまり語りたくはない。

それでも、語らなければならないというのは、何とも不幸な話だ。でもまあ、今までさんざっぱら引き延ばしてきたのだ。本当なら桐島とのエピソードよりも、こっちの話を先に語るべきだったのだろう。

本当に、不幸だな。

まあ、前ふりはこのくらいにして、訥々と語って行こうか。

先に言っておくが、この物語はハッピーエンドではない。ハッピーエンドな訳がない。それは承知してほしい。

どう行きついても、どう転ばうと、起承転結の『起』の部分を改変しない限り、『結』は変わりえない。そこには『承』も『転』も関係はない。

しかしながら、だからと言ってバッドエンドという訳でもない。

ハッピーエンドでもバッドエンドでもない。

そう、いうなればまさしく、アンハッピーエンドである。

これは、俺も悪魔も不幸になって、『今』に至るお話。

「何なんだよ……お前らはさ……」

「何なんだじゃねえだろ？ ああん？ 先にぶつかってきたのはてめえの方だろうが？」

「あんたら、高校生だろ？ そんなに暇なの？」

俺の目の前には、ガタイの良い三人の高校生が居た。いや、目の前っていうよりも、俺が囲まれている形なのだが。

「てめえ、ケンカ売ってんのかっ！ ああ！」

「そんなしゃべり方しかできないのかよ？ 知能の低さが窺えるな。俺なんかにかまってるより、チンパンジーと知恵比べでもしてた方が時間を有意義に使うことができるんじゃないのか？」

「てつめえ！」

額に血管を浮かばせた一人が俺に殴り掛かってきた。

ゲームセンターと言うのは、田舎でも変わらず恐ろしいところのようだ。

ちよつと肩がぶつかっただけでこれだもんな。

「だりいんだよ、クソがつ」

敵の動きに合わせて金的を食らわせてやると、何とも醜い面にな

ってその場で蹲った。

「うあああああ！　いてえよおおお！」

「なあ、あんたら、何の為に生きてんの？」

何のために生きているのだろう、コイツらは。

何のために生きているのだろう、俺は。

分からない。

紅音が死んでしまった今、俺に存在価値なんてあるんだろうか。
全く分からない。

「ひ、ひい……」

俺はいつの間になんかに怖い顔をしていたのだろうか、高校生三人組は金的を食らった奴を引きずりながら、退散していった。

「あ、悪魔だーっ！」

俺の質問にも答えず、そんな捨て台詞を残して。

「悪魔……ね」

残された俺は、なんとなくその場でひとりごちる。

悪魔なんて、実在するわけないっての。

あんなものは弱い人間が縋り付きたくて作った幻想だ。ただの想像でしかない。

だが、やっぱり人間は窮地に陥ると、実際には居もしない神や悪魔に頼ってしまうのだろうけど。あの時の俺のように。

空を見上げると、もう夕方だった。

あいつらにゲーセン裏の路地まで連れ込まれてしまったのだが、

こんな生臭いところはそろそろ出た方がいいだろう。

「あ、いたいたー。阿僧祇君っ」

「ん？」

路地を出ると、突然横から声をかけられた。

見ると、俺と同じ中学の制服を身に着けた少女が、若干不機嫌そうな顔をして立っていた。

可愛さとカッコよさと凛々しさと綺麗さなどなど、そんなものをこっちゃんにして割ったような顔立ちだ。まあ、端的に言ってしまうば『普通』という表現が好ましいのだろうが。

それにしても、この少女、どこかで見たことがあるような。

「えーっと……あんた誰？」

「え……ひどいなー、阿僧祇君のクラスの委員長を務めてるんだけど」

そうか、道理で見たことがあるはずだ。

「んで、俺に何の用だよ……」

「わっかんないのかな。私は阿僧祇君のクラスのクラス委員で、阿僧祇君は学校にも来ずにこんなところで遊んでるんだけど」

「別に遊んでるわけじゃないんだが」

ただ、卒業までの暇をつぶしているだけだ。

「だいたい、こんな三年生の真冬にまじめに学校に来てるやつの方が珍しいと思うけどな」

「阿僧祇君は、もう推薦で受かったちゃったんだっけ？」

「……まあな」

紅音が居なくなつて、何に対しても無気力だった俺でも、一応最低限学校には通つて、最低限の成績は取っていた。

まあ、親の勧めで受かった学校なんて遠くにあるちよつとした進学校。たぶん、すっかり不良になつてしまった俺を親は遠ざけたかつたんだろうけど。

「それでも、学校に来ないとダメだよ」

「何であんたにそんなこと言われなきゃならないんだ……」

「あんた、じゃない。私には佐藤っていう立派な名前があるんだから」

佐藤、ね。

なんというか、名前まで普通だな。

「今、私の名前は見た目と同じで普通だ、とか思ったでしょ？」

エスパーか、この娘は。

「ふーんだ、別にいいですよ。私っていうのは、容姿も名前も普通ですから。拳句の果てには、成績も運動能力も普通だし、美術の絵もなんか無難なものに走っちゃうし」

ねちねちねちと、佐藤は自分が今まで経験してきた普通談を語り始めた。

「っていうか、本題からずれてただけ——阿僧祇君、受験終わったからってちゃんと学校来ないとダメだよ？」

「ああ、善処するよ……」

正直、こういうタイプの人間は苦手だ。

折り目正しく、きつちりと、世の中にはルールと言うものがあって、それを守らないと集団行動が乱れてしまう。

そう胸を張って言えるような人間が。

これなら、先ほどの不良の方が、幾分か好印象だ。

「まあ、そうだね、うん。でも無理にとは言わないよ」

「……？ どうしたんだ？ 急に」

「いや、阿僧祇君にも阿僧祇君のなりの事情があるのは知ってるからさ、私にそれを振り払って学校に来いなんて言う権利はないわけ……」

「俺、お前に事情なんか話したっけ？」

「その……言っちゃっていいの？」

「ああ」

「場所、移そうか？」

俺達は近くにあった公園に移動した。

正直、佐藤の話に付き合うの道理はないが、なんとなく。

そう、ただただなんとなく、俺と同じ気配を漂わせるこの少女と話がしたいと思った。

「妹さん、残念だったね……」

どうして佐藤は紅音について知っているのだろう。

俺は学校の誰にも紅音の事は語らなかったはずだ。なんというか、思いつけないだけだろうか。

佐藤の外見にもしやべり方にも、そしてこの雰囲気にも、なんとなく既視感のようなものを感じる。クラス委員だから当然と思っていたが、それだけじゃない何かが。

「うん……なんていうかさ、家族が居なくなるっていうのは、それだけで相当こたえるものだと思うし、ね」

「お前に、分かるのかよ？」

「分からないよ、何せ私、普通だもん」

少女は言った。

自分は普通だと。普通で普遍的で、取り返しがつかないくらいにつまらない人生を送ってきてしまった。まだ私は中学生で、これから楽しいことがあるのかもしれないけれど、つまりはその程度だ。

普通ということは、つまり異常ではないということ。異常ではないということは、つまりは目立たないということ。目立たないということは、つまり、誰からも目を止められず、誰からも必要とされず、誰からもあてにされないということ。

「それが嫌で、クラス委員とか言う面倒くさい仕事をやっているんですけどね」

「なるほどね」

正直、佐藤の心境も気持ちも分からない。佐藤が俺の気持ちを分からないように、俺も佐藤の内面を把握することは困難だ。

「お前って、なんか不思議だな」

「いや、不思議だったら私は普通じゃないよ。普通ってことは不思議なんかじゃなくて、ただただ、普通ってことなんだから」

「なあ、そんな普通なお前に一つ質問をしていいか？」

「何でもどうぞ？ スリーサイズですか？」

「いや、違って」

とりあえずボケはスルーしておき。

「お前、何のために生きてんの？」

「生きるためでしょ？」

「……っ！」

少しだけ、驚いてしまった。

いや、強がりはやめよう。心底驚いてしまった。

「生きるため……？」

「なに？ 阿僧祇君は何のために生きてるのかわからなかったの？」

わからなかった。

今でもわからない。

「生きるのに理由なんて必要ないでしょ？ 自分が生きているって思うだけで、その人は生きているんだよ。誰の為とかじゃない、自分の為に生きて、自分の為に働いて、自分の為に死んでいく。それでも、充分生きているんだよ」

「……」

「まあそうだね、生きている理由なんて人それぞれで、中には見つからない人もいるんだろうけど、私もその一人なのだけれど、たぶん、それでもいいんだと思うよ。強いて言うなら、生きているってことは、行動する事だと思う。生きる理由を見つけるために行動する。それも立派に生きているんだと思うよ？」

「……そうか」

そうなのか。

自分が生きているのかどうか危うかった俺は、今でもちゃんと生きているのか？

毎日をだらだらと怠惰にすごし、くだらないことで喧嘩をして、親とも疎遠になり、なんというか、生きている実感がしていなかったのだけれど、俺は今生きているのだろうか。

「私に生きている理由を聞いたのが、自分が生きている理由を知るためだったとしたら、それは立派に生きている証拠だよ」

俺は一切口に出さなかったのだが、佐藤は俺の心を読んだかのように追い打ちをかけた。

「おっと、少し話しすぎちゃったみたいだねー。それじゃあ今日はこれで」

呆然とする俺をしり目に、早口に別れの言葉をまくし立てると、佐藤はこの公園が面している大通りへと歩を進めた。

「明日は学校来るようにっ」

「あ、ああ……」

彼女の語気に生返事しかできなかったけれど、自然と、佐藤と言う女生徒を不快に思うことはなかった。

いや、逆に言えば、俺は好感すら覚えている。

「んじゃねー」

ふわふわと軽い口調と同様に、身軽そうな足取りで佐藤は大通りの信号を渡った。

なんとというか、終始勢いに押されてしまった気がするけれど、少しだけ良い気分だ。

いつぶりだろうか、こんな気分になったのは。

「明日は学校に行ってみようか……」

そんなつぶやきが自然に口からこぼれた瞬間。
それは起こった。

一台の大型トラックが、佐藤に向けて猛突してきたのだ。
横断歩道の信号はちゃんと青。しかし、大型トラックに止まる気配など微塵にも感じられない。第一、あそこから急ブレーキをかけたとしても、佐藤にぶつかってしまふ。

世界がスローモーションに流れる。

俺の目にはあの時の光景。

紅音が轢かれた時の、あの陰惨で悲惨で、無残で残酷な光景が蘇る。

「あ……あああああああああつ！」

俺は叫びながら、佐藤に向けて突進した。

幸い、距離はそんなに離れていなかったし、全力で跳躍すれば間に合う。

「きゃっ」

佐藤の小さな悲鳴が聞こえた。

俺に押されたことに驚いたのか、それとも猛突してくるトラックに驚いたのかは分からない。それでも、確かに佐藤は轢かれていないであろうことは分かった。

最後の後継、俺が思い切りよく押しすぎたせい、反対側の歩道まで佐藤の体は吹き飛ばされていたからだ。

そして、当然俺はと言うと。

グチャッ

記憶に残っているのとは違う、短い音だった。

気が付けば、夕暮れに染まる空が眼前に広がっている。
ああ、轢かれたのだと、一瞬で理解した。

「……あゝあゝ」

全身が妙に冷たい。

寒い。

試しに少し脇腹をさすってみる。

どろりとした感触と共に、アメリカの科学捜査班とかのドラマでよく見かける、ぬるぬるとしたソーセイジみたいな物体が手にこびり付いた。

ああ、これは腸だ。

「阿僧祇君ッ！ 阿僧祇君ッ！！ ねえ、阿僧祇君ッ！」

佐藤が泣きながら何かを言っている。

全く聞こえない。

はあ、なんで俺はこんな怪我をしているんだっけ？

やばい、すぐく眠くなってきた。

まぶたが重い。

このまま寝てしまおう。

そうだ、明日はまた、学校が終わったら、紅音の見舞いに行つてやらなきゃな。

そう、こうして、俺の不幸の物語は始まったのだ。

デビルアンドアンハピネス 1（後書き）

どうも、籠蟲です。

今回からは主人公の過去編です。

何故主人公は今に至ったのか、そういうお話です。

実は今回出てきた佐藤さん、前章にも登場したのに気付いた方はいたでしょうか？

まあ、主人公も読者様も忘れているとは思いますが（笑）

感想、お待ちしております。

デビルアンドアンハピネス 2

「おい、小僧」

「……ッ！」

見知らぬ天井。

ではなく、見知らぬ空だった。

空なら見知っているだろう、というツツコみは入れないでほしい。本当に、見知らぬ空だ。

灰色の雲がかかって、風も吹かず、まるで時が制止したかのように動いていない。

世界全体が止まってしまったかのように。

「ここは……どこだ？」

見知らぬ制止した世界で、俺は仰向けに倒れていた。

なぜだか、体が動かせない。首すら動かず、かろうじて動くのは眼球だけだ。

「おい、小僧」

そうだ、この声に、俺は目を覚ましたのだ。

なんとなく、どこかで聞いたことのあるような声だが。

その声の主は、声の聞こえてくる方向からして、俺の頭の上に立っているらしい。ただ、そこにいるということだけがわかるのみに、首を動かさないから顔は見えないが。

「……誰だ？」

「誰だ、か。その聞き方は適切ではないな、小僧。それではまるで我が人間みたいではないか？」

なんだ、何言っただコイツ。頭大丈夫か？

「……んじゃあ聞き返すよ、人間じゃないあんたは何だ？」

「端的に言っしまえば、悪魔、と呼ばれる類のものだ」

「……」

絶句。

予想の斜め上どころか、反対側の答えが返ってきてしまった。とんだワイルドピッチだぜ、まったく。

「悪魔っていうのは、神話とかに出てくるあの悪魔か？」

サタンとかベルフェゴールとかルシフェルとか。

「その通りだ」

「……よし、暫定的に信じるとしよう。それで、ここはどこだ？」

「ここは一時的に私が作り出した空間だ」

「で、俺の体は何で動かないんだ」

「動かないのは当たり前だろう。小僧、貴様もうすぐ死ぬんだぞ？」

「は？ 俺が死ぬ？」

おいおい、冗談はよせよ。なんで俺が死ななきゃならないんだ。俺はさっきまで――。

「……………」

さっきまで、俺は何をしていた？

「お前は女子おなこを救うためにトラックとやらの撞おたり潰されたのだ。憶えていないのか？」

「……いや、今思い出した」

そうだ、佐藤がトラックに轢かれそうになって、それで、俺が無我夢中で突き飛ばしたんだっけ。

そして結果的に、俺はトラックに轢かれた、と。

なるほどなるほど、それで俺は自分を悪魔と名乗るこの男に、ここに連れてこられたと。

「まあ、お前のことは信じるしかないとして、なんで俺をここに連れてきたんだ？」

定番な、好きな世界にチート能力を持って転生させてくれる。とかそういう雰囲気でないのは分かるが。

「小僧、我と取引をしないか？」

「取引……？」

悪魔との取引。

死にそうだという自分。

楽しい悪魔。

不安要素だらけなのだが。

「貴様の命を助けてやる。その引き換えに、私の命も助けてほしい」

「お前の、命？」

意外な、かなり意表を突いた取引条件だった。

俺の命を助ける代わりに、俺がこの悪魔の命を助ける。

助け、助けられ、世界は回っているとかそんな綺麗事を大人は言うけれど、あんなものは嘘っぱちだ。

みんなみんな、自分が一番大事で、自分に一番優しいのだ。

「お前の命を助けるには、どうしたらいいんだ？　俺は何をしたらいいんだ？」

「何、簡単なことだ。貴様の体を少し貸せばいい」

「体を貸す？」

「私もこう見えて瀕死状態なのだ。瀕死になり、半殺しにされ、彷徨っていたところで都合よく貴様と出会った。つまりこういうことだ。貴様の体に我を宿せば、私の生命力を貴様に分けてやる。そして、貴様の体の中で我はしばしの休養を取る」

「つまり、命を体をシェアする、と？」

「簡素に言ってしまうえばそう言うことになる。しかして安心しろ。」

我は回復次第貴様の体からは出て言つてやる」

相互にとって悪くない条件ではないか？
と、悪魔は喉を鳴らしながら笑った。

「悪魔の言うことを、信じられるか」

「それは貴様次第だ。貴様が信じるも信じないも勝手。我はもう手持ちの札を見せたからな」

とてもじゃないが、こんな胡散臭い空間で、胡散臭い悪魔と名乗る男に持ちかけられた相談など、信じられるはずもない。
断ろう。

第一、俺は生きてる意味なんて見えてないんだ。

紅音を死に追いやり、クズゴミみたいな生活をして、毎日を無気力にすごし、およそ生きているなんて言つて良い奴じゃないじゃないか。

いつ死んだつて、誰も悲しまない。

悲しむわけがない。

だから、この嘘つきかもしれない悪魔の条件を飲むなんて考えられないんだ。

「どうするんだ？ 小僧」

こいつに騙されて、これから一生苦しみ続けるよりも、いつそこで断つて、自分の命を捨ててしまおう。

だって、そうだろ？ 俺が死んだつて誰も悲しまない。俺だつて悲しまないんだ。

それじゃあ、俺が生きてたつて誰も喜ばないじゃないか。
そうだ。

俺は生きている価値なんてないんだ。

「……………たい……………」

「うむ？」

口に出して言おう。

死にたい。

どこかへ行ってくれと。

「何と言った？ 小僧」

「……………俺は生きたい。死にたくない……………」

俺は何を言ってるんだ。

俺が言いたかったのは全く反対の事じゃないか。

さあ、言い直そう。

「…死にたくないっ！ 俺はまだ、死にたくないッ！」

さらに大きい声で、俺は言うのだった。

「悪魔でも何でもいい。生きたいです……………死にたくないです。お願いします……………うう……………助けてください……………」

知らなかった。

怖い。死ぬのって、こんなに怖いことだったのか。

俺は涙を流しながら、悪魔に懇願した。

「お願いしますッ……………俺を、助けてください」

怖い。

自分の存在が消えるのが怖い。

自分が他の連中の記憶に残らないのが怖い。

もう誰とも話せないのが怖い。

もうおいしいものを食べられないのが怖い。

もう喜んだり悲しんだり、泣いたり笑ったりできないのが怖い。

怖いんだ。

「それが、貴様の答えか？」

「……助けてください」

「ふはははははあ！　よかろう。小僧、我の名を呼べっ！　我が名は、アハネス！」

もう、取り返しはつかないのだろう。

でも、生きられるのなら、それでいい。

紅音はこんな気持ちで、絶望を抱いて死んでいったのか。なんて、悲しいんだ。なんて残酷なんだ

ひどすぎるじゃないか、そんなの。

それでも、俺は名を呼ぶ。

妹の命を助けられなかった俺は、みじめにも、地を這うゴキブリのように、無様に自分の命を助けるために。

悪魔。罪、災厄の象徴。人間をだまし、こかし、貶める存在。にわかには信じがたい、そんな荒唐無稽な者の名を。

ああ、なんといいばいいのか、激情、パトスのようなものが俺の中で湧き上がってきた。

そして、俺は叫ぶ。

「アハネスツ！ てめえ、クソ悪魔っ！ 俺に命を分けるおおおお
おおおおっ！」

――。

「……ッ――！」

今度こそ本当に、見知らぬ天井だった。

シャリシャリと、何か果物の皮をむくような音が聞こえる。

きつい消毒液の匂いから察するに、ここは病院であることは予想できるし、この果物を向く音も理解できる。

なぜか寝起きだというのに、驚くほど眼が冴えているし、頭もすっきりしている。

「……」

ふと音の方向を見ると、そこには俺の記憶の直前まで一緒にいた少女。クラスの学級委員長、佐藤の姿があった。

一見集中して綺麗にリンゴの皮をむいているようにも見えるが、そうではない。

佐藤の顔には不安や焦り、悲しみ、愁いと言った負の感情が如実に表れている。まったく、分かりやすことだ。

「……佐藤、ここはどこだ」

「ッ！ ツ――！ あ……ああ……ああ……！」

どうやら、俺が声をかけて初めて、目を覚ましていることに気づいたらしい。

見るからに取り乱して焦りまくり、持っていたリンゴと果物ナイ

フを取り落としかけている。

「あゝぞうぎんぐうんんん——！」

「……なんて言ってんのかわかんねえよ」

泣きながら、泣きじゃくりながら俺にしがみついてくる佐藤。
うん、なんというか、女子特有のやわらかさとか、匂いとか、そ
う言っつのは気にしない方向で行こう。

というより、あんまり親しくもない男にしがみつかない方がいい
と思う。

佐藤の容姿は普通、とは言っつが、逆に言えば普通に可愛いのだか
ら。

「よがつたよく！ みつがもめをざまざまない
がら、じんじゃったのがどおもったんよ！」

三日も目を覚まさないから、死んじやったのかと思った、と言っ
ているようだ。どんな暗号文だ。

しかして、そうか、俺は三日も眠りこけていたのか。つい数分の
ような感覚があるが。

確かに腕には点滴の針が刺されているし、横の机には俺の洋服が
山積みになされていた。

よく見てみると、佐藤の目の下にはひどいクマが出来ているし、
髪もぼさぼさだ。

「グスッ……阿僧祇君、憶えてる？ 阿僧祇君は私を助けようとし
て大けがしちやっただよ……？」

「……ああ」

憶えている。憶えているともさ。覚えさせられたと言っている。というより、先ほどの悪魔との会話、あれは本当に現実だったのだろうか？

夢にしてはやけに鮮明で、記憶の奥底に刻まれたような、まるで契約の刻印のような会話だった。

「俺はどうだったんだ？ 怪我の具合ってどうか、程度ってどうかさ」

「えっと、全身打撲に脳震盪。何でかよくわからないけど、骨はどこも折れてないらしくてさ、お医者さん不思議がってたよ」

俺は試しに脇腹をさすってみる。

記憶が確かならば、この辺りがパツクリ割れて、腸がドロドロと流れ出ていたはずだ。

結果、何もなし。それどころか、傷口を縫った後すらない。

少なくとも三日で消えるわけもないだろう、あの傷が。

「……本当に生きているんだな、死んだかと思ったぞ」

しかも、意外と元気。

「それはこっちのセリフなんですけどね」

少し嫌みを聞かせた佐藤は、その後コホンと一つ咳払いを入れると、俺に向き直る。

「本当にありがとう。阿僧祇君は私の命の恩人だよ」

真剣な顔で、礼を述べたのだった。

「やめてくれ……俺は礼を言われるようなことをしたつもりはねえよ。それに、あれは単に俺が勝手にやったただけだ」

「それでもだよ、私は阿僧祇君には感謝しきれないくらい感謝しているんだよ。本当にありがとう」

「……まあいいか、受け取っておくよ。それで、俺の親は来てないのか？」

「いや、今ちょうど洋服を取りに帰っちゃったところかな。あ、そうだ、何か欲しいものはない？ お水とか食べ物とか――」

「んじゃあ、抹茶オレを」

「寝起き一発目で飲むものじゃないね……」

「いいじゃないか、好きなんだから」

「わかった、買って来るよ。あと、行きざまにお医者さんに目を覚ましたって報告しないと」

というより、今までしていなかった方が驚きだが。

「行ってきます」

佐藤が席を立ち、部屋を出ていく。

扉が閉まるとすぐに、俺は自分の体を見回し、実際に触ってみる。

「何にもないな……」

俺の言葉通り、俺の体に異常と言った異常は全く見当たらない。関節の駆動もいつも通りだし、どこも痛くない。それが俺を、不安にさせる。

「あんだけ派手にトラックに撞り潰されて、外傷が全くないってのも、おかしい話だよな」

佐藤の話では全身打撲らしいけれど、それでも大けがだ。そんなものが三日やそこらで治るものなのか？

答えは否だろう。

「……まあ、考えても仕方ないのは分かってるんだが」

悪魔について、今の俺が分かることは何もない。

希望的観測ではあるが、本当はあれが全部夢で、実際俺の運がよくてこの傷におさまっているのかもしれないしな。

改めて病室を見渡してみると、至って普通の四人部屋だった。だが、今は空きベッドが三つ。つまりはこの部屋は俺の貸切状態になっている。

まあ、たまたまだろうけれど。俺の家は特に金持ちとかそう言うのではなく、中流階級だし。

と、そこで、突然扉が開けられた。

佐藤が帰ってきたのかと思ったが、見ると、おとなしそうな顔をした看護師だ。

おそらくは、様子を見に来たのだろう。

「阿僧祇蒼真君、聞いたわよ。意識が戻ったんですって？　よかった」

「……」

若い看護師は突然言葉を切った。

大きめの丸い目をこちらに向け、目いっぱい見開き、茫然として
いる。

まるで信じられないものを見るかのような目。

さながら、化け物でも見るかのような。

「……？ えっと、あの、どうしたんです？」

「何であんたがここに居んのよっ！」

突如、看護師が怒声を俺に浴びせた。

部屋にビリビリと反響して、振動させるのではと言っほどの音量
だ。

ここが病院ではなく、相手が看護師なんかではない、と錯覚させ
るほどに、この場に似つかわしくない激昂。

目が血走るほど見開き、頭から湯気が出るのではないかと思うほ
どの気迫と殺気。

「意味わかんない意味わかんないっ！　なんであんたがここに居て、
ベッドで寝てんのよっ！　死ねっ！　くたばれゴミがっ！」

意味わかんないのはこっちだ。

というより、この反応は完全に異常だ。看護師が異常なのか、俺
が異常なのかはわからないが。

「あれだけのことをしておいて、よく私の前に出てこれたわねっ！
本っ当、私がどれだけ——……って、え？」

激昂したかと思えば、今度は戸惑っている。

「えっと……阿僧祇くん？」

「……ええ、そうですね」

「あ、あわわわわ！ 私ったら、なんで人間違いなんか……えつと、その、ちよつと、その、なんていうか、ごめんなさい！ 取り乱しちゃって！」

「……はあ」

俺もなんと返せばいいのだろう。
すこかったですよ、とか、そう言うことを言えばいいのか？

「えつと、私ったら、点滴変えに来たのに……。本当にごめんなさい？」

「いえ、別にいいですけど。どうしたんですか？」

「い、いや、大したことはないのよ？ 本当に大したことないからね？ えつと……今のは先生には内緒で……」

「あ、ええ」

俺との間に流れる微妙な空気に耐えられなくなったのか、看護師はまた来ると言ってそそくさと病室をあとにした。

「何だっただよ……」

意味が分からない。

想像してみて欲しい。入院して病室に居たら看護師が入って来て、いきなり看護師に怒鳴られて、かと思ったら勝手に戸惑われるときの心境を。

意味不明だ。

俺の顔に何かついていたらとしても、あんな反応にはならないだろう。

あれじゃあまるで、『別人に見えた』みたいじゃないか。

「はあ……」

一応、鏡でも覗いておこうか。

と、そこで俺はやめておけばいいものを、病室の入り口に設置されている洗面台の鏡を覗いたのだった。

やめておけばいいものを。

試しに覗いてみると、どこからどう見ても普通の顔。俺の顔。ではなかった。

「よう、小僧。体の調子は良からう?」

「あ……え……あ?」

鏡の中の、俺がしゃべっている。

鏡に映った俺は、意地の悪そうな顔を隠すそぶりもなく、口元を引き上げていたのだった。

「五体満足にご満足していただけたかな?」

まったく、面白くない。

「お、お前——っ!」

「なに、驚くことはない。我と言う存在は、ただのしがたい悪魔で、今は小僧。貴様自身なのだからな」

クツクツと喉を鳴らし、俺という悪魔は下品な笑みを浮かべたのだった。

デビルアンドアンハピネス 2（後書き）

妖怪図鑑 NO 3

名称：影鬼

関係者：水鏡蒔拿

登場話：シャドーインザフレンド 1～4

備考：

シャドーインザフレンドに登場した鬼の一種。

司るものは人間の影であり、地獄に來た罪人を裁くとされている。その方法は決められた範囲で罪人を泳がせ、影鬼に影を踏まれるか死ぬまで走り続けるという過酷なもの。現代での遊戯、影鬼のモデルにもなった妖怪で、影を踏んだ対象を縛り付ける能力を持つ。劇中では主人公の学校の生徒会長に乗り移り、体に乗っ取るうしてしましたね。

と、ここまで語って来ましたが、これは全部設定の中でのお話です。ね。

影鬼の起源なんて僕が知るわけじゃないですか、あっはっはっはっは……… ちょ、殴らないで。

感想お待ちしてます。

デビルアンドアンハピネス 3

最悪だった。

最悪という言葉が出てくるうちは、まだ最悪ではない、と誰か偉い人が言っていたような気がするけれど。

言うまでもなく、最悪だった。

不幸にも、不運にも、ひどい目にあつた。

あれから三日が経過し、検査の結果体の不調が見られないということで、即刻退院することになった。車に轢かれて六日で退院できたのは、この悪魔のおかげと言わざるを得ない。

いや、そこまでならいいんだ。

別に俺は長い時間入院して親の金を浪費させるつもりは無い。だが、その後がひどかった。

歩いていると、通りすがりの人にすごい形相で殴られる。

夜道で〇に悲鳴を上げられて逃げられる。

ひどい形相で睨まれることなんてしょっちゅうだ。

どれもこれも、おかしい出来事である。

もちろん俺はその人たちとは初対面だし、殴られる憶えも悲鳴を上げられる憶えもない。これじゃあまるで、俺が何か恐ろしいものや憎いものに見えているみたいじゃないか。

「何なんだよ…… いったい」

自然にこんなセリフがこぼれてしまうのも、なんとか了承してほしい。

といつても、これは独り言ではないので、了承も何も無いが。

「俗に言う弊害、という奴だな、小僧よ」

自室の鏡に向かってしゃべりかける俺。

それに対して当たり前かのように返答する鏡の中の俺。

他人が見たら、確実に俺の精神を疑う光景ではあるが、今はそんなことに悩んでいる場合ではない。もっと他のことについて悩まなければならぬだろう。

鏡の中の俺、こと悪魔アハネス。現在はお互いが死にかけているという状況を打開するため、一時的に俺の体を二つの存在がシェアしている状態にあるのだが。

「んで、お前と俺が命を分け合ったことに、どんな弊害が出てるんだよ？」

「簡単に言ってしまうえば、我の力の片鱗が貴様に現れてしまった、ということだ」

現れてしまったじゃねえよ。こっちはそのおかげで結構なひどい目に合ってるんだ。

まあ、コイツもコイツでどうしようもないことなのだろうけれど。

「それで、お前のその『力』っていうのは何なんだ」

「……小僧、天使と悪魔の違いを知っているか？」

「天使と悪魔？ 違いっていうのは、どういうことだ？」

「そのままの意味だ。天使と悪魔の相違点」

「そりゃ、『良い』か『悪い』かだろう」

良い方が天使で、悪い方が悪魔。こいつは後者である（自分で名

乗った）。

「その通りだ。だが、そうではないのだ」

「……？　どういうことだ？」

「天使と悪魔の違い、それは小僧の言うとおり、良き行いをするものが天使であり、悪き行いをするものが悪魔だ。それは間違いない。だが、しかしてそこに善意の有無も悪意の有無も関係ないのだよ」

「善意の有無？」

「そうだ、実際のところ、悪魔と天使に大した相違点はない。どちらにも『力』というものを持った人間ではない存在。つまるところそれを区別するのは、良いか悪いか、の二択のみ。例え悪意をもって力を振るったとしても、それが良き力であればその者は天使であり、たとえ善意をもって力を振るったとしても、それが悪き力であればその者は悪魔なのだ」

要するに、コイツが言いたいことはこういうことだろう。

悪魔も天使も大した違いはなく、持っている『力』が人ないし他とって良い力であれば、それは天使。持っている『力』が他に悪影響を及ぼすならば、それは悪魔。

その程度の違いしかない二者であり、その間には絶対的な壁がある。

天使と悪魔、対の存在。

「貴様の質問に答えるとするならば、そういうことだ。私の力は人に悪影響を及ぼす。ただそれだけのこと」

「ん、まあ、このくらいは覚悟の上だからいいんだけどな」

どうやらコイツは言いたくないようだしな。

命ある限り、どうとでもなるだろう。

命が無ければ、どうにもならないが。

「とにかく、今の俺は嫌われ者ってことか」

「そう言う認識が、貴様にとっては正しいだろう。なに、安心しろ。我も我で自分の力はなるべく押さえつけるようにしている」

「それは感謝するよ。んで、そっちの傷の具合はどうなんだ？　つていうか、悪魔って傷ができるものなのか？」

「それは当たり前だろう。聖剣で刺されれば血も出るし、聖水をかけられれば溶けるし、悪魔祓いの呪文を唱えられたら退散するしかない。悪魔とは、いつだって貴様ら人間が思い描く通りの生き物なのだ」

人間の思い描く通りの生き物。

人間が信じ、愛し、信仰し、憎み、憤慨し、祈ることによって存在しうる存在。

「逆に言ってしまうえば、ただそれだけの存在。不安定かつ、脆弱な存在なのだ。悪魔も天使も、死神も鬼もな」

「まあ、お前のことを理解しようつても、無理な話だろうな。仮にもお前は悪魔だし、それに今は俺自身だ。俺には悪魔の事も自分の事も理解できねえよ」

「……貴様、自身か」

「ん？」

「いいや、なんでもない。それよりも、小僧、貴様学校がどうか言っではいなかったか？」

「ああ、そうだったな」

今は朝の七時半。つまりは起き抜けに俺はこうして悪魔と会話していたわけである。

「しかし、学校と言う場所は何百人もが同じ時間に集まって、そろいもそろって同じことするところなのだろう。中々に狂った場所じゃないか？ それこそ新興宗教のようにな」

「ん……まあそうなんだろうけどさ、いや、そういうことを俺も考えたことはあるけれども。やっぱり人間にはルールってものが必要なんだよ。学校っていうのはそういうのを学ぶためにあるんだ」

たとえば、交通ルールとか。

「ルールがないと生きていけないのか」

「まあ、混乱はするだろうな」

いや、混乱どころじゃないか。

「まあ、お前にとって人間ってのは不可解極まりないものなんだろうけどさ。俺っていう人間からしたら、お前も相当不可解なんだぜ」

「？」

「それは当たり前だろう、何せ我は悪魔だからな」

怪異、都市伝説。人間の空想の産物と、今こうして話していると
いう不可思議な状況。

荒唐無稽にして奇々怪々と言わざる負えない。

「学校ではあまり話せないからな」

「承知した」

悪魔悪魔と言う割には、意外にも、素直な奴だった。

少し常識はずれなところは無きにしもあらずだが、それでも、こ
の鏡を通して話している奴が、悪魔などとは到底思えない。

アハネス。自称大悪魔。

「それじゃあ、よろしく」

こうして俺は学校に向かったのだが、向かったはいいが、そこで
もやはり、アハネス曰く”弊害”というものが起きた。

誰にでも人違いはあれど、今の俺の場合それが顕著と言うか、す
でに異常の域にまで達しているのである。

簡単に語ってしまうが、まず道行く人が怪訝、もしくは憎しみ怒
りといった表情を浮かべる。ここまでは今まで通りだが、やはり、
学校生活に異常を来し始めるとそうもいかない。

廊下をとある女子に泣き出されるわ、男子にぶん殴られるわ、教
師にとてつもない目線で睨まれるわ、ろくなことがなかったのだあ
る。

「……阿僧祇君、何かあったの？」

「いや、別になんでもないんだ……」

休み時間、佐藤に声をかけられた。

俺がこうなった原因の少女。あれから、何かにつけて俺に話しかけてくるようになった。特にうれしくもないのだけれど、別に嫌でもない。

「何もないさ、本当に」

どうして俺はこの女子を安心させようとしているのだろう。わからない。

「そう、何かある時は何か言っただろ？ 学級委員長として、いや、一人の女子生徒、佐藤詩織としても、できる限りの力になるつもりだから」

なんというか、こう言ってもらうのはうれしいのだが、出てくる感想は、『フルネーム、初めて聞いた』だけだった。

「いま、すぐく失礼なことを考えませんでしたか？ 名前そんななんだ、みたいな」

「いやいや、そんなないさ……」

「なんで舌回ってないの？」

噛んでしまった……。

「まあ、いいや。今日さ、一緒に帰ろうよ」

「……一緒に？」

「うん、改めてお礼、しとなくちゃさ。なんてったって、阿僧祇君は私の命の恩人。大恩人だよ」

「いや、いって、そういうのはさ。ほら、この間抹茶オレ奢ってもらったし」

「いやいや、そんなんじゃ物足りないよー。私の親もお礼したいって言ってるし。阿僧祇君すぐ退院しちゃったから、忙しくて会いに来れなかったんだって」

「えっ……」

それは何と言うか、すごく会いたくないです。

いや、会う分にはいいけれども、なんというか、自分の娘の恩人がこんなどうしようもない不良だと、どうしてもがっかりするとうか、うん。

「それともなんですか？ 私の命は抹茶オレくらいの価値しかないと言いたいんですか？」

「……」

押し負けてしまい、結局一緒に帰ることになった。とりあえず、親との謁見だけは取りやめてもらったが。

などと、のんきなことを言っている場合ではなかったのである。片時も、一瞬たりとも、忘れてはならなかったのだ。俺が悪魔で

あり、その力の片鱗を見せているということ。他人から忌み嫌われ、嫌悪され、どうやったって害をなす悪魔だということ。

この時、俺は心底後悔することになる。悔やむことになる。

佐藤の提案を無理やりにも断つていれば、あんなことにはならなかったのに。

俺は、この時、佐藤の笑顔のおかげで、自分が今不幸だということとを忘れていたのだ。

二人での帰り道、この時の俺にとって、決定的なことが起こってしまった。

「いやいやー、しかし阿僧祇君と一緒に帰ってくれるとは思いませんでしたよーっ」

なんだかご機嫌な佐藤だった。俺の隣をルンルンとスキップでもするかのようなテンポで跳ねている。

「お前が誘ったんだろ」

「そうだねーっ」

何がそんなにうれしいのだろうか……若干佐藤に恐怖を感じる。

「それで、お礼つてのはなんなんだよ？」

「いやあさ、ほら、阿僧祇君ってどこか行きたいところとか、何か食べたいものとかある？」

「ないけども」

「そう言うと思った。それでね、私考えたんだけど、聞いてくれる

かな？」

「うん？」

「えーつとねー……」

その時だった。佐藤に後ろから誰かが衝突してきた。

一見、ただ誤ってぶつかってしまったただけだともとれるが、場所が場所だ。ここは結構広い大通りで、こうして俺たちのように中学生の帰り道にもなっているような場所である。

まず、衝突はありえない。

「……？」

さらに不自然なことに、衝突の瞬間、佐藤が大きく目を見開いた。まるで信じられないことが起きたかのように。

と、そんなことを観察しているうちに、衝突してきた髪の長い女性が一歩ほど後退し、俺達から距離を取った。

「ふふふふふ……」

笑っている。相手の女は、不気味に、不敵に、俯きがちに笑っていた。さながら、悪魔のように。

「……？　おい、さと——」

ドサッ

俺が佐藤に声をかけようとしたとき、突如として佐藤が前のめりに倒れ伏せた。

られ、ようやくここで起こっている事態を把握したのか、周りの人間が集まり始める。

だが、この状況のただならぬ雰囲気を感じ取ったのか、誰一人として佐藤に近寄って介抱する者はいなかった。

「ちつくしょう……！」

何を勘違いしていたんだ、俺は？ 何かが決定的に間違っていて、どうしようもないくらいに拗れていて、それでいて単純明快。

悪魔の力の片鱗。嫌われ者の悪魔。不幸の悪魔。

そいつのことを、俺はほんの少しでも信用してしまったからか？
心を許してしまったからか？

俺は今朝思ったことを思い出してみる。

この悪魔は結構素直な奴かもしれないと、話のできる相手なのか
もしれないと。

そんなわけあるか、そんなわけあるわけない。バカか、俺は……！

「そうだ……」

この時俺が具体的にどんなことを考えていたのか、実際によく思い出せないが、とりあえず、近くにある鏡と言う鏡をぶち壊そうと思ったことだけは、憶えている。

デビルアンドアンハピネス 3（後書き）

まずは謝辞を。

遅れしまい、大変申し訳ありませんでした！

と、まあ、遅れた理由に關しましては、僕のことを多少なりとも知っている方はご存じのはずですが、そう、私籠蟲は受験生であります。

受験……ぐえっ。なんて言っている間に、こんなに月日が経ってしまいました、重ねてお詫び申し上げます。

これからも更新頻度は遅れてしまうことが予想されますが、なにとぞ、温かい目で見守っていただければ幸いです。

感想、お待ちしております。

デビルアンドアンハピネス 4

ピッピッピと、一定リズムを刻む嫌な電子音が部屋中に響き渡る。

「……佐藤」

佐藤は今、俺の目の前で眠っている。

体に色々な器具を付けられ、まるで、死ぬ寸前のような状態で、いや、これは比喻表現ではなく、実際、この少女は生死の境をさまよった。背中をドデカイナイフで刺されたんだ。そりゃ、そのくらいにはなるだろう。しかしながら、刺されたあの後集まってきた周りの連中が素早く救急車を呼んでくれたおかげで、一命を取り留めることができた。

あの女はすぐさま警察に取り押さえられ、事情聴衆を受けている最中だという。俺もこれから、警察に呼ばれているとことだ。

佐藤の両親もさっきまで居たのだが、着替えを取りに行くということで、一旦家に戻っている。

要するに、俺は病室に一人取り残されているのだった。

「……本当に……すまない」

この土下座に何の意味があるのかと聞かれれば、はっきり言って、何の意味もない。

しかし、俺はただただ自己満足の為に、誰も見ていない中、佐藤に向かって深々と土下座をしたのだった。

俺が、迂闊過ぎた。

これ以上ないくらいに、最悪で、最低で、大ばか者だった。

少し考えればわかるだろう。今の俺は悪魔と同じ嫌悪すべき存在で、その嫌悪すべき存在の近くにいた奴に矛先が向いてもおかしく

ないことくらい。

本当に、取り返しがつかない事をしてしまった。
取り返しがつかないからこそ、これからどうするか、なのだが。

「少し、行ってくるよ……色々なものを清算しに」

そうだ。

起きてしまったことは仕様がなない。それはもう過去で、取り返しがつかないことなのだから。

大事なものは、これからどうするか。

このまま一生とはいかずまでも、悪魔が俺の体を離れるまで嫌われ者のままで居続けるのか。

それまでずっと、周りの人間の精神をすり減らし、問題の渦中に巻き込み、どん底に突き落とすのか。

それまでずっと、こんなことを続けるのか。

「んなもん、クソ食らえ……！」

失敗は一回で十分だ。もう学んだ。

俺は、生きていてはいけないんだ。

不幸すぎて、不運すぎて、周りにまで迷惑をかけ続ける悪魔など、死んでしまえ！

俺は病室を転がるように飛び出した。そして、その足でトイレに駆け込む。とにかくにも、鏡のある場所へ。

「おい……クソ悪魔……！」

俺はトイレの鏡の前に立つと、辺りに人が居ないことなど確認もせずに言葉を投げかける。

「ふん、どうした？ 小僧？」

「どうした？ どうしただと？ 知ってるんだろ、佐藤が刺された」

「ああ、知っているな、だからどうした？」

「今すぐ俺の体から出ていけ」

鏡の中の俺は、眉をひそめる。まるで、理解不能なものを見るような目で。

「契約違反、という言葉はこの際隅に追いやって問うてやろう。なぜだ？」

「俺が、俺達が他人に迷惑をかけるからだよ。生きていちゃいけない存在だからだよ」

「それで、我にも死ね、と？」

「悪いが、他の所に移ってくれ。理不尽なことを言っているのは分かっているつもりだ。だが、もう決めたことなんだよ。すまない」

「もし、出て行かない、と言ったら？」

悪魔は、俺を試すように目を細め、問う。

「お前も俺と一緒に死ぬことになる」

いや、この際この悪魔が、俺と言う存在ごと食らってくれるとありがたい。

悪魔は悪魔の帰るべき場所に還り、俺は俺の終着点へと帰る。

あの時、佐藤を押したとき、俺はトラックに潰されて死ぬはずだったんだ。本当はあの時、死ぬべきだったんだ。

それを俺は、自分可愛さに悪魔と言う因果もくそもない存在に頼って、生きながらえてしまった。それが、そもその間違いだ。

「なるほど、貴様の言い分は分かった。しかしな、世界と言うものはそう都合よくはいかないのだ。我と言う存在を受け止められるほどの人間は、この世に何人も居はしない。我は貴様が、それ程の精神力を持っていると踏んだのだから？」

「悪いが、俺を買いかぶりすぎだ……。俺は、ただ生きたかっただけだ。生きていたかっただけだ」

「そうだな、貴様は生きたかったただけだ。そして、我も同様に」

「……」

そう、俺が逡巡している理由、それは、この悪魔の生命についてだ。

このさい、俺の命なんてちっぽけなものはどうだっていい。しかし、この悪魔の命までも、無意味に奪われることはないんじゃないか。

悪魔は悪魔、悪しき者。しかし、それでも、立派な、”命”なのだ。

それはとてつもなく大切なもので、世の中の言うとおり、かけがえないものだ。それを守るために、俺は、俺達は、今の関係を気付いたように。

「……この際だからな、小僧。貴様に機会、チャンスをやろう」

「チャンス……?」

悪魔は、俺にささやく。まるでそれは、命の取引をするように。

「そう、その為には、まず舞台の上に上がってもらわねばな」

悪魔がそう言うと同時に、俺の視界がブラックアウトした。

「……っ!？」

見知らぬ天井でも、見知らぬ空でもなく、一度だけ、見た空だった。

あの時、俺が死にかけたとき、悪魔と会った場所。俺と悪魔の、出発地点。俺は今再びその場所に立ち尽くしていた。

「こうして会うのも久しぶりだな、小僧」

「……よう、アハネス」

俺の目の前には、俺が居た。

鏡でも置かれているように、俺と寸分たがわぬ姿をした悪魔が、鋭い眼光で俺を睨んでいる。

「いつまで、鏡の中居るつもりだよ。本当の姿を出せ」

「クク…… 本当の姿、か」

「……何がおかしい?」

「小僧、貴様はどうやら我と言う存在を勘違いしているようだな」

「なに？」

「我に”真の姿”など無いのだよ。我は存在無き悪魔。不幸の悪魔だ」

「何が言いたい」

「貴様は不思議に思わなかったのか？ なぜ貴様と対話するとき我は鏡を通していたのか。なぜ貴様の姿をして対話していたのか」

悪魔は語る。

まるで無知な子供に童話を聞かせるように、優しい口調。

「我は姿を持たぬのだよ。いつだって、どこだって、誰にだって、嫌悪され忌避される姿で現れる。言うなれば、悪夢のような悪魔だ」

誰に対しても嫌われる。

睨まれ、暴行され、悲鳴を上げられ、憎む相手と間違えられる。

「故にこれが真の姿。『貴様にとって一番嫌悪すべき対象』、それが我だ」

「……そうか」

そうか、そうだったのか。

妹が死んだ。世界を呪った。クラスメートが刺された。

散々嫌なことが起きて、不幸なことが起きて、どうしようもなくなつて、世界を呪った。悪魔を恨んだ。

だけれど結局は、俺が一番嫌いだったのは、”自分自身”だったということか。

妹を救えなかった自分。何に対しても無気力になった自分。気まぐれなんかで同級生を助けてしまった自分。悪魔と契約してしまった自分。クラスメートを守れなかった自分。

俺は俺自身が世界一嫌いだ。

だから、この不幸の悪魔は俺の姿で俺の前に立っている。

「力の片鱗とはそう言うことだ。貴様は少なからず我の力を使ってしまった。故に貴様は、否、我らは周りの人間から嫌悪され恐怖されたのだ」

ナースさんに怒鳴られたのも、通りすがりの人に殴られたのも、学校の連中に睨まれたのも全て、俺が相手にとって一番憎むべき相手に見えていたにすぎないということか。

そして、佐藤をさした女に対しても、俺は憎むべき対象に見えていた。これは推測だが、おそらくは昔の男か何か。だから近くにいた女の佐藤が刺されてしまった。

「そういつ……ことかよ」

「さあ小僧、ここからが本題だ」

「……俺をここに呼んだ理由か」

「そう、我は神でもなければ天使でもない、悪魔だ。しかし、貴様に破格のチャンスをやろう」

「さっきも言ってたな、チャンスってのはなんなんだ」

「なあに、簡単なことだ。純粹なる殺し合い。純然たる殺し合い。これから我々は殺し合いをする。そして、勝った方が生き残る」

悪魔が言うには、つまり、俺と悪魔が殺し合い、勝者が生き敗者が死ぬ。

俺が勝てば悪魔は消滅。俺は今まで通り『人間』として生きられる。逆に悪魔が勝てば、俺は死に、この体は悪魔の物。

完全に常軌を逸した、バカげた戦いだ。

「……して、どうする小僧。貴様に選択権をやろう。一つ、この体を我に明け渡し、貴様が死ぬ。一つ、我と殺し合いをする。さあ、どうする人間風情」

「……………」

この感覚は、この前味わったばかりだ。

佐藤をかばってトラックに轢かれ、擣り潰されたときも、こうやって選択を迫られたのだった。

人生は選択の連続だ、なんていうのは誰の言葉だったか思い出せないけれど、それでも、こんなに頻繁に生き死にの選択を迫られるなんて、その誰かも予想できないだろう。

考えるまでもなく、答えは決まっている。

そう、生物の本能に従うだけだ。俺が最初に下した最初の選択肢を、最初の通り選ぶだけだ。

ほかでもない、誰でもない、どうしようもない、どうすることもできないじゃないか。

「お前を殺して、俺は生きる……。どんなに醜かろうと、どんなに滑稽だろうと、俺は今生きているッ！俺は生きてるんだよッ！畜生がッ！」

「クハッハハハッハッ！　それでこそ我が宿主、器を持つているのが貴様で本当に良かったッ！　さあ、我と貴様の物語は、ここが始まり、そして、終着点だッ！　貴様の命を刈り取り、我は生きるッ！」

「他人おれの姿でおかしなことやってんじゃねえよ」

それがこの悪魔。不幸の悪魔の魂胆だ。

「これが貴様の一番憎き姿だッ！　容赦なく爪を突き立てろ、首を食いちぎれ、顔面を掻きむしれッ！　それが貴様の答えならば、その凶手を振るえッ！　幸も不幸もない交ぜにして、我は存在を証明する」

「……………」

「改めて、名を名乗ろうか。我が名はアハネス！　不幸の悪魔、unhappiness。小僧、貴様の名をまだ聞いてはいなかったな、我も名乗った、貴様も名を名乗れッ！」

「俺は……俺の名前は阿僧祇蒼真。単位の阿僧祇に、青せいそう蒼の真実。さあ、締めくくろうぜ、終わることのない非日常を」

先に踏み出したのは俺だった。

全てが止まってしまった世界で、俺は鏡写しの俺に向かって駆け出す。

体が恐ろしいほど軽かった。そうだ、ここは俺の精神世界だった。今なら何でもできる気がする。今なら悪魔にだって勝てる気がする。俺は激昂していた。悪魔は高笑いを上げていた。お互いの命を賭

けて、お互いの存在を賭けて、長いようで短い戦いが幕を開けた。

二つの同じ形の影は交わり、そして、勝者と敗者が生まれた。

デビルアンドアンハピネス 4（後書き）

約一か月ぶり、本当にお久しぶりです。

失踪したかと思われた方も居ると思いますが、否、僕は失踪などしません。

むしろこの一か月間、疾走してたくらいですよ。（全く面白くない）

あんまりこうやってダラダラと書いていると、自分までダラダラしてきそうになってしまいますので、手短に済ませてしまいたいです。

受験も峠に入って参りました。

合間合間にこうして書いて、これからもこのように投稿していきたいと思いますので、何卒よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3046r/>

高校生の日常？

2011年11月17日06時20分発行